

## 創立者にみる、若き日々の読書 —創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

菲 沢 賢 一

### 1. はじめに

創立者池田大作先生のご思想をまとめた著作は多いが、著者自身を自ら語った書は『若き日の日記』と『私の履歴書』をおいてない<sup>(1)</sup>。『若き日の日記』は、著者の人間形成の礎とも言うべき「青年期」の記録としてはまことに貴重であり、著者の人間形成の上で計り知れないほどの影響を受けた戸田城聖と巡りあい、公私にわたり、最も多感な青春期の10年を師事し、奮闘してきた日々を刻んだ「青春の記録」である。

「日記」は、昭和24年1月、21歳で日本正学館に入社して、戸田城聖の直々の薫陶を受け始めた、昭和24年5月から筆を起し、昭和35年5月、恩師の跡を継いで、創価学会第3代会長に就任するまでの11年間に「日記」の舞台である。「日記」は断片的に綴られたものであるが、秋霜烈日の日々の中で、峻厳なる師弟の絆を凝結した片言隻句は、時として、赤裸々な姿を描写して余りある。様々な困難と戦いつつ、懸命に生き抜いてきた姿が行間の此処彼処に滲みでている。今日、著者が仏法の人間主義、生命主義を基調に、「平和・文化・教育」のために世界を駆け、行動する原点が、人生の師を求め、師と共に戦ったこの青春の日々の記録の中に綴られており、かけがえのない青春の一書である。

『私の履歴書』では、今まであまり触れられていなかった創立者の少年時代が克明に描かれている。「人の一生には、他者には見えない奥行きをもった深層の部分があるように思われる。それが少年時代の過ぎし日々でもあったろう。少年の日の心の燃焼は生涯を貫くものに違いない…<sup>(2)</sup>」人生の師に邂逅するまでの心の軌跡が我々の胸を打つ。

青春時代の読書記録として『若き日の読書』『続・若き日の読書』『読書ノート』等がある<sup>(3)</sup>。これらの著作はいわゆる読書論とはいささか趣を異にしている。むしろ知識を求め、触発を求め、人生の道を求めた青春の魂の遍歴であり、古今東西の名作・古典との対話といってよい。

創立者の魂でもある「池田文庫」のなかから、青春時代の読書記録と『若き日の日記』をもとに、関係する著作を渉猟する。

なお、便宜のため、『若き日の日記』の記述をもとに、読書に関する部分を抜粋し、編年体で別紙のリストを作成した<sup>(4)</sup>。一部、参考資料により、付加している部分もあることをご了承願いたい。

### 2. 「池田文庫」について

創価大学中央図書館に「池田文庫」が開設された時に、「池田文庫」について当文庫の紹介を行っている。その紹介文を引用したい<sup>(5)</sup>。

「当文庫は、創立者池田先生が、創価大学の将来を考えて提案されたもので、創立者の若き

日から、収集された蔵書約7万冊で構成されている。池田先生は、『学生の皆さんが、大いに読み、活用して実力を磨き、成長してくれるならば、こんな嬉しいことはない』とのご配慮から、創価大学図書館に託してくださいました。このうち、このほど5万冊の整理が完了し、名称は、関係者の要望により、『池田文庫』と命名され、オープン致しました。蔵書は、哲学、歴史、社会科学、自然科学、芸術、文学など多角的で、幅広く、学術的にも優れた図書が網羅され、また、なかには、15歳の頃より揃え、戦時中に防空壕へ運んで、戦火を免れた貴重な書籍もあります。『勉強すべき時に勉強するのが、幸福な青春なのである。一生涯の礎石となる』にふさわしい当文庫の誕生を喜び合うと共に、大いに活用していただき、互いに一層の成長を期したいと念願しております。

平成9年5月8日 創価大学中央図書館

平成9年5月8日、中央図書館4階閲覧室で午前10時半から行われた開設式には、小室金之助学長、三森茂郎図書館長の挨拶でオープニングセレモニーが行われ、教職員と学生の代表が参加。書庫内の図書を見学し、学生は創立者が何度も、何度も読み返し、深い研鑽をされた跡がしのばれる図書や、当時、食費や、宿泊費を切りつめて買った図書など、我が子のように大事にしてこられた本の数々を手にして感激の面持ちであった。

開設式では、三森図書館長が「蔵書をどんどん利用し活用して、世界にはばたく人材に成長してほしい」と挨拶。小室学長は、これらの蔵書は永久に残る創価大学の財産であるとし、「創立者が読まれた本を手にして、同じ感動、同じ喜びを感じてほしい」と述べ、「建学の精神」を体して「世界一」の創価大学を目指そう、と語った<sup>(6)</sup>。

これらの図書は、昭和55（1980）年11月12日、聖教新聞社本社別館で「池田文庫」の名で開設、公開されたことがあり<sup>(7)</sup>、平成5（1993）年7月、滝山祭の折り創価大学へ寄贈されたものである<sup>(8)</sup>。

蔵書の内容は、思想、哲学から、歴史、社会科学、自然科学、工学、産業、芸術、言語、文学など広範囲にわたっている。図書は、中央図書館（A書庫）7層書庫に、NDC（日本十進分類法）により配架されている。

「苦勞すべき時に苦勞し、勉強すべき時に勉強するのが、幸福な青春なのである。一生涯の幸福の礎石となる。“学問の闘士たちよ、徹して学べ！未来のために”この創立者の思いが「池田文庫」にこめられている。

### 3. 『読書ノート』から

昭和39（1964）年3月号から8月号に6回にわたって『第三文明』誌上に発表されたもので、昭和21（1946）年から22（1947）年頃の雑記帳に示されたものである。

読書ノートの冒頭には「一書の人を恐れよ。○書を読み、書に読まれるな。○自己を作る事だ。それには、熱烈たる、勇気が必要だ。○柔善、虚偽、軟情、すべてを排せよ。真の青年たる者よ、真実の人生を歩め」などの抜書きが列記されている。

読書ノートには、国木田独歩『欺かざるの記』、徳富蘆花『自然と人生』シルレル、カーライルの箴言、勝海舟語録、石川啄木『一握の砂』『悲しき玩具』ダーウィン『種の起源』長与善郎『竹沢先生と云ふ人』『陸奥直次郎』ジャック・ロンドン『奈落の人々』バクーニン『神と国家』有島武郎『旅する心』岡倉覚三『日本の目覚め』三木清『人生論ノート』プラトン『クリトン』ヘルデルリン『ヒュペリオン』姉崎正治『復活の曙光』阿部次郎『三太郎の日記』

幸田露伴『頼朝』エルベール編『ガンディー聖書』ルソー『エミール』山田濟齋編『西郷南州遺訓』『孫子』内村鑑三『代表的日本人』エマーソン『エマーソン論文集』モンテーヌ『随想録』プラトン『国家』伊藤千代松、プレハノフ『我等の対立』中江兆民、幸徳秋水、『偉人研究』佐藤一斎『言志四録』高山樗牛、ベスタロッツ『隠者の夕暮』『シュタンツだより』、『平家物語』武者小路実篤『我が人生観』呉茂一訳『ギリシア神話』高橋健二訳『ゲーテ詩集』カーライル『英雄及び英雄崇拜』『唐宋八家文』柳宗元『江雪』杜甫『春望』バイロンの箴言、キングスレー『ウオーター・ベビーズ』ラファエル・サバチニ『スカラムーシュ』鈴江言一（王枢之）『孫文伝』聖徳太子『憲法十七条』などの書籍からの箴言が抜き書きされている。戸田城聖の薫陶の数々や、ノート、日記を素材に織り込みながら、青春時代の忘れ得ぬ本の思い出が綴られている本書は、創立者の思索の跡を知ることができる。「青年時代に何を読むべきか」との我々の問いかけに、本書は答えているかのようである。

#### 4. 『若き日の読書』『続・若き日の読書』から

本書の「はしがき」に著者は次のように述べている。

「読書は、青年時代の特権といってよい。若いときに読んだ本は、澁刺たる精神の血となり肉となり、やがて生涯の骨格さえ形成するものだ。『青年よ、心に読書と思索の暇をつくれ』とは、私の恩師、戸田城聖先生の遺訓ともいふべき指導であった。青年たる者は、1日に20分でも30分でもいい、深く静かに思索し、品位と教養を高めよ。読書によって、偉大なる自己を確立せよ。—— そう叫んでやまなかった恩師の在りし日の姿が、今でも目に泛ぶのである。

戸田先生は、その青年時代から無類の読書家であった。私ども10代から20代にかけての青年を相手に、先生が蓄積された読書論を語るときは、いかにも愉しそうであった。その当時の記録は、私どもの貴重は財宝ともなっている<sup>(9)</sup>」

本書は、『読書ノート』に掲載された「魂の書」とも言われる書籍を中心に取り上げられ、それぞれ18章、計38冊の書籍が紹介されている。「池田文庫」に所蔵されているこれらの書籍をあげてみたい。なお、それぞれの著作の紹介については、本文から引用をさせて頂き、出典個所を明示した。 ●は池田文庫未所蔵、国会図書館所蔵 ◎中央図書館所蔵

○『欺かざるの記』（国木田独歩全集第6巻）国木田独歩／著 学習研究社 昭和39（1964）年

『私が「欺かざるの記」を愛読したのは、他にも理由がある。戦時中、私は少しでも家計の助けになればと思って、新聞配達もしたが、そのころから、いつか新聞記者になろうとする夢を抱いていた。あたかも明治の開明期に、苦勞してジャーナリストを志した独歩の若き雄姿のなかに、私は知らずして少年のころからの夢を投影して読んでいたのかもしれない<sup>(10)</sup>』『独歩の「欺かざるの記」にでてくる読書リストは、ある意味で私の青春の読書の道案内ともなった。そして、ザラ紙の「読書ノート」は、たちまちにして最後まで埋めつくされてしまい、その後、やがて「日記」をつけ始めたのも、独歩に影響されてのことであったかもしれない<sup>(11)</sup>』

○『自然と人生』（岩波文庫）徳富蘆花／著 岩波書店 昭和33（1958）年

『蘆花の「自然と人生」は、明治33年（1900年）8月、兄猪一郎（徳富蘇峰）の経営する民友社から出版された。奥付を見ると、定価金貳拾五銭とある。おなじ年の1月に民友社から出版された「不如帰」とともに、当時のベストセラーになったという。著者の健次郎は、まだ32歳の若さであった<sup>(12)</sup>』『国敗れ、山河のみ残された戦後 —— こうして蘆花の「自然と人生」

は、私の愛読書の一つとなった。そして後年、創価学会初代会長であった牧口常三郎先生の「人生地理学」を読み、ある不思議な、めぐりあわせのような思いを抱いたものである。それは、いずれも20代から30代にかけての明治の青年——独歩や健次郎が自然を謳歌し、宇宙生命との対話をなしつつあるとき、ちょうど30歳になったばかりの若き牧口常三郎も、いわゆる「地人関係」についての2千枚におよぶ草稿をかきためていたということである。(中略)やがて地理学者、志賀重昂の推輓を得て、大著「人生地理学」を上梓したのは、明治36年(1903年)10月、奇しくも著者32歳のときである<sup>(13)</sup>』

○『一握の砂』(啄木全集第1巻)石川啄木/著 岩波書店 昭和36(1961)年

『十代後半の私も、一時期、啄木の歌とともに毎日を生きた。——嬉しいにつけ、哀しいにつけ、わが青春の悩みと歎びの胸の底には、いつも啄木の歌のリズムが鳴り響いていた。歌集では「一握の砂」のなかに、とくに気に入った歌をえらんで暗誦したものだ。「悲しき玩具」などは、ほぼ全編を誦んずることができた<sup>(14)</sup>』

●『ヒュペーリオン』ヘルデルリン/著 吹田順助/訳 鎌倉文庫 昭和22(1947)年

『ここに一冊の本がある。決して高価な本ではないが、私にとっては無二の、懐かしい青春の書である。この本も、はやくも30年の光陰が過ぎ去った。しかし、粗末なザラ紙に印刷された思い出の書は、いまなお私に、青春の詩の高貴な魂を、気高くも語りかけているようだ<sup>(15)</sup>』

『鎌倉文庫——なんと懐かしい名前であることか。20数年以上も昔に店じまいした出版社である。今では知る人も少ないであろうが、活字に餓えていた当時の文学青年たちにとっては、決して忘れることのできない版元である。(中略)この敗戦直後の文藝出版界をリードした出版社について、その発祥を調べてみると、それは戦時中のことにさかのぼるらしい。里見弴、小林秀雄、久米正雄、大佛次郎、中山義秀といった錚々たる面々の鎌倉文士たちが、戦時下の生活の糧を得るためでもあろうか、ささやかな貸本屋を開いた。それが戦後の、そもそもの出発であったという<sup>(16)</sup>』

○『海舟先生氷川清話』校訂 勝安芳/述 吉本襄/編 河野成光館 明治42(1909)年

○『海舟座談』(勝海舟全集第11巻)勝部真長、松本三之介、大口勇次郎/編 勁草書房 昭和50(1975)年

『それは、1968年のこと——いわゆる「七十年安保」を目前にひかえて、わが国は左右激突の騒然たる様相を呈し始めていた。(中略)私は、そのような時代状況から勝海舟が構想していた外交方針を想いおこした。その年は「明治百年」にもあたり、その記念出版として「氷川清話」が「勝海舟自伝」と題して復刻されてもいた。あらためて読みなおしてみると、海舟は日清戦争に反対し、時の伊藤博文内閣に対して、強く和平の議を建言している。彼は、東洋の民族が相食む戦争を否定し、中国、朝鮮の民衆と善隣友好の関係を保つべきであると主張したのである。私は、その卓抜なる先見の明に学び、わが学生部の第11回総会の2万名参加の席上、未来を託すべき青年諸君の英智に向けて、中国問題に関する発想の転換を呼びかけた。おそらく中国にも、日本の明治時代に隠れた具眼の士がいたことを、知る人もあったにちがいない。はたして、私の提唱に対して、海の向こうから確かな手応えがあったのも、今にして思えば不思議なめぐりあわせである<sup>(17)</sup>』

- 『西郷南洲遺訓：附手抄言志録及遺文』（岩波文庫）西郷隆盛／著 山田濟斎／編 岩波書店 昭和14（1939）年

『私は敗戦直後—— 一切の価値観が未曾有の混乱を呈していたころ、たまたま山田濟斎編の「西郷南洲遺訓」を読んだ。当時は西郷に対する評価も極端に低かった。戦前の軍国主義教育では、彼は武人の鑑にされていたが、むしろ、それが裏目に出たのであろうか。戦後になってからは、とくに若い人びとには見向きもされなかったようだ。ところが「南洲遺訓」を読みすすめるにつれ、私の胸中には、諸家の西郷論とは違うイメージが、くっきりと浮かび上がっていた。そこには、世間の毀誉褒貶など意に介さない西郷の、淡々として赤裸々な人生観、処世訓、そして死生観が述べられている<sup>(18)</sup>』

- 『代表的日本人』（岩波文庫）内村鑑三／著 鈴木俊郎／訳 岩波書店 昭和25（1950）年  
『私の「読書ノート」は、その会合（協友会）のための討議資料ともなった。今、あらためて読みかえてみると、未熟ながらも当時の師を求める心象風景が、沁々と想いおこされるのである。内村鑑三の「代表的日本人」を岩波文庫で読んだのは、奇しくも恩師と邂逅する直前のころであった<sup>(19)</sup>』

- 『樗牛全集』高山林次郎／著 姉崎正治他／編 博文館 大正5（1916）年  
『恩師戸田城聖先生との出会いが、私の人生にとって運命的な重みをもったように、書物を通じてではあるが、明治の青年樗牛とめぐりあったことも、私の精神形成に少なからぬ意味もっている。明治33年（1900年）生まれの戸田先生は、最も多感な青年時代に、大正デモクラシーの高まる息吹を呼吸して過ごされたわけだ。ちょうど大正4年（1915年）、戸田先生が15歳のときに博文館から出た普及版の増補縮刷「樗牛全集」は、そのころのベストセラーであった。おそらく戸田先生も、青春時代に樗牛を耽読され、若き日の青雲の志を抱かれたにちがいない。先生にお会いし、親しくお話をうかがうようになってからであるが、かつての戸田青年も、また樗牛の熱心な読者であったことを知って、私は驚き、かつ無性に嬉しくもなった。（中略）私が「樗牛全集」を手にしたのは、いうまでもなく戦後のことである。神田の古本屋街には、当時、樗牛の著作は二束三文で売られていたように思う<sup>(20)</sup>』

- 『隠者の夕暮・シュタンツだより』（岩波文庫）ペスタロッチー／著 長田新／訳 岩波書店 昭和25（1950）年  
『ペスタロッチの「隠者の夕暮・シュタンツだより」を最初に岩波文庫版で読んだのは、たしか自宅近くの読書サークルに参加していたときのことである。新生日本の民主教育のあり方について、友人と夜を徹して議論した記憶もある。そのときの「読書ノート」や、友人たちとの議論をもとにして、私はペスタロッチの生涯をスケッチしたのである<sup>(21)</sup>』

- 『永遠の都』（世界大衆文学全集第39巻）ホール・ケイン／著 戸川秋骨／訳 改造社 昭和5（1930）年  
『昭和26（1951）年新春のことであった。ある日、戸田先生は「この本を君にあげよう」と言われ、私に1冊の本を差し出されたのである。「もし、良かったら、君と仲の良い同志10数名に、順番に読ませてあげてはどうだろう。みんなが読み終わったところで、その感想発表会をもつのも、いいだろう」そう言われながら、先生が私に渡された本は、赤い布製のホール・ケ

イン作「永遠の都」であった。(中略) 私が戸田先生から頂戴した「永遠の都」は、改造社版の戸川秋骨訳にあるものである。奥付を見ると、昭和5(1930)年7月20日発行となっている<sup>(22)</sup>』

●『風霜』尾崎士郎／著 新潮社 昭和29(1954)年

『この作家と同世代でもある戸田先生は、深く庶民感情にも通じた彼の作品を、早くから愛惜してやまないものがあつたようだ。自身の若き日の読書歴を回想し、いささか独自の作家論も語られたあとに、尾崎の作風にふれて言った。「尾崎士郎という作家は、日本の文学者のなかでは、ひとつの思想を、ちゃんと持っているという点で、尊敬できる。なかでも「人生劇場」には、私は感銘を受けました。総じて日本文学には思想がなく、視野も狭い。それに比べると、翻訳物ではあつても、およそ世界文学には思想があり、背景も雄大で、私は好きだ」なるほど「風霜」を読み始めてみると、そこには作者の思想があり、維新の群像たちに託した心情の昂揚が見られる<sup>(23)</sup>』

○『レ・ミゼラブル』上、中、下(岩波文庫)ユゴー／著 豊島與志雄／訳 岩波書店 昭和39(1964)年

『ヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」を初めて読んだのは、私が14、5歳のころであつた。「噫無情」と題した黒岩涙香の抄訳と、豊島與志雄の完訳が出ていたが、私は豊島の完訳をえらんだ。全3巻、原稿枚数4000枚にのぼるという大作である。「レ・ミゼラブル」は、一般には、原題より主人公ジャン・ヴァルジャンのほうが有名であつた。あるいは「噫無情」という黒岩涙香のつけた題名によって、広く知られていた。私の記憶では、たしか3回、読みかえしている。(中略)「二度読む価値のない本は、一度読む価値もない」という名著の定義があるが、私は「レ・ミゼラブル」を3度読み、なお時の経つさえ忘れ去っていたわけである<sup>(24)</sup>』

○『三国志』全10巻 吉川英治／著 六興出版部 昭和31(1956)—昭和32(1957)年

『私は20代のころ、この吉川「三国志」を何遍となく繰りかえし読んだ。青年劉備が、遙かに黄河の下流を眺望する光景などは、あたかも一幅の絵のように、ありありと思い浮んでくる。突如、破れ鐘のような大音声を放つて張飛も踊りでる。すると、鬚の関羽も馬蹄を響かせて馳せ参ずるのであろう。—— そういった情景が、若き日の夢とロマンを喚起していた。当時の「日記」を見ると、昭和28年(1953年)4月7日の項に「第3回目の、『三国志』読了」とある。その前後、私は「新・平家物語」や「新十八史略」、それに「水滸伝」といった長編を、夢中になって読んだ。「青年は歴史の本を読み、持つべきものは史観である」との恩師戸田先生の指導を、私なりに実践していたのである。前後の日記にも「もっと勉強しなければならない」との自戒の記述がしばしば出ている<sup>(25)</sup>』

○『エミール』上、下(改造文庫)ルソー／著 内山賢次／訳 改造社 昭和6(1931)—昭和12(1937)年

『恩師戸田城聖先生に師事してからも、この「エミール」は、先生と私のあいだで、幾度となく話題になった。教職を経験されたことのある恩師も、ルソーの教育理念には強い関心を抱いていたようである。(中略) そのときの会話の一端は覚えていないが、戸田先生の恩師の牧口常三郎先生もまたルソーを愛読されていた話をうかがったことがある。なるほど、牧口先生の畢生の大著「創価教育学体系」にも、しばしばルソーの名がみえる。(中略) 牧口先生が「因習

久しき」と糾弾された知識偏重の教育——それは、ルソーの「エミール」でも痛撃されている。思うに、この二つの東西の著作は、教育理論の深い次元で合致するものがあるようだ<sup>(26)</sup>』

○『モンテ・クリスト伯』(世界文学全集第3期第5巻) デュマ/著 内山義雄/訳 河出書房  
昭和29(1954)年

『世界的な小説をつねに読んでいきたまえ。—— 恩師の戸田城聖先生が、いつも青年に教えられていた読書の基本である。水滸会の教材は、この恩師の精神にそい、慎重にえらばれた。師もまた厳格であった。会員の企画した案が、師の構想に合わない場合もある。そんなとき、戸田先生は容赦なく「レベルが低い。主人公も二流、三流の人物だ。一流のものを学ばなければならぬ」と言下に叱咤された。恩師はまた「書を読み、書に読まれるな」とも薫陶されていた。なるほど水滸会は、とおりにいっぺんの読書会ではない。明確なる信念を持つ者が、一書の紙背にまで徹して思想を読みとるのである。そこには、まさしく思想との激越な戦闘を思わせるような、真剣なる気合の熱気がこもっていた。いったい、「書を読む」とは、いかなることであるか。—— 恩師は、それを身をもって青年に教えられたのである。たとえば、アレクサンドル・デュマの「モンテ・クリスト伯」が教材に取り上げられたことがある。戦時下の悪法たる治安維持法によって、故なく獄につながれた恩師は、そのときの獄中生活を語り、およそ政治犯と呼ばれる者の苦衷の心事を吐露されていた。エドモン・ダンテスは、その獄中での無念を晴らすために、復讐の鬼と化した。しかし恩師は、2年近くの獄中での苦闘と思索を発条とし、仏法者として偉大な人間革命を遂げていったのである<sup>(27)</sup>』

○『ロビンソン・クルーソー』(岩波少年文庫) デフォー/著 阿部知二/訳 岩波書店  
昭和27(1952)年

『私も少年のころ、たしか「十五少年漂流記」とともに収められた「ロビンソン・クルーソー」を改造文庫版で読んだ。遠い日の記憶をたどっていくと、そのころ、外国の冒険譚を夢中になって読みふけた一時期がある。世界地図をひろげては、ロビンソンが漂流したとされる航跡を想定してみたりした。戦後になって、戸田先生に邂逅すると、先生自身の獄中体験との比較のうえで、よくロビンソン・クルーソーの孤島生活が話題になった。(中略)ロビンソンの孤島生活について、戸田先生は「これはフィクションだよ。塩を作ることが書いてないじゃないか」と言われたのを、私は鮮明に記憶している。絶望と極限の世界を描こうとしたデフォーと、獄中の孤独を体験した戸田先生との、厳しさの違いによるのかも知れない<sup>(28)</sup>』

○『スカラムーシュ』上、下(潮文庫) サバチニ/著 加島祥造/訳 潮出版社 昭和46(1971)年

『わが国では、昭和3年(1928年)に改造社の「世界大衆文学全集」第27巻として、小田律氏の翻訳で出版されている。私は戦後、それを神田の古本屋街で見つけて読んだ。一人の才知あふれる青年が、激動のフランス大革命期を舞台にして縦横に活躍するロマンは、まことに痛快そのものであった。あたかも敗戦直後の日本にも、混沌たる激動期に通ずる雰囲気があったからであろうか。この小説を読んでフランス大革命に興味を抱いた私は、相前後して、ヴィクトル・ユゴーの「九十三年」も読んだ。また「スカラムーシュ」が映画化され、昭和28年の新春ロードショーとして有楽座で上映されたときにも、数人の同僚と一緒に観ている。しばらくして三笠書房から大久保康雄訳の「スカラムーシュ」が「百万人の世界文学」と銘うたれて出版

されると、早速、華陽会の教材に取り上げられていった<sup>(29)</sup>』

○『ポンペイ最後の日』（百万人の世界文学第3巻）リットン／著 堀田正亮／訳 三笠書房 昭和28（1953）年

『戦前、改造社版の「世界大衆文学全集」のなかに、リットン卿の「ポンペイ最後の日」という歴史小説が小池寛治訳で収められ、それを夢中で読んだ。（中略）戦後、昭和28（1953）年になって、新に堀田正亮訳の「ポンペイ最後の日」が三笠書房の「百万人の世界文学」シリーズの一巻として出版された。戸田先生もこの小説を愛読されたことがあるらしく、華陽会の求めに応じて教材に取り上げられている<sup>(30)</sup>』

○『詩集 草の葉』ホイットマン／著 富田碎花／訳 朝日新聞社 昭和24（1949）年

『「草の葉」—— なんとみずみずしい、逞しき内容をはらんだ題名であろうか。そこに、青春がある。希望がある。自然がある。そして平等の対話がある。—— 今、この本の奥付をみると、昭和24（1949）年5月31日の発行となっている。私の21歳の年である。私が、この一冊を神田のさる書店で買い求めたのは、23歳の頃と記憶しているところをみると、発行直後のことではなかったらしい。ともかく買いたくて買った本だった。アカシアの花をつけた小枝が描かれた、水彩画の美しい表紙が鮮やかであった<sup>(31)</sup>』

○『神曲：地獄』上（岩波文庫）ダンテ／著 山川丙三郎／訳 岩波書店 昭和27（1952）年

『神曲：浄火』中（岩波文庫）ダンテ／著 山川丙三郎／訳 岩波書店 昭和28（1953）年

『神曲：天堂』下（岩波文庫）ダンテ／著 山川丙三郎／訳 岩波書店 昭和33（1958）年

『青年時代 —— 私はダンテの詩を、こよなく愛した。詩は、人間精神を限りなくひろげ、ゆたかにするものだ。「ダンテを知る者は文学の秘鑰を握る」ともいわれるが、その作品に初めて接したのは、敗戦後まもないころである。当時まだ十代の私は青年同士の読書サークルに参加し、新生日本の行方を模索した。ダンテの「神曲」は、そこで取り上げられ、この作品を素材にして、イタリア「ルネサンス」（人間復興）の精神を友人たちと語り合ったものだ。テキストは、たしか大正時代に警醒社書店から出版され、名訳との評判が高かった山川丙三郎訳である。難解ではあったが、人生の道を求めていた私は「どうしても解りたい」との一心から、それこそ毎晩のように読みかえた憶えがある。私にとって生涯の恩師となる戸田城聖先生に出会ったのは、ちょうどそのころ、忘れもしない19歳のとき—昭和22年（1947年）8月14日、2度目の終戦記念日の前日だった。その3日後の17日、ダンテ「神曲」の翻訳者・山川丙三郎氏が急逝されている<sup>(32)</sup>』

○『学問のすゝめ』（岩波文庫）福沢諭吉／著 岩波書店 昭和17（1942）年

○『福翁自伝』（岩波文庫）福沢諭吉／著 岩波書店 昭和17（1942）年

『「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」近代日本を代表する思想家にして教育者・福沢諭吉の名著「学問のすゝめ」の冒頭の一節。—— あまりにも有名な言葉である。戦後の一時期、この言葉はNHKのラジオを通じて全国に放送された。日本を占領中だったGHQ（連合軍総司令部）が民主化政策の一環として流したものだ。私は、そのころ懸命に働きながら勉強していたが、なぜかこの言葉に励まされる思いだった。（中略）私が恩師戸田城聖先生に学んだのも諭吉と同じ20代だった。戸田先生は、よくおっしゃっていた。「人の一

生は、20代で決まる。20代で、しっかり基礎をつくるかどうかで左右される。その時代に勉強したことは一生残るものだ。勉強は、やる気さえあれば、どんな方法でもできるものだよ」要するに先生は、「一生残る学問」すなわち学問を実際に活かす方法を教えられた。このことは、福沢諭吉も「学問のすゝめ」のなかで繰り返しかえし説いている<sup>(33)</sup>』

○『九十三年』（世界大衆文学全集第17巻）ユゴー／著 早坂二郎／訳 改造社  
昭和3（1928）年

『ここまで「九十三年」の時代背景を書いてきて、私は戸田先生の読書法に関する指導を思い出した。前にも書いたが、もう一度、懐かしい恩師の話を紹介したい。「本の読み方にも、いろいろな読み方がある。まず筋書だけを追って、ただ面白く読もうというのは、もっとも浅い読み方だ。次に、その本の成立事情や歴史的背景を調べ、当時の社会情勢や登場人物の性格などを見きわめながら、よく思索して読む読み方がある。そして第3に、作者の人物や境遇、その人の人生観、世界観、宇宙観、さらには思想まで深く読みとる読み方がある。そこまで読まなければ、本当の読み方ではない』先生は、そうおっしゃって、私どもが研修会にのぞむにあたって「事前によく調べておきなさい」と言われた。ユゴーの「九十三年」が取り上げられた際にも担当を決め、それぞれが物語の粗筋、フランス革命の時代背景、登場人物の性格など次々に立って発表したものである<sup>(34)</sup>』

○『史記』（中国古典文学全集第4巻）司馬遷／著 野口定男／等訳 平凡社 昭和33（1958）年

『「青年は、小心であってはならぬ。気宇壮大なる人間に育つためにも、偉人伝など歴史の本を読むべきだ」 戸田城聖先生は、そうおっしゃられて、いつお会いしても「今、何を読んでいるか」と訊かれるのが常であった。（中略）思えば、私が戸田先生の会社に勤めたのは、昭和24年（1949年）1月3日からだった。満21歳の誕生日を迎えたばかりである。それからの10年間というもの、先生の訓練は厳しかった。毎日のように私に対する薫陶は続いた。毎朝、仕事の始まるまえには先生直々の個人教授がなされた。「御書」を拝しての指導は当然として、人文・自然・社会科学など万般にわたる勉強だった。私は日曜日にも先生のお宅にうかがい、朝から晩まで研鑽に励んだこともある。話題は人生論に始まり、古今東西の指導者論から哲学・文学、さらに政治や経済・教育・文化、組織論にもおよんだ。すぐれた教育者でもあった先生の知識は豊かで、興味深い話ばかりだった。なかでも先生がよく語っておられた話に、「史記」や「十八史略」など中国の史書にもとづくものがあつた。司馬遷の大著「史記」130巻は、まさに豊かな人間学の宝庫といってよい。今から2000年以上も昔に書かれた中国最古の通史、悠久なる中国史の原点ともいべき史書である。西洋で前5世紀のギリシアの史家ヘロドトスが「歴史の父」といわれるように、司馬遷もまた「東洋史の父」と呼ばれるにふさわしい存在であろう<sup>(35)</sup>』

○『ナポレオン』（潮文庫）鶴見祐輔／著 潮出版社 昭和44（1969）年

『「前進、また前進」—— この言葉どおり、鉄の意志と烈火の情熱をもち、全欧州を駆けめぐった大英雄ナポレオン。彼の歴史的評価はさておき、当時の私はその一人の人間の、壮烈な魂の息吹に共鳴したのを憶えている。思えばナポレオンの生涯は、まさに戦いの連続であった。彼は一生のうち60回も戦ったという。その心意気は、まさに「前進、また前進」の一語

に尽きよう。「青年時代には偉人伝など伝記を多く読んで、歴史の勉強をするとよい」 恩師は、よく言われたものである。私も22、3歳のころ、古今東西の偉人伝を数多く読んだ。なかでも鶴見祐輔氏の「ナポレオン」は、そのころ手にした懐かしい1冊である<sup>(36)</sup>』

○『社会契約論』(岩波文庫) ルソー／著 桑原武夫／等訳 岩波書店 昭和29(1954)年

『恩師戸田城聖先生を囲み、フランス革命の時代背景について論じ合ったことがある。戸田先生は言われた。「フランス革命には、火つけ役がいた。それがルソーである」フランス革命に先立ち、ルソーらの啓蒙思想家の活躍があったことは、よく知られている。まさに「思想の力」は巨大である。思想は人間を動かし、時代を開き、世界を変える。ルソーの思想に学んだ青年たちが、民衆の自覚を高め、革命のエネルギーに点火したのだ。 恩師はこうも言われた。「フランス革命を理解するには、まずルソーを読まなければわからない」と。私も終戦後の一時期、ルソーの「エミール」や「社会契約論」「人間不平等起原論」などを一気に読んだ思い出がある。「エミール」については前にもふれたが、そこには、一個の「人間」を育てるために、いかに「自由」と「平等」が大事であるかが説かれている。教育者であった戸田先生、その師である牧口先生も、「エミール」をはじめルソーの書を愛読されていた。(中略)「社会契約論」が出版されたのは、1762年4月、ルソー49歳の時である。「エミール」がこの翌月に刊行されており、歴史に残りゆく大著がほぼ同時期に世に出された。(中略)日本において、明治10年代に盛りあがった自由民権運動は、ルソーの影響を大きく受けている。「社会契約論」が初めて邦訳されたのは明治10年(1877年)、110年以上さかのぼる。当時、「民約論」として紹介されたが、恩師戸田先生も、その書名でよく話して下さったのが懐かしい。戸田先生が昭和30年(1955年)1月、初めて高知を訪問されたとき、私もご一緒させていただいた。先生は「自由民権」の旗を掲げ戦った高知の偉人・板垣退助や、「東洋のルソー」といわれた中江兆民にふれながら講演され、これからの時代の平和革命を展望しながら、新しき人間主義の哲学の可能性を力説しておられた<sup>(37)</sup>』

○『若きウェルテルの悩み』(岩波文庫) 改版 ゲーテ／著 竹山道雄／訳 昭和36(1961)年

『1770年の秋、21歳のゲーテは、5つ年長の文学者ヘルダーと出会う。この2人の青年の運命的な出会いが、ドイツ文壇に「シュトルム・ウント・ドランク」(疾風と怒濤)の大運動を巻き起こすのである。(中略)日本で「疾風怒濤」と訳されるこの運動は、ヨーロッパ、なかんずくドイツ民族の精神を覆ってきた中世的「神」の観念を吹き払い、高らかに「人間」の叫びをあげたものだ。ヘルダーの影響を受け、ゲーテが繰りひろげた戦いは、ドイツ文学に一つの新しい時代を画した。そのころ、ゲーテの歌った詩に、こんな一節がある。

ああ、ひそやかな創作の力が 心の中を流れる音がするようだ。

みずみずしい造型の泉が 私の指から湧き出てくるようだ。

(潮出版社刊『ゲーテ全集』第1巻所収 松本道介訳)

ゲーテは、型どおりの形式や規則にとらわれることなく、新しい表現によって、人間の伸びのびとした本然の姿を描いていく。「若きウェルテルの悩み」は、この「疾風怒濤」のなかで生まれ、ゲーテの名とともにドイツ文学を世界的に高めた、記念碑的傑作なのである<sup>(38)</sup>』

○『阿Q正伝』(岩波文庫) 魯迅／著 竹内好／訳 岩波書店 昭和30(1955)年

○『魯迅評論集』(岩波新書) 魯迅／著 竹内好／訳 岩波書店 昭和28(1953)年

『「道とは何か。それは、道のなかったところに踏み作られたものだ。荆棘ばかりのところ  
に開拓してできたものだ。むかしから、道はあった。将来も、永久にあるだろう」文豪・魯迅  
の言葉である。私がこの一節を「日記」に引いたのは、昭和35年（1960年）の2月4日、中国  
文学者の竹内好氏が翻訳した「魯迅評論集」をひもといたときのものである。（中略）歴史上、  
文学が民族を鼓舞し、民衆の覚醒を促す「革命の銅鑼」の役割を果たした例は少なくない。近  
代中国もまた、そうであった。（中略）革命の歩みとともに、魯迅は、次々に作品を発表する。  
そして1921年12月から翌年2月にかけて、「晨报」という新聞の別刷りに発表されたのが、彼の代  
表作「阿Q正伝」である。これは連載中から反響を呼び、主人公・阿Qの「行状」を自分への  
当てこすりかと勘繰り、戦々恐々としていた人々も居たようだ。（中略）日本では、昭和6年（1931  
年）に「阿Q正伝」の最初の翻訳が出ている。また4年後には「阿Q正伝」を含む「魯迅選集」  
が文庫版で出版され、急速に読者層が広がった<sup>(39)</sup>』

○『隊長プーリバ』（ロシア文学全集第30巻）ゴーゴリ／著 原久一郎／訳 修道社  
昭和34（1959）年

『昭和30年（1955年）—— 当時27歳の私にとって、毎日が真剣なる闘いの連続であった。  
死をも予感させるほど激しく襲いかかる病魔、あまりにも無認識きわまりない世間の中傷と圧  
迫 —— 。私は恩師戸田城聖先生のもとで懸命に戦った。いっさいを受けとめて一步も退か  
なかった。その闘争の最中、戸田先生は私に、矢継ぎ早に世界の名著を勧めてくださった。「あ  
れは読んだか。これも読みなさい」とあたかも真っ赤に燃えさかる鉄を鍛え打つがごとくであ  
った。そのなかの思い出深い一書が、ゴーゴリの「隊長プーリバ」である。その年の2月16日  
の「日記」に、こう綴っている。『隊長プーリバ』を読み始む。脳裏に去来するものあり』美  
しく広大なウクライナの天地に繰りひろげられる戦いの数々。誇り高きコサックの雄叫び。親  
子の愛情、正義、勇気、裏切り、悲劇……。次々に織りなされる人間絵巻が、鮮烈な画像と  
なって若き心に迫った<sup>(40)</sup>』

○『パスカル冥想録』串田孫一／著 夏目書店 昭和23（1948）年

『冥想録：パンセ』パスカル／著 由木康／訳 白水社 昭和13（1938）年

『わずか39年というパスカルの一生は、迫りくる死の深淵との絶え間ない闘争であった。だ  
が、それ故にこそ彼の生涯の軌跡は、かくも鮮烈な光彩を放ちえたものだと私は思う。彼の苦  
闘を思うとき、やはり生来の病弱に悩み、死魔の影と闘いながら歩んだ私自身の青春時代が、  
二重うつしになって脳裏に甦ってくる。私が「パンセ」を手にしたのは、昭和24年（1949年）  
6月13日のことである。当時の「日記」には、こう記してある。「神田にて『パスカル冥想録』  
『情熱の書』他1冊、計3冊購入。合計120円也」その同日、こうも書いている。「朝から頭  
が痛む。身体を大事にせねばならぬ。変遷に変遷を重ねゆく心境。目的を凝視していながら、  
ふらふらしている自己の悲しさ。勇躍し、はち切れそうな青春時を実感したかと思うと、魔に  
流され、断崖に立つ思いをなす、自己。宗教革命と、大理想を、思惟したかと思うと、現実の  
嵐に、境遇に、戦く、淋しき自己。青年よ立ち上がれ。前進だ。それ以外に、人間革命はない  
のだ。現実の渦中に、飛び込んで戦え。恐るるな。大使命を痛感せば！」—— 21歳であった。  
出版事業が苦境にあった恩師のもとで、少年雑誌の編集責任者として、心身ともに極限の力を  
ふりしぼって奔走する日々であった。胸を思い、微熱に見舞われながら激務にひた走る私の身  
体を、恩師は深く案じてくださった。宗教革命への決心を日記に記したとき、私の胸中には、

この夭逝の天才への特別な感慨があったのかもしれない<sup>(41)</sup>』

○『バイロン詩集』（世界の詩）バイロン／著 阿部知二／訳 弥生書房 昭和38（1963）年  
『熱情の詩人、行動の詩人バイロン——彼については、いくたびか青年と語らった。20代、新聞に一文を寄稿した思い出もある。苦闘とともに、喜びとともに、バイロンの詩は私の「心の友」として、かけがいのない光を贈ってくれた。「私は生きてきた。空しくは生きなかった」この言葉どおり、36歳にしてギリシアに散ったバイロンの生涯は、たとえ短くとも、深く、また、悔いのない「生」の燃焼であった。若き日、病弱であった私は、死をも予感する毎日であった。「30まで生きられるかどうか」といわれた生命であったが故に、1日1日を全魂こめて生ききった。偉大なる師匠戸田城聖先生のもと、後世語り草となる若武者の軌跡を残そう—そう心に決めていた私にとって、バイロンの炎のごとき生涯は、ひとときわ胸打つものであった<sup>(42)</sup>』

○『科学史と新ヒューマニズム』（岩波新書）サートン／著 森島恒雄／訳 岩波書店 昭和13（1938）年

『今、科学をめぐる私なりに重ねてきた行動をふりかえるとき、恩師とのある語らいの場面が思い起こされる。昭和32年（1957年）5月、東京で日本国際見本市が行われ、私は参考のためと思ひ、見学に訪れた。（中略）帰ってその様子を報告すると、恩師は興味深げに聞かれ、一言いわれた。「科学と宗教」について、考えていくんだなあ」と。こうした恩師の何気ない言葉も、かけがえのない指針として、若い私の生命に刻まれていった。かねてから科学文明の未来と宗教について思索をめぐる私には、科学と宗教に関する著作の執筆を決意していた。サートンの「科学史と新ヒューマニズム」をひもといたのも、その一助となればとの思いからであった。昭和35年1月18日の「日記」には、「サートン著の『科学史と新ヒューマニズム』の続きを読む。いつの日か『科学と宗教』執筆の参考にしたい」と記してある<sup>(43)</sup>』彼の業績は、『科学史序説』に代表されるが、人間学としての科学への希求を、情熱をこめて綴った一書が『科学史と新ヒューマニズム』である。

○『失樂園』（世界文学全集第5巻）ミルトン／著 繁野天来／訳 新潮社 昭和4（1929）年

『恩師は、よく言われていた。「青年ならば、苦勞は買ってでもするものだ。苦勞し、悩んでこそ、偉大な人間になれるのだよ」その厳父の声が今でも耳朶に響く。昭和26年（1951年）正月8日、私は「日記」にこう記している。「帰宅、10時、読書、ミルトン『失樂園』私は23歳。戸田先生のもとで働き始めてから、3年目を迎えていた。前年から、先生に事業は深刻な苦境が続いていた。「闇が深いほど暁は近い」という。しかし、本当に出口のみえぬ、長く苦しい「深い闇」の時期であった。私は一人、青年らしく懸命に戦った。何よりも師を守るために、未来の突破口を開くために（中略）イギリスの詩人ジョン・ミルトンの代表作「失樂園」は、私の青春の思い出とともに、決して忘れることはできない。また、1990年秋、オックスフォード大学の「ボドリーアン図書館重宝展」を八王子の東京富士美術館で開催したとき、ミルトンの最初の「詩集」が出品された。まるで「旧友」に再会したような感慨を覚えたものである。「失樂園」は全12巻（初版10巻）1万5百餘行におよぶ雄大な叙事詩である。同時代の詩人ドライデンは、往古の大詩人であるギリシアのホメロス、ローマのヴェルギリウスに比肩すると称えたという<sup>(44)</sup>』

- 『エマソン論文集』上、下巻（岩波文庫）エマソン／著 酒本雅之／訳 岩波書店  
昭和47（1972）年—昭和48（1973）年

『「コンコードの哲人」「アメリカ・ルネサンスの旗手」ラルフ・ウォルドー・エマーソン。卓越した思想家であり、哲学者であり、詩人であり、またよき教育者でもあった彼の著作は、私が青年時代に愛読した、忘れえぬ「友人」の一人である。いつでもひもとけるように、つねに近くの書棚に置いていたものである。戦後の焼け野原のなかで、精神の餓えを癒すかのごとく、いくどとなく頁を繰ったことが懐かしい。また、恩師戸田城聖先生からも「エマーソンは、しっかり読みなさい」と勧められた。エマーソンの名とともに、そうした青春の日々が思い起こされる<sup>(45)</sup>』

- ◎『宗教社会学論選』ヴェーバー／著 大塚久雄、生松敬三／訳 みすず書房  
昭和47（1972）年

『日蓮大聖人の仏法が、時代・社会に開かれた真実の「人間主義」の宗教であることを、ひろく世界に示したい、証明したい——恩師の胸奥に秘められていた、そうした深いお心を、私はつねづね痛感していたのである。そして恩師が私たち弟子に示された指針の数々を、具体的に、どう社会の上で実現しゆくかとの問いかけは、日を追って私の脳裏に重さを増しつつあった。マックス・ウェーバーの「宗教社会学論集」も、そうした思索のなかで手にした一書である。京都から舞鶴、大阪、堺、岡山へと続いた激励行を重ねた汽車の旅での読書であった。（中略）物質文明のなかで衰弱しきった人間の精神を復興し、真の「人間の世紀」を開きゆく「人間のための宗教」への道。また、政治・経済・文化をはじめ、あらゆる分野を、「人間のための宗教」の価値の光で照らしゆく、「宗教と社会」の架橋作業——私は書を閉じつつ、仏法の壮大な「人間主義のエートス」の可能性の未来に、あらためて思いを巡らせていた<sup>(46)</sup>』

- 『人形の家』（岩波文庫）イプセン／著 竹山道雄／訳 岩波書店 昭和25（1950）年

『かつて、恩師戸田城聖先生を囲んでの勉強会で、イプセンをめぐる語りがあったことがある。そのときの教材が、代表作「人形の家」であった。「男は強いばかりが能じゃない。横暴になるのでなく、たまには、こういう本も読みなさい」と、恩師は言われた。女性解放について、また微妙な女性心理・男性心理の綾までも、屈託なく語ってくださいました。聞いていて、思わずうなずいてしまう人物観察の妙。その奥に、人間存在への深い洞察が光っていた。ロランと同じく、現実の悩みと格闘し、「希望の声」を求める青年たちが、限りない安心と活力を得た「生きた精神」の交流。それが戸田先生との語らいであった<sup>(47)</sup>』

- 『ソクラテスの弁明・クリトン』（岩波文庫）プラトン／著 久保勉／訳 岩波書店 昭和25（1950）年

『昭和37年（1962年）2月、私はアテネを訪問した。何人かの友とともに、アクロポリスの丘にのぼり、一望したアテネの壮麗なる景観は、今なお忘れられない。ソクラテスとプラトンの師弟が、行き交ったであろう古代の街並みを思い描きながら、しばし語りあった。ソクラテスの人生最後の劇ともいうべき裁判も、このアテネが舞台である。プラトンの初期対話篇に属する「ソクラテスの弁明」では、いうまでもなくアテネの権力者の一派に告発されたソクラテスが行った弁明が書かれている。（中略）師の教えに殉じ、師のために戦いぬいたプラトンの生涯の原点は、ここに深く打ち込まれた。その意味で「ソクラテスの弁明」は師の正義を、満天

下に示しゆく声明であるとともに、師を殺した悪に対する、弟子としての大闘争宣言ともいえよう。(中略)「師弟の道」は、生死をも超えた人間の最極の道である。そして、万有流転の世界にあって、ただ一つ、理想の松明を受け継ぎ、永遠化させゆく道である<sup>(48)</sup>』

## 5. 『若き日の日記』から

戸田城聖が自ら青年を教育するために、様々な人材育成機関を作られ、古今東西の名著を教材に、縦横に読書論、人生論、恋愛論等が語られた。『若き日の日記』には、戸田城聖の日々の薫陶と珠玉の指導が認められ、日々の感動と峻厳なる師弟のあり方などが記述されている。その中で、「戸田大学」「水滸会」「華陽会」で取り上げられた主な教材を挙げてみたい。

### (1) 人間教育の真髄「戸田大学」教材

「人間が人間をつくる。人間教育の真髄は師弟にある」戸田城聖の講義は、昭和27(1952)年5月8日から昭和32(1957)年まで、仕事が始まる前の、朝8時過ぎから9時頃まで行われた。『随筆 新・人間革命「戸田大学」の名講義』で戸田先生から受けた薫陶の数々が語られている。

「この『戸田大学』の教室は、市ヶ谷ビル内の先生の会社の事務所であった。本来、私一人への授業であったが、他の数名の社員も、受講することを許された。その仲間たちは、今でも懐かしく忘れ得ぬ同志である<sup>(49)</sup>」

開講にさいして、先生はこう語られた。「高等教育の万般を教えよう。優秀な大学以上に、教育を授けたい。いくら大学を出ても、多くは、何を習ったか忘れてしまうものだ。残っているのは大綱だけで精一杯である。私が、君には、これから、あらゆる生きた学問を教えてあげたいのだ」

戸田大学の講義のテキストは時代の先端をいくものが取り上げられ、当時の一般の大学の授業でも使われていた有名な研究書が用いられた真剣勝負の早朝講義であった。生命に刻んだ師の一言一句であった。この講義の記録が『若き日の日記』に綴られている。『若き日の日記』などから当時の早朝講義の教材を列記してみたい。

○昭和27(1952)年5月8日(木)『経済学入門』波多野鼎／著 日本評論社 昭和25(1950)年2月20日初版、本書は昭和26(1951)年9月20日8刷)

波多野鼎は昭和21年に設立された“九州経済調査会”の発起人の一人で、当時、九州大学教授。第26代片山内閣の農林大臣を歴任しており、政界でも活躍した。本書は経済学の理論構成の基礎となる具体的な諸関係を常に考慮しつつ、所論を進めており、日常生活と経済学が深く結びついていることを主題としている。全編にわたり、書き込みがあり、裏表紙には、池田大作の署名と昭和二十七年五月七日の書き込みがある。本書は創価大学重宝に指定。

○昭和27(1953)年12月20日(土)『法学原論』和田小次郎／著 敬文堂書店 昭和23(1948)年5月25日発行

和田小次郎は早稲田大学法学部独法科を卒業した。専門は法哲学で、日本法哲学会理事を務め、法哲学の発展に貢献した。主著に『近代自然法哲学の発展』『法哲学』『法と人間』などがある。目次には「慣習法の成立」「慣習法の効力」「公法と私法との区別」「時の観点によ

りする法規の効力」「裁判所」「国家成立の三要素」などの書き込みがあり、第三章法の分類では、ドイツの法学者、ギールケについての書き込みがある。全編にわたり、傍線が引かれており、裏表紙の見返しにはTaisaku Ikeda のサインとともに、裏表紙には署名と17<sup>th</sup> June の書き込みがはいっている。本書は創価大学重宝に指定。

- 昭和28（1953）年4月7日（火）『化学』（新科学大系第5巻）F. S. テーラー／著 白井敏明・桑木来吉／共訳 河出書房 昭和28（1953）年

原書名：The world of science. Vol. 5. By F. Sherwood Taylor. William Heinemann Ltd., 1950.

F. S. テーラーは現代イギリスの科学史家。ロンドン大学講師、オックスフォードの科学史博物館管理官、サウス・ケンジントン科学博物館長を歴任した。科学史の他、錬金術史研究でも著名である。本書は当時の科学分野における最新のテキストである。本書は創価大学重宝に指定。

- 昭和28（1953）年9月2日（水）『地球と天体』（新科学大系第6巻）F. S. テーラー／著 白井敏明・桑木来吉／共訳 河出書房 1953年 昭和28（1953）年

原書名：The world of science. Vol. 6. By F. Sherwood Taylor. William Heinemann Ltd., 1950.

この書について、『随筆 新・人間革命「師弟＝人間教育の真髄」」のなかで、述べられている箇所を引用する。

「その教科書の一冊、『地球と天体』を開いてみると、次のような記述が光りを放って目に飛び込んできた。「……われわれの望遠鏡の視界のうちには、惑星系を持つ恒星が一千万個もあると考えてよい。（中略）もし百個の惑星のうち一個がこれらの条件を満足させるならば、生命を維持する能力のある地球が、十万個もあるかもしれない」（p.105参照）この一節は、戸田城聖先生の「天文学」の講義の大きな山場でもあった。先生は、わが意を得たりとばかりに言われた。「この大宇宙には、地球と同じような惑星が、いくつもある。仏法で説く『他方の国土』とは、そういう所をいうのである」先生が縦横無尽に展開される「仏法」と「天文学」の関連性に、私の若き胸は躍った。（中略） 仏法では、「天地も、日月も、星々も、皆、生死の二法に則っている」とも、明確に説かれている。星々の生と死、宇宙の成住壊空が、どれほど壮大にくりひろげられるか。これまた、「戸田大学」の大きなテーマとなった。

戸田先生は、「宇宙」と「生命」の連関性について、よく話された。「人間の活動も、宇宙のリズムある法則から免れることは、絶対にできない。そのような法則を、生命という次元から、根本的に、事実として説かれているのが大聖人の仏法である。これが分かっしまえば、『我即宇宙』であり『宇宙即我』ということになる<sup>(50)</sup>」

長い引用になったが、これらのテキストを通して『戸田大学』で学ぶということは、戸田城聖という稀有の師匠による、「智慧の妙薬」を弟子が受ける、「師弟」が大事であり、そこにこそ人間教育の真髄があるのではないだろうか。本書は創価大学重宝に指定。

- 昭和28（1953）年10月20日（火）『生命』（新科学大系第7巻）F. S. テーラー／著 白井敏明・桑木来吉／共訳 河出書房 昭和28（1953）年

原書名: The world of science. Vol. 7. By F. Sherwood Taylor. William Heinemann Ltd., 1950.

訳者の白井俊明は大正12(1923)年、東北帝国大学卒業。東京大学教授を歴任。桑木来吉は大正10(1921)年東京帝国大学理学部卒業。本書の裏表紙の見返しには「池田大作」の署名がはいっている。本書は創価大学重宝に指定。

○昭和28(1953)年12月『資料日本史』小沢栄一・高井浩・小田泰正／編 清水書院 昭和27(1952)年4月10日初版、本書は昭和28(1953)年5月20日27版

編者の小沢栄一は昭和6年、東京高師卒業。奈良師範に奉職後、昭和13年、東京文理科大学国史科卒業。東京第三師範教授兼附属小学校主事を経て、東京学芸大学教授を歴任。昭和26(1951)年、ユネスコ歴史教育研究会に日本代表として渡仏。主な著書に『日本文化の形成(古代篇)』がある。高井浩は昭和12年、東京文理科大学国史科卒業。東京女高師、群馬大学に奉職する。小田泰正は、昭和12(1937)年、東京文理科大学国史科卒業。京都大学大学院、東京文理科大学、海軍経理学校を経て、国立国会図書館司書として活躍した。本書の特長は、歴史の概説書と事典との有機的な統一がはかられており、歴史的理解を深めることを主眼としている。全編にわたり、傍線が引かれており、裏表紙の見返しには「池田大作」の署名がはいっている。本書は創価大学重宝に指定。

○昭和29(1954)年5月28日(金)『世界史』矢田俊隆／著 有精堂 昭和29(1954)年3月10日発行

著者の矢田俊隆は東京大学文学部西洋史学科を卒業。当時、北海道大学教授。主な著作に『ビスマルク時代』『第一次世界大戦と社会不安』『ヨーロッパの天才たち』などがある。全編にわたり、書き込み、傍線が引かれており、研鑽のあとが偲ばれる。裏表紙の見返しには、池田大作の署名があり、表表紙の見返しには池田の押印と昭和廿九年五月廿八日の押印がある。また表紙には池田の署名がはいっている。本書は創価大学重宝に指定。

○昭和29(1954)年11月5日(金)改訂『高等漢文』巻2(文部省検定済教科書)大修館書店  
この教科書は未見のため、詳細は不明であるが、昭和29(1954)年1月、大修館書店から3冊改訂版として出版された。編者は中西清〔ほか〕顧問は諸橋轍次。昭和28(1953)年8月5日文部省検定済高等学校国語科用として使用された。

○昭和30(1955)年6月1日(水)『政治学』(青林全書)鈴木安蔵／著 青林書院 昭和30(1955)年5月25日発行)

本書の序文によると

「本書は、大学における政治学の講義テキストたらしめたいと考えて着手されたものである。文献にしても学生が一応かえりみるべきもの、比較的最近のものを主として引用し、また諸問題の考察にあたって、学生がより広い視野で理解しうるように努力した」とあり、当時としては政治学の最新の教科書であった。著者、鈴木安蔵は昭和時代の憲法学者であり、マルクス主義の立場で憲法史、政治史を研究した。戦後、高野岩三郎らと憲法研究会を組織し、憲法草案要綱を発表し、護憲派として活躍した。主著に『日本憲法史』『憲法定制とロエスレル』(京都大学博士論文)などがある。本書の第2章政治学の課題と対象に集中的に書き

込みがあり、政治学の対象、政治の本質について特に思索の跡が偲ばれる。最終頁には「次期は必ず論理学を為す事」との書き込みがある。また、裏表紙の見返しには「昭和三十年十月二十六日終口」30.5.31

営業部長池田大作との押印がある。本書は創価大学重宝に指定。

○昭和30（1955）年11月14日（月）『六卷抄 依義判文抄』

本書は未見であるが、国立国会図書館のNDL-OPACによる所蔵検索を行ったところ、『富士宗学要集、宗義部2』堀日享編 雪山書房 昭和11（1936）年 請求記号 670-26 形態は謄写版印刷 369p

この他、『富士宗学要集、第3巻 宗義部（2）』堀日享度修 富士宗学要集刊行会発行 昭和33（1958）年3月2日発行

『富士宗学要集、第3巻 宗義部（2）』堀日享編 創価学会発行 昭和52（1977）年12月20日発行 宗義部（2）には『六卷抄 依義判文抄』が掲載されている。時期的には謄写版印刷形態で発行されているものを複写して、教材として使用したものと思われる。

その後の調査で、『依義判文抄 第三』創価学会発行 昭和32（1957）年1月20日発行 32 p.活版印刷、『六卷抄 依義判文抄 第三』創価学会発行 発行年不明 46 p.謄写版印刷の2点が発見された。当時使用されたテキストとしては、この謄写版印刷形態で出版されたものが用いられていたようである。

（2）人材鍛錬の場「水滸会」の教材

「水滸会」については、人間革命第7巻「水滸の誓」の章で詳細に語られている。水滸会は昭和27（1952）年12月から昭和31（1956）年5月までの3年6ヶ月の期間行われ、そこでの戸田の言説はあたかも遺言の如き重みを持ち、未聞の宗教革命の遂行を青年に託されたのである。以下、主な教材を挙げておく<sup>(51)</sup>。

○昭和27（1952）年12月16日（火）『新訳 水滸伝』佐藤春夫／訳

水滸会の初会合が38人の同志により行われた。『新訳 水滸伝』の序文を読み、水滸会の意義、使命、確信を語る。以後、月2回の会合が行われた。昭和29（1954）年2月9日（火）『新訳 水滸伝』全9巻を読了する。

○昭和29（1954）年2月23日（火）『モンテ・クリスト伯』（岩波文庫）デュマ／著 山内義雄／訳 岩波書店

読書の基本的精神（世界的な小説をつねに読んでいくこと）と自身の獄中生活を語る。

○昭和29（1954）年4月27日（火）『モンテ・クリスト伯』を題材に約束を守ることの大切さ、新聞の見方などを語る。

○昭和29（1954）年5月11日（火）『風霜』尾崎士郎／著 新潮社 昭和29（1954）年3月発行 幕末・維新の長州の若者達を描いた本書を通し、組織論などを語る。

- 昭和29（1954）年6月8日（火）『風と波と』村松梢風／著 新潮社 昭和28年（1953）年発行

『若き日の日記』から「秋山定輔を書いた『風と波と』を読む。誠に面白き人生なれど、彼の思考に共鳴出来えず<sup>(52)</sup>」「先生、アジアに連盟の組織確立の必要性を力説。アジアは、早く手を結ぶべしとの指導であった<sup>(53)</sup>」

- 昭和29（1954）年7月13日（火）『九十三年』（世界大衆文学全集第17巻）ユゴー／著 早坂二郎／訳 改造社 昭和3（1928）年

ロマン派の巨匠、ヴィクトル・ユゴーの著作は戸田城聖も愛読され、多くの青年に対しても、「ユゴーを読め」と、幾度となく薦められた。本書を教材として、フランス大革命の時代背景や登場人物の思想を、恩師を囲み、徹底して探求された。その魂を揺さぶる感動と共鳴が『若き日の日記』に綴られている。

「大文豪、ユゴー。革命の大叙事詩、小説家ヴィクトル・ユゴーの『九十三年』完読。感多し。我が国でも、彼の如き、大小説家の出現を、望んでやまぬ。ああ、大哲理、大思想、大宗教に、立脚せし大文豪は、いつ日にか出でなん。ああ、大情熱、大革命、大理想に、燃えたぎった、世紀の大文学者よ、1日も速やかに出で来たれよ<sup>(54)</sup>」と、万感、胸に迫るものがある。なお、本書の表紙見返しに、「戸田先生より給わりし本也 昭和二十五年十二月池田大作」とペン書きで揮毫をされている。本書は創価大学重宝に指定。

- 昭和29（1954）年9月4日（土）—5日（日）奥多摩・氷川において、水滸会第1回野外訓練。戸田先生はじめ、64名が参加する。先生から感情と理智の話、並びに東洋哲学と西洋哲学の話あり。

- 昭和29（1954）年9月28日（火）『ロビンソン・クルーソー』デフォー／著 阿部知二／訳 岩波書店 昭和27（1952）年（6月発行）

- 昭和30（1955）年6月11日（土）—12日（日）山梨・河口湖、山中湖において、水滸会第2回野外訓練。戸田先生はじめ、83名が参加する。戸田城聖、生前最後の訓練となる。

- 昭和30（1955）年9月27日（火）『三国志』

『三国志』の研鑽を修了する。東洋広布の進め方、日本の広宣流布の仕上げ方などについて、遺言にも似た指導あり。

- 昭和33（1958）年7月26日（土）—27日（日）山梨・河口湖において、水滸会を開催する。戸田先生を追慕しながら100名の同志と共に。

### （3）女性の理想像を目指して「華陽会」の教材

華陽会の結成は戸田城聖のもと、昭和27（1952）年10月21日、市ヶ谷で結成された。華陽会は「華のように美しく、太陽のように誇りたかくあれ」との理想的な女性像を意識して命名された。月2回の定例会が開催され、昭和31（1956）年まで戸田の薫陶は続いた。この会合で世

界的な名作や歴史小説が教材として取り上げられた。これらの教材を通して、人生、生活、政治、経済、思想、文化、芸術など実に多岐に涉っている問題について、様々な視点から論議し、具体的な解決法を学んでいった。その教材を「池田文庫」所蔵の中から挙げると以下の作品がある。この教材の一部は「水滸会」の教材としても用いられている。●は「水滸会」と共通の教材

- 『二都物語』上、中、下（岩波文庫）ディッケンズ／著 佐々木直次郎／訳 岩波書店  
昭和11（1936）年－昭和23（1948）年
- 『三国志』全10巻 吉川英治／著 六興出版部 昭和31（1956）年－昭和32（1957）年
- 『坊ちゃん・三四郎』（現代日本名作選）夏目漱石／著 筑摩書房 昭和28（1953）年
- 『小公子』（新潮文庫）パーネット／著 中村能三／訳 新潮社 昭和28（1953）年
- 『隊長ブリバ』（ロシア文学全集第30巻）ゴーゴリ／著 原久一郎／訳 修道社  
昭和34（1959）年
- 『人形の家』（岩波文庫）イプセン／著 竹山道雄／訳 岩波書店 昭和25（1950）年
- 『若草物語』上、下（新潮文庫）オールコット／著 松本恵子／訳 新潮社  
昭和26（1951）年
- 『ポンペイ最後の日』（百万人の世界文学第3巻）リットン／著 堀田正亮／訳 三笠書房  
昭和28（1953）年

## 6. 「池田文庫」と円本

昭和初期、大量生産方式により予約頒価1冊1円の廉価で出版され、出版界・読書界に画期的なブーム現象を呈した全集類の俗称である。当時、第一次世界大戦が終結し、大正12（1923）年の関東大震災に伴う恐慌により、出版界は一大不況に見舞われており、打破する一策として、改造社社長山本実彦の創案により、大正15（1926）年11月に同社が発行を開始したことが円本の発端である。円本の謂れは、定価1冊1円であったところから、当時の東京市内どこでも1円の円タクにちなんでいる。改造社版『現代日本文学全集』（当初全38巻 大正15（1926）年11月発行、その後追加を重ね、全62巻別巻1巻となる）はその嚆矢となる全集である。震災による出版物の不足や大衆文化主義にも合致したこともあり、38万人の予約購読者を獲得し、異常なブームを巻き起こし、一世を風靡したことが他の出版社を刺激した。新潮社が1冊1円で『世界文学全集』全38巻を発刊し、その広告が朝日新聞〔昭和2（1927）年1月30日号〕に掲載され<sup>(55)</sup>、58万部という爆発的な売れ行きを示した。その後、第2期19巻が発行された。他社もそれに追随し、200種以上の同一方式による廉価な全集を発行し、宣伝・販売を競った。いわゆる「円本合戦」がそれである。この他、全集として『世界大思想全集』春秋社、『現代大衆文学全集』（全60巻）平凡社、『近代劇全集』（全43巻）第一書房、『明治大正文学全集』（全60巻）春陽堂などがある。しかし、このブームも改造社の文学全集が完結するに伴って収束に向かったが、これにより出版界に大量出版の体制と多くの新しい読者が開拓され、この時期を出版史上「円本時代」と呼んでいる。戦後の総合全集も、一種の円本とみなせる<sup>(56)</sup>。

昭和初期の出版界に旋風を巻き起こした改造社は、大正・昭和初期の文人・思想家がこぞって寄稿した雑誌「改造」を発行し、バートランド・ラッセルやアインシュタインを日本に招聘し、ロマン・ロラン、トロッキー、魯迅等の知識を日本に伝えた。戦時下の言論統制により、解散

を命じられたが、戦後復興したものの、山本実彦の逝去により、昭和30（1955）年終焉した。

○『現代日本文学全集』（全62巻、別巻1巻）改造社〔大正15（1926）年11月—昭和6（1931）年〕

本書の編集に携わった、木村毅は近代文学研究者としてだけでなく<sup>(57)</sup>、評論、小説など、幅広く活躍し、柳田泉と並ぶ明治文学研究の先駆者である。本書の編集案から組み方、造本まで、細部まで考案し、以後発行される文学全集の基本を作った。

本書の装幀に携わった、杉浦非水は多摩美術大学の前身である多摩帝国美術学校の初代校長であった<sup>(58)</sup>。日本モダンデザインの先駆者、芸術院恩賜賞を受けた日本画家でもある。三越をイメージアップしたアールヌーボーの天才デザイナーとしても著名である。本書の装丁はアールヌーボー的な瀟洒な装幀が当時の時代を象徴している。

池田文庫所蔵分

第4編『徳富蘇峰集』徳富蘇峰／著 昭和5（1930）年 第23編『岩野泡鳴集、上司小剣集、小川未明集』岩野泡鳴／著 上司小剣／著 小川未明／著 昭和5（1930）年 第24編『谷崎潤一郎集』谷崎潤一郎／著 昭和2（1927）年 第26編『武者小路実篤集』武者小路実篤／著 昭和2（1927）年 第28編『島村抱月集、生田長江集、中沢臨川集、片上伸集、吉江孤雁集』島村抱月／著 生田長江／著 中沢臨川／著 片上伸／著 吉江孤雁／著 昭和5（1930）年 第38編『現代短歌集、現代俳句集』山本三生／編 昭和4（1929）年 第48編『廣津和郎集、葛西善蔵集、宇野浩二集』廣津和郎／著 葛西善蔵／著 宇野浩二／著 昭和4（1929）年 第49編『戦争文学集』桜井忠温／著 水野広徳／著 昭和4（1929）年 第50編『新興文学集』前田広一郎／他著 昭和4（1929）年 第52編『宗教文学集』 昭和6（1931）年 第60編『大仏次郎集』大仏次郎／著 昭和5（1930）年

○『世界文学全集』（全38巻）新潮社 昭和2（1927）年—昭和5（1930）年 第2期（全19巻） 昭和7（1932）年 池田文庫には第1期、全38巻のうち、第5巻を除く37巻を所蔵している。（全巻の内容は別紙1を参照）

○第2期 昭和7（1932）年発行 池田文庫所蔵は第8巻 他は未所蔵（内容は別紙1を参照）

第8巻『人われを大工と呼ぶ』シンクレア／著 谷譲次／訳 『百パーセント愛国者』シンクレア／著 早坂二郎／訳

○『明治大正文学全集』（全60巻）春陽堂 昭和2（1927）年—昭和7（1932）年

池田文庫所蔵は第27巻、第33巻。第51—60巻は「明治大正昭和文学全集」と表記されている。他は未所蔵（内容は別紙1を参照）

第27巻 夏目漱石篇 三四郎、倫敦塔、幻影の盾、坊ちゃん、草枕、夢十夜、虞美人草、吾輩は猫である（抄） 第33巻 長田幹彦篇 零落、母の手、寂しき日、草笛、滯、糺の森、夢占、死霊、送り火、野の宮、蜘蛛、鳥辺山、雛勇、狸大尽、しぐれ茶屋、薄雪、お鶴、未墾地、師匠の娘、鯨ころし、扇昇の話、霧 野上弥生子篇 大石良雄、海神丸、父親と三人の娘

- 『世界大衆文学全集』（全80巻）改造社 昭和2（1927）年—昭和6（1931）年  
池田文庫には本全集80巻のうち、69、70巻『巖窟王』上、下を除く78巻を所蔵している。  
円本の先鞭をつけた改造社が半値の50銭で頒布した全集であり、現在の文庫本と同じくA6版で刊行された。この全集の特徴の一つは、欧米の映画などの娯楽作品を日本に移入し、成功した点が挙げられる。また『家なき児』『アルセーヌ・ルパン』『三銃士』『マーク・トウェーン名作集』『宝島他2編』『宇宙戦争』『海底旅行』など著名な児童書が収録されている。その他、江戸川乱歩が『ポー作品集』や『世界怪奇探偵事実物語集』等探偵小説等の収録作品も挙げることができる。通常の翻訳全集に載る作品もあるが、一貫して娯楽性を表に出した海外文学の入門書として手軽に読めるところに本書の特徴がある。（池田文庫所蔵分は別紙1を参照）
- 『世界大思想全集』第1期 春秋社 第1巻—124巻 昭和2（1927）年—昭和12（1937）年  
080/Se22/1-1-99、080/Se22/1-118-124 但し、第112巻は欠号。他は池田文庫に全巻所蔵。（池田文庫所蔵分は別紙1を参照）  
〔第82巻、第93巻—第99巻は松柏館書店発行〕
- 『世界大思想全集』第2期 春秋社 第1巻—29巻 昭和4（1927）年—昭和8（1933）年  
080/Se22/2-1-10、080/Se22/2-17、2-18、2-19 （全巻の内容は別紙1を参照）
- 第10巻 『文藝復興史』ブルックハルト／著 山岸光宣／訳 昭和5（1930）年 第17巻『独逸社会民主党史』メーリング／著 米田幸雄／訳 昭和6（1931）年 第18巻『独逸社会民主党史』メーリング／著 高村洋一／訳 昭和8（1933）年 第19巻『独逸社会民主党史』メーリング／著 塚本三吉／訳 昭和7（1932）年 第20巻『独逸社会民主党史』メーリング／著 塚本三吉／訳 昭和6（1931）年
- 『現代大衆文学全集』（全40巻）平凡社 昭和2（1927）年5月—昭和5（1930）年3月  
『現代大衆文学全集』続（全20巻）平凡社 昭和5（1930）年8月—昭和7（1932）年3月  
中央図書館、池田文庫ともに未所蔵。
- 『近代劇全集』（全43巻 別冊1巻）第一書房 昭和2（1927）年—昭和5（1930）年  
イプセン誕生百年記念出版 予約非売品 池田文庫に全巻所蔵（全巻の内容は別紙1を参照）

## 7. 「池田文庫」における「岩波文庫」「改造文庫」について

終戦を迎え、創立者は激動する世情のなかで、多くの青年と同様に、真実とは、人間とは何か、何を人生の支柱にしていくのか悩む日々が続いた。その頃、向学の心止み難く、神田三崎町の東洋商業学校（現東洋高等学校）2年に編入し、神田に通っていた。その頃について次のように語っている。

「薄給のなかから蓄えた小づかいを持っては、神田に飛んでいき、望みの本を見つけて喜んだのもこのころである。古典、新刊書など、手に入るものは乱読というか、片っぱしから読んだといってよい。読書は、私の人生にとって最大の趣味の一つである。すばらしい良書にめぐりあった喜びはなににもまして、といてよいほどのうれしさがあつた。岩波書店へ行つて、列をなしているところに並んで、やっと一冊の本を手に入れたこともある<sup>(59)</sup>」

池田文庫には、様々な文庫本があるが、その中でも、岩波文庫が群を抜いており、冊数は1,919冊を数える<sup>(60)</sup>。所蔵している岩波文庫を手にとってみると、殆どの文庫本が、擦り切れるまで読まれた跡が伺われ、良書を求める姿勢に感銘を受けたことを憶えている。岩波文庫は、昭和2（1927）年7月10日に、岩波書店から創刊された。その前日には、東京朝日新聞に「古今東西の典籍・自由選択の普及版」との見出しと共に、創刊の辞である「読書子に寄す—岩波文庫発刊に際して<sup>(61)</sup>」が掲載され、夏目漱石『こゝろ』樋口一葉『にごりえ』『たけくらべ』など22冊が発刊された。岩波文庫はドイツ・ライプツィヒで創刊された「レクラム文庫」に範を求め、書目を古典中心とすること、内容は省略しないこと、版型を小型軽便なものとし、表紙にファイバー紙を用いること、頁数により定価を定め、星一つを定価の最小単位とすることなどであった。刊行以来、現在（2001年8月）までの岩波文庫のベストセラーを挙げると、1位『ソクラテスの弁明』2位『エミール』（上）3位『坊ちゃん』4位『共産党宣言』5位『善の研究』6位『こゝろ』7位『歎異抄』8位『古事記』9位『空想より科学へ』10位『論語』である。

岩波文庫以前にも袖珍本などと呼ばれた、富山房『袖珍名著文庫』明治36（1903）年発刊などが文庫本の嚆矢であるが、古典的な作品を大量かつ廉価に刊行する、現在の文庫本の概念を作り上げたのは岩波文庫であった。創刊40周年には『解説目録』60周年には『岩波文庫総目録』70周年には『岩波文庫解説総目録』（文庫版3分冊）が刊行された。

改造文庫は、昭和4（1929）年2月3日に、改造社から創刊され、23冊発行された<sup>(62)</sup>。昭和19（1944）年に戦時下の言論統制により、改造社が解散を命じられ、それと共に廃刊となった。哲学、社会科学、文学関係を重点的に出版し、発行点数は600点を超えていた。当初は布製であったが、昭和11（1936）年からは紙製となった。布製の時についていた紙のカバーの意匠がそのまま紙製の表紙の意匠となっている。創刊時から、昭和12（1937）年の前半までの改造文庫の奥付のあとには、発刊の辞ともいべき文章が掲載されている。池田文庫にも改造文庫が21冊所蔵されている<sup>(63)</sup>。

#### 『改造文庫』改造社刊 昭和4（1929）年—昭和19（1944）年

『セワストポリ戦記』トルストイ／著 昭和16（1941）年 『文化と風土—英文学史、其他』イボリート・テヌ／著 昭和14（1939）年 『頼朝・為朝』幸田露伴／著 昭和9（1934）年 『民族大移動』ハツドン／著 昭和8（1933）年 『旅する心』有島武郎／著 昭和8（1933）年 『我国近世の農村問題』本庄栄治郎／著 昭和7（1932）年 『我等の対立』プレハノフ／著 昭和（1932）年 『信綱文集』佐々木信綱／著 昭和7（1932）年 『経済学史の基礎概念—唯物史観経済学史』住谷悦治／著 昭和6（1931）年 『原始財産』エミール・ド・ラヴレー／著 昭和6（1931）年 『経済地理概論』プレブス・リーグ／著 昭和5（1930）年 『金融資本論』猪俣津南雄／著 昭和5（1930）年 『神と国家』ヒルファーディング／著 昭和4（1929）年 『リッケルト論文集』ハインリッヒ・リッケルト／著 昭和4（1929）年 『日本開化小史』田口卯吉／著 昭和4（1929）年 『財産起源論』レヴィンスキー／著 昭和4（1929）年 『日輪』横光利一／著 昭和4（1929）年 『中江兆民集』中江兆民／著 昭和4（1929）年 『幸徳秋水集』幸徳秋水／著 昭和4（1929）年 『組織論』レエニン／著 昭和4（1929）年 『日本商業史』横井時冬／著 昭和4（1929）年

## 8. 創立者と駿河台図書館

創立者の『若き日の日記』には、千代田区神田駿河台にあった、駿河台図書館を何度も利用していることが記されている。創立者が若き日に通われた駿河台図書館について述べてみたいと思う。駿河台図書館周辺の事情について、東京都戦災史によると、駿河台地区を島状に残して、一面の焼け野原なった状態で終戦を迎えていた。駿河台図書館は焼失せず、終戦後2ヶ月足らずの昭和20年10月10日頃から再開している。「学生の町」神田に青少年が多く集まった理由として、駿河台図書館を中心とする駿河台一帯の学校街が比較的戦災に遭わず、当時の交通事情が便利であり、御茶ノ水・神田・秋葉原駅から上野駅にかけて闇市が盛んであったことも理由に挙げられる。このような状況のなかで、駿河台図書館は全都の学生・生徒が知識を求め、極度に不足していた出版物を求め、なおかつ、自宅で学習する場所もないという事態を解決するために、図書館を利用することが必要であった。駿河台図書館は学生サービスに重点をおく図書館としての運営が考えられており、受験に関する参考目録の整備とともに、法制、経済、医学、数学、語学に関する図書を主として蒐集し、一般参考書、辞書類等も広く蒐集されていた。レファレンスも積極的に行われた。

「駿河台図書館閲覧年報」昭和8年～昭和30年の利用状況の推移を見ると、利用者数が図書館閲覧冊数をこえるようになったのは昭和25年の朝鮮戦争開始以降であり、利用者数が20万人をこえたのは図書館の入館料が無料になったことが大きい。

又、特色ある文庫として「内田嘉吉文庫」が所蔵されている。「内田嘉吉文庫」は日本無線電信社長、故内田嘉吉氏の蔵書で、主に交通に関する内外の文献を網羅したもので、14,000余冊を数えている。

昭和26年3月、「千代田自由大学」が「学問と芸術」の復興を掲げて発足した。敗戦後、社会教育の一環として、駿河台図書館が開講し、昭和40年11月までの15年、28回の講演が行われ、設立当初の「自由大学」の理想と学芸復興の理念が損なわれず、継続されたのである。

駿河台図書館は昭和30年12月1日、九段下に「千代田図書館」として開館した。それ以降、駿河台図書館は、中央大学第2図書館として、新図書館が建設されるまで、中央大学の学生に利用されていた。

駿河台図書館の沿革を参考までに記述しておく。

- 明治44（1911）年6月21日東京府知事設置認可。東京市立神田簡易図書館と称し、神田区一ツ橋通町21帝国教育会附属建物内に設置
- 明治44（1911）年11月5日私立教育図書館及辻文庫蔵書（32,753冊）の委託を受け開館。
- 明治45（1912）年4月1日東京市立神田第一簡易図書館と館名変更。
- 大正2（1913）年4月1日東京市立一橋図書館と館名変更。
- 大正12（1923）年9月1、2日の大震災火災により焼失。
- 大正13（1924）年3月継続震災復旧費100万円（深川、一橋、京橋の3図書館分）可決。
- 大正13（1924）年6月1日神田区東紅梅町ニコライ堂下にバラックを建設し開館。
- 昭和4（1929）年12月1日東京市立駿河台図書館と館名変更。
- 昭和4（1929）年12月29日工事竣工。
- 昭和5（1930）年3月1日開館。
- 昭和18（1943）年7月1日都制施行に伴い都立図書館となる。
- 昭和20（1945）年5月空襲激化のため一時閉館。館員は京橋図書館に勤務。
- 昭和25（1950）年10月28日区立駿河台図書館となる。

図書館委譲に伴う区立図書館設置条例案に附せられた駿河台図書館の概況

位置 千代田区神田駿河台3丁目11番地

土地 461坪43

建物 延726坪18 鉄筋コンクリート造3階

蔵書 69,995冊

- 昭和26（1951）年3月10日千代田自由大学始まる。
- 昭和26（1951）年4月1日入館料が無料となる。
- 昭和28（1953）年2月9日中央大学より駿河台図書館の払下申請。
- 昭和30（1955）年3月10日移転準備のため閉館し、半蔵門の麹町支所に移る。
- 昭和30（1955）年12月1日九段下に千代田図書館として開館。

## 9. おわりに

今回、創立者の若き日々の読書を『若き日の日記』の記述をもとに、読書にまつわる個所を一覧表に作成する作業を行い、それを基本に『若き日の読書』『続・若き日の読書』『読書ノート』などから読書記録に関するものを池田文庫から選定して『創立者にみる、若き日々の読書』図書目録（稿）を編纂した。まだ不十分な個所も散見できるが、創立者の若き日々の読書を読むにあたり、参考になればとの思いで作成した。訂正個所があればご指摘いただき、加筆訂正をして修正版を作成して行きたい。

一人の青年が公私に渉り、峻厳なまでに師を求め、仕事、生活、経済苦、病気、組織活動など、多くの困難と戦いながら、疾風怒濤の青春時代を懸命に生き抜いてきた姿を拝見し、感動を禁じえない。「青年よ、心に読書と思索の暇をつくれ」との師匠の言葉のまま、日々の活動の後、早朝、瞬時の時間も惜しまず読書をされる姿が、毎日のように日記に記されている。

7万冊を数える池田文庫の書庫で、直接、創立者が読まれた書籍の数々を手にとると、日記に綴られた思索の跡が彷彿としてくる。かつて、司馬遼太郎記念館の大書架を見る機会があった。吹き抜けの高さ11メートルの壁面に3,400の書棚が覆い、2万余冊の書籍が圧倒的な迫力を持って司馬遼太郎の小宇宙を構成している。そこに司馬遼太郎の作品を生み出す原点を見る思いであった。

創立者の思索の原点はまさしく、池田文庫にあり、「学生の皆さんが、大いに読み、活用して実力を磨き、成長してくれるならば、こんな嬉しいことはない」とのお言葉を忘れてはならない。

創立者の魂である、池田文庫。『私の読書術』に「すばらしい良書にめぐりあった嬉しさは本をなでさすりたくなる。（中略）たまってしまった書庫の本を、時折りみながら、わが晩年に、これらの本に埋もれて読書三昧の時をむかえたいと思うが、はたしてこのささやかな、ひそかな願いは、かなうであろうか。こう思うことも、書庫での愉しみの一つである<sup>(64)</sup>」我が子のように慈しまれ、一冊一冊に創立者の思いが込められた書物である。是非、池田文庫の書籍を直接読んでいただきたい。

中央図書館在職中、個人コレクションの整理を多数経験した。中でも、忘れられないのは、フランス近代史研究、秩父事件の先駆的研究者であられた井上幸治先生と日本平和学会設立に尽力し、平和学の第一人者であられた関寛治先生の学問に対する真摯な姿勢であった<sup>(65)</sup>。目録作成のため、それぞれの図書を手にとると、欄外に書き込みが多数あり、これらの書物から、何を学び、どのようにそれぞれの研究を深化していったのか、その思索の過程を研究すること

も大事な視点ではないかと思う。

「池田文庫」についても、創立者がテキストに線を引き、書き込みをされている著作が多数あり、将来的に、創立者の思索の過程を知ること、今後の研究テーマではないだろうか。

今回は「若き日々の読書」に焦点を当ててきたが、創立者の思想の原点、魂でもある「池田文庫」を大いに活用し、研究し、学んでいただきたい。

最後に、改めて「池田文庫」を後継の学生のためにご寄贈いただいた、創立者池田大作先生に、深く感謝の意を表したい。

(注)

- (1) 『若き日の日記』池田大作／著 の初出は雑誌「週刊言論」に昭和40(1965)年1月から60回に分けて「若き日の日記から」と題して連載されている。単行本化は著者が創価学会第3代会長就任7周年の佳節を迎えた、昭和42(1967)年5月3日に発行された。この時、未発表の日記・昭和30(1955)年2月から昭和35(1960)年5月までが加えられた。『若き日の日記』全5巻(限定出版) 会長就任7周年記念出版委員会(3巻から発行は、若き日の日記出版委員会となる) 昭和42(1967)年5月-昭和48(1973)年2月。4巻には「戸田前会長の指導」が掲載されており、昭和26(1951)年前後の戸田城聖が折りにふれて話された指導を、創立者が雑記帳に記したものである。各巻の収録期間を挙げると、第1巻 昭和24(1949)年5月-昭和26(1950)6月、第2巻 昭和27(1952)12月-昭和30(1955)年1月、第3巻 昭和30(1955)年2月-昭和31(1956)年12月、第4巻 昭和32(1957)年1月-昭和33(1958)年5月、第5巻 昭和33(1958)年6月-昭和35(1960)5月となっている。この他、全集にも組み入れられ、『池田大作全集第36巻(日記上)』池田大作／著 聖教新聞社 平成2(1990)年5月、『池田大作全集第37巻(日記下)』池田大作／著 聖教新聞社 平成3(1991)年5月として刊行された。注記は基本的には本全集に拠っている。  
『私の履歴書』池田大作／著 日本経済新聞社 昭和50(1975)年5月、文庫本では『私の履歴書』(聖教文庫120G46)池田大作／著 聖教新聞社 昭和53(1978)年9月がある。全集には『池田大作全集大第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月がある。
- (2) 『私の履歴書』池田大作／著 日本経済新聞社 昭和50(1975)年5月 「序文」p.3.
- (3) 『読書ノート』は『第三文明』誌上に昭和39(1964)年3月号(通巻37号)から8月号(通巻42号)の巻頭に6回にわたって発表されたものである。そこには古今東西の碩学の箴言が抜き書きされており、思索の跡を辿ることができる。
- (4) 「創立者にみる、若き日々の読書」図書目録(稿) 創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟  
〔昭和17(1942)年-昭和35(1960)年5月4日〕 菫沢賢一／編 創価教育研究センター 平成15(2003)年3月
- (5) 『池田文庫』開設のうちに、創価大学中央図書館が作成した『「池田文庫について」平成9(1997)年5月8日』の全文である。
- (6) 『聖教新聞』聖教新聞社 平成9(1997)年5月9日付1面
- (7) 『聖教新聞』聖教新聞社 昭和55(1990)年11月14日付2面「デイリーダイジェスト」
- (8) 『聖教新聞』聖教新聞社 平成5(1993)年7月4日付3面 第22回滝山祭の記念フェスティバルの席上、創立者は「池田文庫」を創価大学に寄贈するとのスピーチをおこなった。  
「1冊1冊、我が子のように。私も、15歳のときから集めた本が約7万冊にのぼっている。すべてを読んだわけではないが、お金のないときも、本だけは我が子のように大切にしてきた。(中略)1冊1冊が、私にとって多くの思い出が込められている。どうか、読書と研鑽に役立てていただければと思う」との言葉は「創大生」を我が子のように慈しまれた創立者の真心のスピーチである。
- (9) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「はしがき」

p. 11.

- (10) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「少壮時代の生き方 国木田独歩『欺かざるの記』」 p. 18-19.
- (11) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「少壮時代の生き方 国木田独歩『欺かざるの記』」 p. 21.
- (12) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「宇宙生命との対話 徳富健次郎『自然と人生』」 p. 25.
- (13) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「宇宙生命との対話 徳富健次郎『自然と人生』」 p. 30-31.
- (14) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「天才詩人の光と影 石川啄木『一握の砂』」 p. 34.
- (15) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「青春のロマンと友情 ヘルダーリン『ヒュペリオン』」 p. 46.
- (16) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「青春のロマンと友情 ヘルダーリン『ヒュペリオン』」 p. 47-48. 「鎌倉文庫」については『嬉しい轉手古舞』 p. 395-396. 『鎌倉文庫について』 p. 397-402. (高見順全集 第17巻) 勁草書房 昭和48 (1973) 年5月のなかで高見順が紹介をしている。
- (17) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「百年の後に知己を待つ 勝海舟『氷川清話』『海舟座談』」 p. 65-66.
- (18) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「天下の大事を担うもの 山田濟齋編『西郷南洲遺訓』」 p. 68.
- (19) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「運命的な師との出会い 内村鑑三『代表的日本人』」 p. 78-79.  
『読書ノート』に次の一節が写しとられている。  
『あの実に重要な死の問題、—それは凡ゆる問題中の問題である。死のあるところ、宗教はあらねばならぬ。それは我々の弱さの徴であるかも知れぬ。併し其にも拘らず、我々の高貴なる生まれなると、我々の衷に死なざるもののあることとの徴でもある』この一節を巡って、読書グループの友人と森ヶ崎海岸を散策しながら、生と死の問題を深く探求されていた。人間にとって宗教は必要であるか。否か。必要とすれば、いかなる宗教が求められるべきか— この頃、仏法哲理を説き、人生の指標を示してくれる生涯の師・戸田城聖との邂逅があったのである。
- (20) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「現代を超越する精神 高山林太郎『楞牛全集』」 p. 86-87
- (21) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「教育に賭ける情熱 ペスタロッチ『隠者の夕暮・シュタンツだより』」 p. 99  
戸田城聖が経営する出版社、日本正学館が発行した『少年日本』昭和24年10月号に「大教育家ペスタロッチ」と題した一文がある。著者は編集長でもあった創立者が山本伸一郎のペンネームで寄稿したものである。この一文を執筆するにあたり、「読書ノート」や本書を教材にした、友人との議論が参考になった。
- (22) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「思想・人物・時代を読む 尾崎士郎『風霜』」 p. 117-118.
- (23) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「人間共和の旗を掲げて ホール・ケイン『永遠の都』」 p. 106-107.
- (24) 『池田大作全集 第23巻 (随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6 (1994) 年5月 「貧しい人々への共鳴 ユゴー『レ・ミゼラブル』」 p. 124-125.

- (25) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「織りなす人物の長編詩 吉川英治『三国志』」p.134-135.
- (26) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「自然こそ最良の教師 ルソー『エミール』」p.144-145.  
 『創価教育学体系』のなかで、教育改革案を提唱されているが、そこにルソーの名が見える。  
 『コメニュース、ルッソー等の教育改革家の覚醒以来の事で、ペスタロッチが敢然旧い伝統に反抗して、開発教授の新旗標を樹てたのは即ちこれである。然る所、因習の久しき教育と云へば、自ら知識の伝授と心得たのは邦の東西を問はぬ状態で、惟へば希臘の昔ソクラテースが知識は伝授することは出来ぬと道破して居るのであるが、今に尚ほ此の諺が改まって居らないのによる。入学試験制度の結果といふ事も出来やう』
- (27) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「信念に生きる青年のドラマ デュマ『モンテ・クリスト伯』」p.154-155.
- (28) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「大いなる運命への挑戦 デフォー『ロビンソン・クルーソー』」p.168-171.
- (29) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「時代を変えた民衆の風 サバチニ『スカラムーシュ』」p.174-175.
- (30) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「古代都市の栄光と悲劇 リットン『ポンペイ最後の日』」p.185-186.
- (31) 『私の履歴書』池田大作／著 日本経済新聞社 昭和50(1975)年5月「1冊の本」p.177.
- (32) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「ルネサンスへの讃歌 ダンテ『神曲』」p.209-210. 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「独立自尊の生意気高く 福沢諭吉『学問のすゝめ』『福翁自伝』」p.222-227.
- (33) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「独立自尊の生意気高く 福沢諭吉『学問のすゝめ』『福翁自伝』」p.222-227.
- (34) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「革命と良心の葛藤劇 ユゴー『九十三年』」p.242.
- (35) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「豊かな人間学の宝庫 司馬遷『史記』」p.250-252.
- (36) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「虹を追い求めた革命児 鶴見祐輔『ナポレオン』」p.278-279. p.284.
- (37) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「魂の自由への烽火 ルソー『社会契約論』」p.264.
- (38) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「青春の混沌をこえて ゲーテ『若きウェテルの悩み』」p.293-294.
- (39) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「民衆の時代への曙光 魯迅『阿Q正伝』」p.303-305.
- (40) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「人間の大地に魂の雄叫び ゴーゴリ『隊長プーリバ』」p.318-319.
- (41) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「あくなき魂の希求 パスカル『パンセ』」p.334-335.
- (42) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「自由なる精神の輝き バイロン『バイロン詩集』」p.349.
- (43) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「科学と人間の新しい地平線 サートン『科学史と新ヒューマニズム』」p.364-365.

- (44) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「最極の宮殿  
わが胸中に ミルトン『失樂園』」p.377-379.
- (45) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「民衆に愛さ  
れた哲人 エマーソン『エマソン論文集』」p.392.
- (46) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「人間復興の  
エトスを求めてマックス・ウェーバー『宗教社会学論集』」p.409、417.
- (47) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「権威への信  
仰を打ち砕く革命イブセン『人形の家』」p.420-421.
- (48) 『池田大作全集 第23巻(随筆)』池田大作／著 聖教新聞社 平成6(1994)年5月「偉大なる魂  
の継承劇 プラトン『ソクラテスの弁明』」p.436-437、448.
- (49) 『聖教新聞』聖教新聞社 平成11(1999)年12月7日付3面『随筆 新・人間革命「戸田大学」の名  
講義』117 平成11(1999)年11月26日付3面『随筆 新・人間革命 わが魂の「戸田大学」』115
- (50) 『聖教新聞』聖教新聞社 平成11(1999)年12月18日付3面『随筆 新・人間革命 師弟=人間教育  
の真髄』118
- (51) 『人間革命第7巻』池田大作／著 聖教新聞社 昭和47(1972)2月「水滸の誓い」p.193-239.
- (52) 『池田大作全集 第36巻(日記上)』池田大作／著 聖教新聞社 平成2(1990)年5月『若き日の  
日記』昭和29年6月7日(月)p.434-435.
- (53) 『池田大作全集 第36巻(日記上)』池田大作／著 聖教新聞社 平成2(1990)年5月『若き日の  
日記』昭和29年6月22日(火)p.452-453.
- (54) 『池田大作全集 第36巻(日記上)』池田大作／著 聖教新聞社 平成2(1990)年5月『若き日の  
日記』昭和26年1月13日(土)p.186.
- (55) 新潮社の創業者社長・佐藤義亮が文案を作成した。「人生の諸相を悉く人間学の大教科書は是だ」  
というキャッチフレーズを掲げ、「吾々は日本人であると共に世界人だ。その世界人としての資格を  
全うせしめる教化機関は翻訳文藝以外にはない」と翻訳出版に絶対の自信をみせた。
- (56) 円本の時代については以下の文献を参照した。  
『出版事典』布川角左衛門／編 出版ニュース社 昭和46(1971)年12月  
『出版』好不況下 興亡の一世紀 新訂増補版 鈴木敏夫／著 出版ニュース社 昭和47(1972)年  
6月20日第2版)  
『日本文学史辞典』谷山茂／編 京都書房 昭和57(1982)年9月
- (57) 木村毅(きむら・き) 明治27(1894)年—昭和54(1979)年 大正・昭和期の評論家・近代文学研  
究家。柳田泉らと共に明治文化研究会に参加し、様々な分野で幅広く活躍する。明治文学研究の先駆  
者。円本の嚆矢である大正15年発刊の『現代日本文学全集』(改造社版)の編集をてがげた。文学全集  
のスタイルを作った。『小説研究十六講』『西園寺公望自伝』『明治文学余話』など多数。
- (58) 杉浦非水(すぎうら・ひすい) 明治9(1876)年—昭和40(1965)年 商業美術家。愛媛県生ま  
れ。本名朝武。明治34(1901)年東京美術学校日本画科卒業。ヨーロッパ遊学を終えて、大正14(1925)  
年にポスター研究団体七人社を結成。初期商業デザイン界に指導的な役割を果たした。昭和10(1935)  
年より多摩帝国美術学校校長となる。与謝野晶子『夢之華』田山花袋『髪』改造社版『現代日本文学  
全集』の装丁のほか、『非水百花譜』20集[昭和4(1929)年—9(1934)年春陽堂]など多数。
- (59) 『私の履歴書』池田大作／著 日本経済新聞社 昭和50(1975)年5月「焼け跡の向学心」p.65.
- (60) 岩波文庫分野別冊数[創価大学中央図書館『池田文庫目録』平成9(1997)年5月現在]  
総記 5冊 哲学 226冊 歴史 124冊 社会科学 228冊 自然科学 56冊 技術 3冊  
産業 7冊 芸術 46冊 言語 1冊 文学 1,223冊 合計 1,919冊
- (61) 「読書子に寄す—岩波文庫発刊に際して—」 岩波茂雄 岩波文庫の主旨がこの文章で明確に述べら  
れている。全文を以下に掲載する。

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書齋と研究室とより解放して街頭にくまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行を見る。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇称する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を繋縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。吾人は天下の名士の声に和してこれを推挙するに躊躇するものである。このときにあたって、岩波書店は自己の責務のいよいよ重大なるを思い、従来の方針の徹底を期するため、すでに十数年以前より志して来た計画を慎重審議この際断然実行することにした。

吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西にわたって文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類のいかんを問わず、いやしくも万人の必読すべき真に古典的価値ある書をきわめて簡易なる形式において逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は予約出版の方法を排したるがゆえに、読者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選択することができる。携帯に便にして価格の低きを最主とするがゆえに、外観を顧みざるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます發揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。芸術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの挙に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上経済的には最も困難多きこの事業にあえて当たらんとする吾人の志を諒として、その達成のため世の読書子とのうらわしき共同を期待する。

- (62) 岩波文庫と双壁であった『改造文庫』にも奥付の裏表紙に「発刊の辞」が掲載されている。タイトルも署名も日付もないが、改造社社長の山本實彦が執筆したようである。以下、全文を掲載する。岩波文庫と比較してみるとおもしろい。

「我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉価版全集の創始者である。我社が大正15年11月多大の犠牲を予期して廉価全集を発行するや、感激の声国内を震撼し、日々数千通の感謝状が舞ひ込んだ。今迄、特権階級のもの芸術であり、哲学であり、経済、美術、科学であったものが無産階級の全野に開放されてからは全国を通じて読書階級が一時に数十倍となった。この画期的現象を招来し、我國の文化を一時に引き上げ文化史上赫々たる我社は、尚その内容は別記の如くであるが、我社は数十年を期して、あらゆる権威ある著作を本集に網羅して民衆の一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟

- 此の文庫は、内容厳選と最低の廉価とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。
- 此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亘り、校訂、註釈、総て典拠たるべきを期す。
- 此の文庫は、社会、経済、政治、哲学、思想、歴史、文学、芸術、美術等百般に及ぶ。
- 表紙上の番号は単に発行順を示すものなれど、将来検索上の便宜を考慮に容れて之を示す。
- 1冊の分量は約百頁以上五百頁とし、定価は約百頁を単位として拾銭としその冊子の頁に応じて二十銭、三十銭、四十銭、五十銭とす。但、地図附録等挿入の場合は、必ずしもこの例に依らず。
- 表紙意匠中、1は十銭を、2は二十銭を、3は三十銭を示す。以下之に倣う。
- 定価及び送料左表の如し

背表紙 の符号	1	2	3	4	5	6	7	8
定価 (銭)	10	20	30	40	50	60	70	80
送料 (銭)	2	4	6	8	10	12	14	16

- (63) 改造文庫分野別冊数〔創価大学中央図書館『池田文庫目録』平成9(1997)年5月現在〕  
 総記 0冊 哲学 1冊 歴史 4冊 社会科学 9冊 自然科学 0冊 技術 0冊  
 産業 2冊 芸術 0冊 言語 0冊 文学 5冊 合計 21冊
- (64) 『週刊朝日』昭和44(1969)年6月20日号
- (65) 井上幸治(いのうえ・こうじ) 明治43(1910)年—平成元(1989)年 フランス近代史を研究し、戦後西洋史研究の一つの基礎を作った。また、郷里の埼玉県に起きた、「秩父事件」の先駆的研究や史料集成でも知られている。昭和28(1953)年から神戸大学、立教大学、津田塾大学の教授をつとめた。主な著作に『ミラボーとフランス革命』『ナポレオン』『秩父事件』など多数。  
 平成4(1992)年8月、創価大学中央図書館に蔵書(和書3,178冊 洋書1,864冊)をご寄贈いただいた。  
 関寛治(せき・ひろはる) 昭和2(1927)年—平成9(1997)年 国際政治学者。昭和46(1971)年、母校の東京大学教授となり、その後、広島大学、立命館大学教授となる。平和研究を推進し日本平和学会を設立し、初代会長となる。主な著作に『現代東アジア国際環境の誕生』『地球政治学の構想』など多数。  
 創価大学「平和問題研究所」が昭和51(1976)年開設され、客員研究員となる。  
 平成9(1997)年12月、創価大学中央図書館に蔵書8,000冊をご寄贈いただいた。

(参考文献)

- 『人間革命』全12巻 池田大作／著 聖教新聞社 昭和40(1965)年10月—平成5(1993)年4月  
 『年譜・池田大作I』年譜・池田大作編纂委員会／編 第三文明社 昭和56(1981)年  
 『データに見る「人間革命」の時代』パンプキン編集部／編 潮出版社 平成5(1993)年4月  
 『定本ベストセラー昭和史』塩澤実信／著 展望社 平成14(2002)年7月  
 『文庫博覧会』奥村敏明／著 青弓社 平成11(1999)年10月  
 『ニッポン文庫大全』紀田潤一郎、谷口雅男／監修 岡崎武志、茂原弘一／編 ダイヤモンド社 平成9(1997)年11月  
 『全集・内容総覧、上下』(現代日本文学総覧シリーズ第1巻) 昭和57(1982)年6月  
 『講談社日本人名大辞典』上田正明／他監修 講談社 平成13(2001)年12月  
 『改造社の時代・戦前編』水島治男／著 図書出版社 昭和51(1976)年5月  
 『改造社の時代・戦中編』水島治男／著 図書出版社 昭和51(1976)年6月  
 『改造社と山本実彦』松原一枝／著 南方新社 平成12(2000)年4月  
 『東京都公立図書館略史』東京都立日比谷図書館 昭和44(1969)年  
 『東京の公立図書館』佐藤政孝／著 泰流社 昭和49(1974)年11月  
 『東京の図書館百年の歩み』佐藤政孝／著 泰流社 平成8(1996)年6月  
 『千代田図書館八十年史』千代田区／著 千代田区 昭和43(1968)年3月  
 『市民社会と図書館の歩み』佐藤政孝／著 第一法規 昭和54(1979)年10月

## 別紙 1

- 『世界文学全集』（全38巻）新潮社 昭和2（1927）年—昭和5（1930）年  
池田文庫には第1期、全38巻のうち、第5巻を除く37巻を所蔵している。  
第5巻未所蔵分（ゴシックで記載）

第1巻『神曲』ダンテ／著 生田長江／訳 昭和4（1929）年 第2巻『デカメロン』ボッカチオ／著 森田草平／訳 昭和5（1930）年 別冊第3巻『沙翁傑作集』シエークスピヤ／著 横山有策／訳 昭和4（1929）年 『ハムレット、ジュリアス・シーザー、ヴェニス商人、マクベス、ヴェローナの二紳士、ローミオとジュリエット』第4巻『ドン・キホーテ』セル〔ヴァ〕ンテス／著 片上伸／訳 昭和2（1927）年 第5巻『失樂園』ミルトン／著 繁野天来／訳 昭和4（1929）年 第6巻『仏蘭西古典劇集』昭和3（1928）年 『人間ざらひ、女学者の群、気で病む男』モリエール／著 内藤濯／訳 『ル・シッド、オラース』コルネイユ／著 山内義雄／訳 『フェエドル、ミトリダアト、アンドロマク』ラスィーヌ／著 吉江喬松／訳 『ブリタニキユス』ラスィーヌ／著 内藤濯／訳 第7巻『アイ〔ヴァ〕ンホー』昭和4（1929）年 『アイ〔ヴァ〕ンホー』スコット／著 日高只一／訳 『復讐者』ダ・クキンズイ／著 日高只一／訳 第8巻『懺悔録』ルソオ／著 生田長江、大杉栄共／訳 昭和4（1929）年 第9巻『ファウスト其他』ゲエテ／著 秦豊吉／訳 昭和2（1927）年 『ファウスト、若きエルテルの悲み、ヘルマンとドロテア、ステッラ、エグモント』第10巻『独逸古典劇集』昭和5（1930）年 『群盗、ウイルヘルム・テル』シルレル／著 秦豊吉／訳 『ペンテズィレーア』クライスト／著 舟木重信／訳 『ユーディット』ヘッペル／著 中島清／訳 『金羊毛皮』グリルパルツェル／著 舟木重信／訳 第11巻『ポオ傑作集：緋文字其他』エドガア・アラン・ポオ／著 谷崎精二／訳 『ホーソン短篇集』ナサニエル・ホーソーン／著 福原麟太郎／訳 昭和4（1929）年 第12巻『レ・ミゼラブル』第1巻ヴィクトル・ユゴー／著 豊島与志雄／訳 昭和2（1927）年 第13巻『レ・ミゼラブル』第2巻ヴィクトル・ユゴー／著 豊島与志雄／訳 昭和2（1927）年 第14巻『レ・ミゼラブル』第3巻ヴィクトル・ユゴー／著 豊島与志雄／訳 昭和3（1928）年 第15巻『モンテ・クリスト伯』第1巻アレクサンドル・デュマ／著 山内義雄／訳 昭和2（1927）年 第16巻『モンテ・クリスト伯』第2巻アレクサンドル・デュマ／著 大宅壮一／訳 昭和3（1928）年 第17巻『ウージェニイ・グランデ』バルザック／著 椎名其二／訳 『従妹ベット』バルザック／著 水野亮／訳 昭和5（1930）年 第18巻『二都物語』ディッケンズ／著 柳田泉／訳 昭和3（1928）年 『二都物語、世の中』第19巻『ナナ』エミール・ゾラ／著 宇高伸一／訳 『夢』エミール・ゾラ／著 夢木村幹／訳 昭和4（1929）年 第20巻『ボ〔ヴァ〕リイ夫人』『女の一生』フロベール／著 中村星湖／訳 昭和2（1927）年 『脂肪の魂』モオパッサン／著 広津和郎／訳 第21巻『父と子、処女地、初恋ひ』イヴン・ツルゲーネフ／著 米川正夫／訳 昭和2（1927）年 第22巻『罪と罰』ドストエーフスキイ／著 中村白葉／訳 昭和3（1928）年 第23巻『復活、主人と下男、高架索の捕虜』レフ・トルストイ／著 昇曙夢／訳 昭和2（1927）年 第24巻『露西亞三人集』昭和3（1928）年 『チエホフ選集』チエホフ／著 秋庭俊彦／訳 『どん底、チエルカッシュ』ゴーリキイ／著 原久一郎／訳 『タラス・ブーリバ、鼻』ゴーゴリ／著 原久一郎／訳 第25巻『クオオ〔ヴァ〕デイス、短篇集』シェンキーヴィッチ／著 木村毅昭和3（1928）年 第26巻『イブセン集』イブセン／著 楠山正雄／訳 昭和2（1927）年 『人

形の家、幽霊、民衆の敵、ロスマルスホルム、ヘッダ・ガーブレル、小さいイヨルフ』第27巻『北欧三人集』昭和3(1928)年『飢ゑ』クヌウト・ハムスン/著 宮原晃一郎/訳『アルネ、シンネヴェヴェ・ソルバック、手套』ビョルンソン/著 生田春月/訳『地主の家の物語、沼の家の娘』ラゲルレフ/著 生田春月/訳 第28巻『痴人の告白、死の舞踏其他』ストリンドベリ/著 三井光弥/訳 昭和3(1928)年『痴人の告白、死の舞踏、罪また罪、結婚物語』第29巻『テス、青春其他』昭和4(1929)年『ダアバヴァヴィル家のテス』トーマス・ハーデイ/著 宮島新三郎/訳『青春、明日、エミイ・フォスタア』ジョセフ・コンラッド/著 宮島新三郎/訳 第30巻『椿姫、サフォ、死の勝利』昭和3(1928)年『椿姫』デユマフィス/著 高橋邦太郎/訳『サフォ』ドオデエ/著 武林無想庵/訳『死の勝利』ダンヌンツィオ/著 生田長江/訳 第31巻『寂しき人々他8篇』昭和2(1927)年『寂しき人々、織匠』ハウプトマン/著 成瀬無極/訳『馭者ヘンシエル』ハウプトマン/著 秦豊吉/訳『恋愛三昧、アナトール、緑の鸚鵡』シュニツレル/著 秦豊吉/訳『モンナ・[ヴァ]ンナ、闖入者』マアテルリンク/著 山内義雄/訳『ペレアスとメリザンド』マアテルリンク/著 小林竜雄/訳 第32巻『現代仏蘭西小説集』昭和4(1929)年『タイス』アナトール・フランス/著 岡野馨/訳『クランクビーユ』アナトール・フランス/著 山内義雄/訳『ビュビュ・ドウ・モンバルナッス』シャルル・ルイ・フィリップ/著 井上勇/訳『地獄』アンリ・バルビュス/著 小牧近江/訳『狭き門』アンドレ・ジイド/著 山内義雄/訳 第33巻『英吉利及愛蘭戯曲集』昭和3(1928)年『人と超人』バアナアド・ショウ/著 北村喜八/訳『聖ジョウン、悪魔の弟子』バアナアド・ショウ/著 市川又彦/訳『法律の轍』ゴールズワアジイ/著 菊池寛/訳『勝利者と敗北者』ゴールズワアジイ/著 山田松太郎/訳『小さな男、太陽、敗北』ゴールズワアジイ/著 大宅壮一/訳『プレイボーイ、海に行く騎者』シング/著 松村みね子/訳 第34巻『仏蘭西近代戯曲集』昭和3(1928)年『シラノ・ド・ベルジュラック』エドモン・ロスタン/著 辰野隆、鈴木信太郎/共訳『聖女の裏面』ド・キュレル/著 小川泰一/訳『群狼』ロマン・ロオラン/著 小川泰一/訳『ロペエルとマリアンヌ』ポオル・ジュラルディ/著 市原豊太/訳『群鴉』アンリイ・ベック/著 伊吹武彦/訳『ロレンザッチョ』ド・ミュッセ/著 渡辺一夫/訳 第35巻『近代戯曲集』昭和4(1929)年『故郷』ズーデルマン/著 舟木重信/訳『思はれぐされ』ベナベンテ/著 永田寛定/訳『猶太街』ハイエルマンズ/著 朝倉純孝、朝倉すむ共/訳『春の目ざめ』ヴェデキント/著 野上豊一郎/訳『サロメ』ワイルド/著 楠山正雄/訳 救民院病室グレゴリイ夫人/著 近藤孝太郎/訳『山の神々』ダンセニー/著 松村みね子/訳『横つ面をはられる彼』アンドレエフ/著 北村喜八、熊沢復六/共訳『熊』チェホフ/著 米川正夫/訳『検察官』ゴーゴリ/著 米川正夫/訳 第36巻『近代短篇小説集』昭和4(1929)年 第37巻『近代詩人集』昭和5(1930)年 第38巻『新興文学集』昭和4(1929)年『トラスト・D. F. —ヨーロッパ滅亡物語』イリヤ・エレンブルグ/著 昇曙夢/訳『前にたつものゝ影』グレーブ・アレクセーフ/著 米川正夫/訳『朝から夜中まで—戯曲』ゲオルク・カイゼル/著 北村喜八/訳『作者を探す六人の登場人物—戯曲』ルイヂ・ピランデルロ/著 本田満津二/訳『虫の生活—戯曲』チャベック兄弟/著 新居格/訳『アルバトーフの青年時代』ミハイエル・プリシピン/著 蔵原惟人/訳

○『世界文学全集』(全38巻)新潮社 第2期(全19巻)昭和7(1932)年

池田文庫未所蔵分を参考に掲載する。

第1巻『根こぎにされた人々・ベレニスの園』パレス/著 吉江喬菜/訳 第2巻『弟子：他1篇』ブールジェ/著 山内義雄/訳 第3巻『燃え上がる青春』レニエ/著 堀口大学/訳『深夜の告白・リオネエ倶楽部』デュアメル/著 中村星湖/訳 第4巻『赤と黒』スタンダール/著 佐々木孝丸/訳 第5巻『ジェエイン・エア』ブロンテイ/著 十一谷義三郎/訳 第6巻『ロード・ジム』コンラッド/著 谷崎精二/訳『クロム・イエロー』ハックスレイ/著 森田草平/訳 第7巻『ノート・バンゲイ』エイチ・ジイ・ウエルズ/著 宮嶋新三郎/訳 第9巻『ジェニー・ゲルハート』ドライサー/著 高垣松雄/訳『白い牙』ジャック・ロンドン/著 北村喜八/訳 第10巻『猫橋・憂愁夫人』ズウデルマン/著 生田春月、池谷信三郎/訳 第11巻『ブデンプロオク一家、第1』トオマス・マン/著 成瀬無極/訳 第12巻『トンネル：他2篇』ケッラアマン/著 泰豊彦/訳 第13巻『最後の一线』アルツイパーシェフ/著 米川正夫/訳 第14巻『決闘・マーヤ』クープリン/著 昇曙夢/訳 第15巻『穴熊』レオーノフ/著 中村白葉/訳 第16巻『死せるパスカル』ピランデルロ/著 岩崎純孝/訳『悪の道』デレダ/著 有島生馬、岩崎純孝/訳 第17巻『地中海』プラスコ・イバーニエス/著 長田寛定/訳 第18巻『嘘の力・人生・世界の顔』ボーエル/著 宮原晃一郎/訳 第19巻『ブデンプロオク一家、第2』トオマス・マン/著 成瀬無極/訳『嘆きの天使』ハインリヒ・マン/著 和田顕太郎/訳

○『明治大正文学全集』(全60巻)春陽堂 昭和2(1927)年—昭和7(1932)年

池田文庫未所蔵分を参考に掲載する。

第1巻 東海散士篇 佳人之奇遇、矢野竜溪篇 齊武名士経国美談 2篇 第2巻 末広鉄腸篇 雪中梅 丹羽純一郎/訳篇 花柳春話 (ロウド・リトン/著 丹羽純一郎/訳) 成島柳北篇 柳橋新誌 仮名垣魯文篇 西洋道中膝栗毛 饗庭篁村篇 人の噂、権妻の果、走馬燈、随筆、幸堂得知篇 酒乱 第3巻 坪内逍遙篇 切一葉、沓手鳥孤城落月、牧の方 第一作、名残の星月夜、新曲浦島、お夏狂乱、寒山拾得、お七吉三、ハムレット(シェークスピア/著 坪内逍遙/訳) 一読三歎当世書生氣質、細君、壱円紙幣の履歴ばなし、梓神子 第4巻 長谷川二葉亭篇 平凡、浮雲、あひびき (ツルゲーネフ/著 二葉亭/訳) うき草 (ツルゲーネフ/著 二葉亭/訳) 山田美妙斎篇 蝴蝶、まことに憂世、横沢城、猿面冠者、小宰相局、矢崎嵯峨の舎篇 初恋、流転、空蟬、つまらぬ人、悔恨、一剣有響落花村 第5巻 尾崎紅葉篇 金色夜叉、伽羅枕、七十二文命の安売、心の闇、多情多恨 第6巻 幸田露伴篇 天うつ浪 4巻、五重塔、風流仏、一口剣、対髑髏、奇男児、一刹那、二日物語、有福詩人、不蔵庵物語、蝸牛庵夜譚 第7巻：森鷗外篇 即興詩人(アンデルセン/著 森鷗外/訳) うたかたの記、舞姫、文づかい、キタ・セクスアリス、青年、あそび、玉篋両浦嶼、日蓮聖人辻説法、生田川、静、雁、蛙 (Frederic Mistral/著 森鷗外/訳) 橋の下 (Frederic Boutet/著 森鷗外/訳) 刺絡 (Karl Hans Strobl/著 森鷗外/訳) 辻馬車 (Franz Molnar/著 森鷗外/訳) 高瀬舟、阿部一族、ぢいさんばあさん、最後の一句、山椒大夫、寒山拾得、魚玄機、大塩平八郎 第8巻 黒

岩涙香篇 巖窟王 (アレキサンドル・デュマ/著 黒岩涙香/訳) 森田思軒篇 十五少年 (ジュールスヴェルヌ/著 森田思軒/訳) 第9巻 広津柳浪篇 雨、河内屋、今戸心中、紫被布、二人やもめ、変目伝、骨ぬすみ、花ちる頃、幼時、目黒小町。広津和郎篇 波の上、本村町の家、師崎行、遊戯場、隠れ家、生きていく、勝者敗者 第10巻 斎藤緑雨篇 かくれんぼ、油地獄、犬蓼、見切物、売花翁。若松志づ子篇 小公子 (パーネット/著 若松志づ子/訳) 後藤宙外篇 独行、のこる光、やぶれし人、魂のありか、手向の笛、会津節 漣山人篇 友禅染 第11巻 高山樗牛篇 滝口入道、月夜の美感に就いて、巢林子の女性、平家雑感、世界の四聖、日蓮上人とは如何なる人ぞ、わがそでの記、人生終に奈何、一葉女子の『たけくらべ』を讀みて、清見寺の鐘声、天才の出現、況後録、釈迦。樋口一葉篇 にごりえ、われから、ゆく雲、やみ夜、大つごもり、経つくゑ、暁月夜、うもれ木、闇桜、たま櫛、五月雨、別れ霜、雪の日、琴の音、花ごもり、軒もる月、うつせみ、この子、十三夜、わかれ道、うらむらさき、たけくらべ、かれ尾花、日記。川上眉山篇 大きかづき、ふところ日記、破倫、賤機、墨染桜、雪折竹、白藤 第12巻 泉鏡花篇 一之巻、二之巻、三之巻、四之巻、五之巻、六之巻、誓之巻、照葉狂言、風流線、注文帳、歌行燈、外科室、女客、葛飾砂子、通夜物語、三枚続、国貞ゑがく、櫛巻、唄立山心中一曲 第13巻 徳富蘆花篇 不如帰、自然と人生、思出の記 第14巻 村上浪六篇 三日月、後の三日月、井筒女之助、奴の小万、鬼奴、安田作兵衛、のこる嵐、たそや行燈。塚原洪柿園篇 島左近、山中源左衛門、最上川 第15巻 村井弦斎篇 桜の御所、小弓御所、両美人、飛乗太郎。江見水蔭篇 夏の館、焼山越、温泉、狂詩人、島守、泥水清水、水鏡、備前岡山、暁に帰る、故郷の寂しさ、蛇窪の踏切、蕎麦凍る夜 第16巻 小杉天外篇 魔風恋風、コブシ 第17巻 小栗風葉篇 青春、恋慕ながし、鬘下地 第18巻 菊池幽芳篇 己が罪、乳姉妹 第19巻 柳川春葉篇 生さぬ仲 佐藤紅緑篇 春を追ふて 第20巻 正岡子規篇 和歌篇 明治26年及至明治35年。随筆小説篇 墨汁一滴 他3篇。小品篇 小園の記 他18篇 歌論歌話篇 歌よみに与ふる書 他2篇 俳論俳話篇 俳諧大要 他6篇 俳句篇 明治18年及至明治35年 第21巻 長塚節篇 土、芋掘り、炭焼のむすめ、佐渡ガ島。高浜虚子篇 風流儼法、斑鳩物語、大内旅宿、三疊と四疊半、興福寺の写真、十五代将軍、杏の落ちる音、道、俳諧師、兄、柿二つ。吉村冬彦篇 藪柑子集 第22巻 国木田独歩篇 愛弟通信、忘れえぬ人々、源をぢ、たき火、詩想、死、鹿狩、河霧、置土産、武蔵野、帰去来、少年の悲哀、昼の悲しみ、春の鳥、山の力、酒中日記、神の子、運命論者、日の出、非凡なる凡人、馬上の友、正直者、女難、一家内の珍聞、岡本の手帳、号外、波の音、恋を恋する人、泣き笑ひ、窮死、都の友へ、B生より、暴風、渚、二老人、竹の木戸、空知川の岸边、二少女、湯ヶ原ゆき、湯ヶ原より、肱の侮辱、独歩吟、欺かざるの記 第23巻 田山花袋篇 蒲団、田舎教師、ある僧の奇蹟、時は過ぎ行く、再び草の野に、をばさんのIMAGE、旅の者、重右衛門の最後 第24巻 島崎藤村篇 若菜集、一葉集、夏草、落梅集、桜の実の熟する時、新生、嵐 第25巻 徳田秋声篇 足迹、爛、あらくれ、彼女と少年、ある売笑婦の話、犠牲者。葛西善蔵篇 哀しき父、贖物、奇病患者、酔狂者の独白、愚作家と喇叭、暗い部屋にて、不良児、おせい、蠢く者、浮浪、推の若葉、湖畔手記、血を吐く、バカスカシ、われと遊ぶ子、従弟、弱者 霜枯れ作家の話、悪魔 第26巻 和歌俳句篇 俳句篇 (正岡子規等)、和歌篇 (川田順等) 第28巻 鈴木三重吉篇 千鳥、山彦、おみつさん、鳥物語、黒髪、小猫、小鳥の巣、金魚、瓦、黒血、櫛、紅皿、桑

の実、霧の雨、八の馬鹿 第29巻 森田草平篇 煤煙、初恋、輪廻 第30巻 岩野泡  
 鳴篇 耽溺、毒菓女、征服被征服。 小川未明篇 薔薇と巫女、物言はぬ顔、紫のダリヤ、  
 魯鈍な猫、うば車、空中の芸当、火を点ず、靴屋の主人、死者の満足 中村星湖篇 少年  
 行、親、村の西郷、畑、通過 第31巻 永井荷風篇 腕くらべ、ふらんす物語、冷笑、  
 日和下駄、すみだ川、紅茶の後、珊瑚集 第32巻 上司小剣篇 ごりがん、美女の死骸、  
 水曜日の女、女犯、英霊、兵隊の宿、月夜、筍婆、石川五右衛門の生立、女帝の悩み、  
 鱧の皮、父の婚礼。 正宗白鳥篇 何処へ、塵埃、五月幟、地獄、徒勞、泥人形、午部  
 屋の奥ひ、死者生者、安土の春、人さまざま、心中未遂 第34巻 武者小路実篤篇 耶蘇、  
 或る日の一休、わしも知らない、二十八歳の耶蘇、その妹、愛欲、ある画室の主、第三  
 の隠者の運命 長与善郎篇 青銅の基督、陸奥直次郎、春田の小説 第35巻 谷崎潤一郎  
 篇 刺青、麒麟、幫間、秘密、悪魔、続悪魔、羹、恋を知る頃、お艶殺し、改作恐怖  
 時代、人魚の嘆き、魔術師、春の海辺、母を恋ふる記、異端者の悲しみ、喜劇腕角力、無  
 明と愛染、友田と松永の話、少年、呪われた戯曲 第36巻 詩篇 外山正一篇 他52篇、  
 昭和新進作家篇 第37巻 有島武郎篇 或る女、カインの末裔、クララの出家、実験室、  
 凱旋。 有島生馬篇 死ぬほど、陳子へ、孤鸞鏡中影、弟へ、葡萄園の中 第38巻 久  
 保田万太郎篇 朝顔、ふゆぞら、三の切、末枯、続末枯、寂しければ、暮れがた、雪、  
 雨空、夜鴉、不幸、短夜。 水上滝太郎篇 大阪、大阪の宿 第39集：倉田百三篇 出  
 家とその弟子、処女の死、後寛、桜児。 吉田絃二郎篇 島の秋、彼岸詣り、青い毒菓、  
 夜船、地に落つるもの、蜥蜴、徳さん、山の湯、落葉の路、貸家礼、馬鈴薯畑、さる  
 すべり、囚人の子、尺八を吹く男、高原、寂しき人々、法妙寺の叔母、叔父夫婦、武蔵  
 野の秋 他30篇 第40巻 志賀直哉篇 暗夜行路、荒絹、剃刀、濁った頭、大津順吉、  
 好人物の夫婦、赤西蠣太、和解、十一月三日午後の事、流行感冒、小僧の神様、山科の  
 記憶 佐藤春夫篇 改作田園の憂鬱、都会の憂鬱、指紋、瀬沼氏の山羊、のんしゃらんの  
 記憶 第41巻 藤森成吉篇 若き日の悩み、犠牲、磔茂左衛門。 加能作次郎篇 祖母、羽  
 織と時計、子供の便り、釜、父の顔 豊島与志雄篇 理想の4、月明、都会の幽気、操  
 守。 松岡譲篇 護法の家、モトリザ、耳疣の歴史 田村俊子篇 木乃伊の口紅 第42巻  
 近松秋江篇 黒髪、葛城太夫、流れ、舞鶴心中、疑惑、別れた妻、子の愛の為に 宇野  
 浩二篇 高天ヶ原 蔵の中、子を貸し屋、心づくし、山恋ひ、千万老人 第43巻 里見弴  
 篇 河岸のかへり、手紙、勝負、晚い初恋、夏絵、善心悪心、俄あれ、失われた原稿、  
 銀二郎の片腕、恐しき結婚、朴の歌留多札、毒蕈、夜桜、ムス武遺聞、不貞、夢みたい  
 な話、多情仏心 第44巻 小山内薫篇 大川端。 久米正雄篇 破船、受験生の手記、敗  
 者、良友悪友、大人の喧嘩、虎、金魚、山鳥 第45巻 芥川竜之介篇 鼻、芋粥、煙  
 草と悪魔、偷盗、戯作三昧、地獄変、るしへる、奉教人の死、あの頃の自分の事、きり  
 しとほる上人伝、蜜柑、舞踏会、秋、南京の基督、杜子春、藪の中、將軍、トロッコ、  
 庭、六の宮の姫君、おぎん、百合、三つの宝、神神の微笑、白、一塊の土、糸女覚え  
 書、少年、湖南の扇、年末の一日、三つのなぜ、春の夜、点鬼簿、彼 第二、玄鶴山  
 房、蜃気楼、河童、手紙、三つの窓、或阿呆の一生、西方の人、続西方の人、或る旧  
 友へ送る手記。 室生犀星篇 幼年時代、地下室と老人、蒼白き巣窟、性に眼覚める頃、或  
 る少女の死まで、一冊のバイブル 第46巻 菊地寛篇 新珠、慈悲心鳥、恩を返す話、忠  
 直卿行状記、藤十郎の恋、恩讐の彼方に、蘭学事始、入れ礼、肉親、我鬼、父帰る、屋  
 上の狂人、義民甚兵衛、恋愛病患者 第47巻 戯曲篇 第1 河竹黙阿弥篇 三人吉三

廊初実、戻稿、盲長屋梅加賀齋 依田学海篇 吉野拾遺名歌誉 福地桜痴篇 侠各春雨傘、大森彦七 榎本虎彦篇 名工柿右衛門 右田寅彦篇 生嶋新五郎、紀国文左大尺舞 第48巻 戯曲篇 第2 岡本綺堂篇 屋上伊太八、室町御所、番町皿屋敷、鳥辺山心中、箕輪の心中、修禅寺物語、小栗栖の長兵衛、権三と助十、佐々木高綱、俳諧師 伊原青々園篇 出雲の阿国 岡鬼太郎篇 御存知東男、深興三玉 兎横櫛 高安月郊篇 桜時雨、飴買土平、関ヶ原序曲 醍醐の春、関ヶ原 松居松翁篇 茶を作る家、淀君と三成 山崎紫紅篇 甕破柴田、歌舞伎物語 島村抱月篇 運命の丘、清盛と仏御前 第49巻 戯曲篇 第3 中村吉蔵篇 戯曲淀屋辰五郎 木下空太郎篇 柏屋伝右衛門、和泉屋染物店、南蛮寺門前 吉井勇篇 狂芸人、俳諧亭句楽の死、髑髏尼 秋田雨雀篇 国境の夜、手投弾、喜劇アスパラガス 池田大伍篇 茨木屋幸齋、男達ばやり、根岸の一夜、滝口時頼、鈴木泉三郎篇 生きてゐる小平次、美しき白痴の死、次郎吉懺悔、谷底、火あぶり、心中の始末 第50巻 戯曲篇 第4 山本有三篇 嬰兒殺し、生命の冠、女親、同志の人々、海彦山彦、大磯がよひ、雪、父親、西郷と大久保 小山内薫篇 亭主、吉利支丹信長、息子、森有礼、第一の世界、公園裏、俊寛、三人と三人、西山物語、緑の朝、岸田国土篇 古い玩具、命を弄ぶ男ふたり、ぶらんこ、紙風船、麵麴屋文六の思案、葉桜、屋上庭園、驟雨、村で一番の藁の木、チロルの秋 第51巻 短篇集 第1 江口渙篇 恋と牢獄 小林多喜二篇 東俱知安行 林房雄篇 林檎、絵のない絵本、新しいそつぷ物語 徳永直篇 豊年飢饉、「赤い恋」以上、片岡鉄兵篇 綾里村快挙録 窪川いね子篇 キャラメル工場から、いろは長屋の耳目、別れ、幹部女工の涙 黒島伝次篇 櫓、汜濫、渦巻 ける鳥の群 山田清三郎篇 小さい田舎者、紙幣束、幽霊読者 橋本英吉篇 労働市場、メキシコ共和国の滅亡、没落者の群、立野信之篇 四日間、アスファルトの仲間、施療産院にて 中野重治篇 砂糖の話、波のあひま 村山知義篇 処女地、理髪、脱走少年の手紙 第52巻 細田民樹篇 黄色い窓 細田源吉篇 大都 下村千秋篇 瀕死の浮浪女群、ドナウ・ホテルの殺人 牧野信一篇 村のストア派、吊籠と月光と、歌へる日まで 第53巻 加藤武雄篇 東京の顔 中村武羅夫篇 瑠璃鳥 第54巻 大仏次郎篇 かげろふ嘶、山の娘、半身、仲間同志 牧逸馬篇 水晶の座、白仙境 第55巻 現代作家篇 [第1] 横光利一篇 日輪、機械 十一谷幾三郎篇 あの道この道、街の犬 滝井孝作篇 ゲテモノ、養子、結婚まで、父来たる 佐々木茂索篇 おぢいさんとおばあさんの話、ある死・次の死、兄との関係、或冬の日に、魚の心、是好日、所謂生き死に、川端康成篇 伊豆の踊子、死体紹介人、十六歳の日記、中河与一篇 肉親の賦 稲垣足穂篇 天体嗜好症、青い箱と紅い骸骨 坪田譲治篇 正太の馬、子供の憂鬱、正太樹をめぐる 竜胆寺雄篇 放浪時代 久能豊彦篇 シヤッポで男をふせた女の話 井伏鱒二篇 朽助の居る谷間、丹下氏邸 堀辰雄篇 眠っている男、音楽のなかで、ルウベンスの偽画 嘉村礒多篇 業苦、秋立つまで 小林秀雄篇 オフェリヤ遺文 第56巻 江戸川乱歩篇 心理試験、二廃人、白昼夢、屋根裏の散歩者、人間椅子、押絵と旅する男、百面相役者、幽霊 大下宇陀児篇 情獄、盲地獄、決闘街、爪、死の倒影、十四人目の乗客、毒、蛞蝓綺譚、リウ・キノウの不思議な夢、生きていた靴下の話、痛ましき庄作、蒲鉾、紅座の庖厨、真夏の殺人 甲賀三郎篇 琥珀のパイプ、恋を拾った話、鍊金術、亡霊の指紋、悪戯、或る夜の出来事、空家の怪 小酒井不木篇 恋愛曲線、肉腫、印象、暴風雨の夜、謎の咬傷、愚人の毒、呪はれの家、秘密の相似 第57巻 佐々木邦篇 ぐうたら道中記、辰野九紫篇 恋の警笛、女優極楽 中村正常篇 日曜日のホテルの電話、阿五家の家風、幸福な結婚、我が家の幸福、チエコ・チャコ株式会社、従順な夫をも

つ妻と隣家の奥さん、理窟っぽい妻が風邪をひいた晩、アパートの花嫁の料理、三人のウルトラ・マダム、ユマ吉とペソコと二人の愛、G酒場の女給たちの向上心、超現実派の花嫁、結婚の害について 正木不如丘篇 木賊の秋、法医学教室、銀河、時に棹さす 第58巻 長谷川伸篇 杵掛時次郎、股旅草鞋、中山七里、関の弥太っぺ、町の入墨者、臉の母、舶来巾／著切、掏摸の家、九郎の関、人斬り伊太郎 白井喬二篇 新撰組 第59巻 佐々木味津三篇 右門捕物帳 直木三十五篇 仇討浄瑠璃坂 第60巻 現代作家篇 第2 葉山嘉樹篇 淫売婦、セメント樽の中の手紙、出しやうのない手紙、労働者の居ない船、乳色の霧、浚漕船 前田河広一郎篇 三等船客、太陽の黒点、旗が振られる、金子洋文篇 天井裏の善公 平林たい子篇 施療室にて、夜風、西向の監房、足音、投げすてよ、私の友人 小島政二郎篇 一枚看板、月二回、生理的腫物、子にかへる頃、家 浅原六朗篇 深見のヘレニズム、青きドナウ、軽蔑されたドン・ファン、木馬館、ビルの生活者と表情 犬養健篇 亜刺比亜人エルファイ、南国 改作 池谷信三郎篇 橋、マクダレナ、忠僕、後妻の気持 岡田三郎篇 妻の死と百合公、母

○『世界大衆文学全集』（全80巻）改造社 昭和2（1927）年—昭和6（1931）年

池田文庫には69、70巻『巖窟王』上、下を除く、78巻を所蔵している。

第1巻『鉄仮面』大デュマ／著 大仏二郎／訳 昭和4（1929）年 第2巻『家なき児』マロー／著 菊池幽芳／訳 昭和3（1928）年 第3巻『前線十万』ヤン・ヘー／著 桜井忠温／訳 昭和4（1929）年 第4巻『アルセーヌ・ルパン』ルブラン／著 保篠龍緒／訳 昭和3（1928）年 第5巻『椿姫』小デュマ／著 『マノン・レスコオ』プレボオ／著 久米正雄／訳 昭和3（1928）年 第6巻『三銃士』大デュマ／著 三上於菟吉／訳 昭和4（1929）年 第7巻『放蕩息子』ケイン／著 菊池寛／訳 第8巻『ダイヤモンド、カートライト事件』フレッチャー／著 森下雨村／訳 昭和3（1928）年 第9巻『オリヴァー・ツイスト』ディッケンズ／著 馬場孤蝶／訳 昭和5（1930）年 第10巻『マーク・トウェーン名作集』トウェーン／著 佐々木邦／訳 昭和5（1930）年 第11巻『秘密第一号 他一篇』ホルラア／著 木村毅／訳 昭和5（1930）年 第12巻『巴里の秘密』シュー／著 武林夢想庵／訳 昭和4（1929）年 第13巻『アンクル・トムス・ケビン』ストー／著 和気律次郎／訳 昭和3（1928）年 第14巻『英米新進作家集』欧米諸家／著 牧逸馬／訳 昭和4（1929）年 第15巻『メトロポリス他1篇』ハルボウ／著 泰豊吉／訳 昭和3（1928）年 第16巻『カチユウシヤ』トルストイ／著 近松秋江／訳 昭和4（1929）年 第17巻『九十三年』ユーゴー／著 早坂二郎／訳 昭和3（1928）年 第18巻『宝島他二篇』ステイヴンソン／著 野尻清彦／訳 昭和3（1928）年 第19巻『スペードのキング、四枚のクラブ』ゾーゼ／著 小酒井不木／訳 昭和4（1929）年 第20巻『ステラ・ダラス』ブローチー／著 『ラ・ボエーム』ミュルゼ／著 森岩雄／訳 昭和3（1928）年 第21巻『シャロック・ホウムズ』ドイル／著 延原謙／訳 昭和3（1928）年 第22巻『ゼンダ城の虜』ホープ／著 寺田鼎／訳 昭和4（1929）年 第23巻『紅紫菘』オルツイ／著 松本泰／訳 昭和4（1929）年 第24巻『宇宙戦争』ウエルズ／著 『海底旅行』ヴェルヌ／著 木村信児／訳 昭和4（1929）年 第25巻『平妖伝』羅貫中／著 佐藤春夫／訳 昭和4（1929）年 第26巻『ルコツク探偵』『河畔の悲劇』ガボリオー／著 田中早苗／訳 昭和4（1929）年 第27巻『スカラムツシュ』サバチニ／著 小田律／訳 昭和3（1928）年 第28巻『洞窟の女王 ソロモン王の宝窟』ハガード／

著 平林初之輔／訳 昭和3 (1928) 年 第29巻 『海の義賊他1篇』ベルネエド／著 高橋邦太郎／訳 昭和4 (1929) 年 第30巻 『ポオ、ホフマン集』ポオ／著 ホフマン／著 江戸川乱歩／訳 昭和4 (1929) 年 第31巻 『三等水兵マルチン』タフレイル／著 福永恭助／訳 昭和4 (1929) 年 第32巻 『幻島ロマンス』ゲール／著 野口米次郎／訳 昭和4 (1929) 年 第33巻 『ロモラ』エリオット／著 賀川豊彦／訳 昭和4 (1929) 年 第34巻 『世界滑稽名作集』欧米諸家／著 東健而／訳 昭和4 (1929) 年 第35巻 『世界怪談名作集』欧米諸家／著 岡本綺堂／訳 昭和4 (1929) 年 第36巻 『世界怪奇探偵事実物語集』欧米諸家／著 松本泰／訳 昭和4 (1929) 年 第37巻 『グランド・バビロン・ホテル』ベネット／著 平田禿木／訳 第38巻 『水滸伝』施耐庵／著 笹川臨風／訳 昭和5 (1930) 年 第39巻 『永遠の都』ケイン／著 戸川秋骨／訳 昭和5 (1930) 年 第40巻 『ロビンソン・クルウソオ』デフォー／著 白石實三／訳 『假面の騎士』ボアコベ／著 白石實三／訳 『十五少年』ヴェルヌ／著 白石實三／訳 昭和5 (1930) 年 第41巻 『テス』ハーデイ／著 廣津和郎／訳 昭和5 (1930) 年 第42巻 『二都物語』デイッケンズ／著 名原廣三郎／訳 昭和5 (1930) 年 第43巻 『血と砂』イバニエス／著 鈴木厚／訳 昭和5 (1930) 年 第44巻 『カルメン』『コロンバ』メリメ／著 宇高伸一／訳 昭和5 (1930) 年 第45巻 『ボムペイ最後の日』リットン／著 小池寛次／訳 昭和5 (1930) 年 第46巻 『小公子』『小公女』バアネット／著 佐佐木茂索／訳 昭和5 (1930) 年 第47巻 『あの山越えて』カートン／著 尾崎士郎／訳 昭和5 (1930) 年 第48巻 『赤観衣物語』ゴロオー／著 『ビムリコの博士』キュー／著 『緑の扉』ランドン／著 大木篤夫／訳 昭和5 (1930) 年 第49巻 『闇を縫ふ男』オルチイ／著 浅野玄府訳／訳 昭和5 (1930) 年 第50巻 『ガリヴァの旅』『海老足男の復活』スウィフト／著 鈴木彦三郎／訳 昭和5 (1930) 年 第51巻 『十字軍の騎士』シエンキエヴィッチ／著 森田草平／訳 『しやくんたら姫』カリダサ／著 森田草平／訳 昭和5 (1930) 年 第52巻 『海の鷹』サバチニ／著 小田律／訳 昭和5 (1930) 年 第53巻 『黒星』マッカレー／著 和氣律次郎／訳 昭和5 (1930) 年 第54巻 『ノートルダムの僂僕男』ユーゴー／著 松本泰／訳 昭和5 (1930) 年 第55巻 『冬来なば』ハツチンソン／著 『置き手紙』スタウト／著 木村毅／訳 昭和5 (1930) 年 第56巻 『クオ・ヴァヂス』センキウイッチ／著 直木三十五／訳 昭和5 (1930) 年 第57巻 『ラ・パタイユ』ファレエル／著 高橋邦太郎／訳 『震天同地』ルブラン／著 高橋邦太郎／訳 昭和5 (1930) 年 第58巻 『千一夜物語、恋愛論』森田草平／訳 昭和6 (1931) 年 第59巻 『モーブラ』サンド／著 大村雄治／訳 昭和6 (1931) 年 第60巻 『ソーンドイク博士』フリーマン／著 水野泰舜／訳 昭和6 (1931) 年 第61巻 『ヂェイン・エア』上巻 プロンテイ／著 遠藤寿子／訳 昭和5 (1930) 年 第62巻 『ヂェイン・エア』下巻 プロンテイ／著 遠藤寿子／訳 昭和5 (1930) 年 第63巻 『ウオタ・ベビ』キングスレ／著 阿部知二／訳 『イワンの馬鹿』トルストイ／著 阿部知二／訳 昭和6 (1931) 年 第64巻 『沙翁物語』ラム／著 菊池重三郎／訳 『ワグネル物語』マックスパデン／著 菊池重三郎／訳 昭和5 (1930) 年 第65巻 『ヴェンデツタ』コレリ／著 千葉亀雄／訳 昭和6 (1931) 年 第66巻 『聊斎志異』蒲松齡／著 田中貢太郎／訳 昭和5 (1930) 年 第67巻 『西遊記』邱処機／著 弓館小鰐／訳 昭和6 (1931) 年 第68巻 『八犬伝物語』馬琴／著 内田魯庵／訳 昭和6 (1931) 年 第69巻 『巖窟王』上巻 デユマ／著 黒岩涙香／訳 昭和6 (1931) 年 第70巻 『巖窟王』下巻 デユマ／著 黒岩涙香／訳 昭和6 (1931) 年 第71巻 『獅子狩の人、他2篇』ドオデエ／著 泰豊吉／訳 昭和6 (1931) 年 第72巻 『新聞記者スミス』ウッドハウス／著 木村毅／訳 『私刑』ドライザ／著 木村毅

／訳 『何故時計がとまったか?』ベネット／著 木村毅／訳 昭和6(1931)年 第73巻 『カーステンの家憲』キニー／著 早坂二郎／訳 昭和6(1931)年 第74巻 『フラウ・ゾルゲ、他4篇』ズーデルマン／著 池谷信三郎／訳 昭和6(1931)年 第75巻 『善良な男』デュ・コック／著 木村信児／訳 『卓に倚る十三人』ヨーカイ／著 木村信児／訳 『淑女か猛虎か』ストックトン／著 木村信児／訳 『ゾベイドの奇蹟』ミル／著 木村信児／訳 昭和6(1931)年 第76巻 『愛国侠盗伝、悪魔博士』ローマー／著 寺田鼎／訳 昭和6(1931)年 第77巻 『正義の人々』ウオーレス／著 水野泰舜／訳 昭和6(1931)年 第78巻 『倫敦塔』エイズワース／著 石田幸太郎／訳 昭和6(1931)年 第79巻 『赤狼城秘譚』『失踪夫人』ロスニイ／著 藤田龍郎／訳 昭和6(1931)年 第80巻 『有効期間十日間、他3篇』トツダイ／著 小野七郎／訳 昭和6(1931)年

○『近代劇全集』(全43巻 別冊1巻) 第一書房 昭和2(1927)年-昭和5(1930)年  
イブセン誕生百年祭記念出版 池田文庫に全巻所蔵

第1巻 北欧篇 『恋の喜劇』イブセン／著 高橋健二／訳 『ブランド』イブセン／著 茅野蕭々／訳 『人形の家』イブセン／著 秦豊吉／訳 『鴨』イブセン／著 森田草平／訳 第2巻 北欧篇 『ペエア・ギユント』イブセン／著 茅野蕭々／訳 『ロスメルスホルム』イブセン／著 三井光弥／訳 『ヘツダガーブレル』イブセン／著 三井光弥／訳 第3巻 北欧篇 『父』ストリンドベリイ／著 小宮豊隆／訳 『ダマスクスへ』ストリンドベリイ／著 茅野蕭々／訳 『稲妻』ストリンドベリイ／著 小宮豊隆／訳 第4巻 北欧篇 『令嬢イユリエ』ストリンドベリイ／著 茅野蕭々／訳 『死の舞踏』ストリンドベリイ／著 山本有三／訳 『破産』ピエルンソン／著 岩田豊吉／訳 『人生の戯れ』ハムスン／著 岩田豊吉／訳 第5巻 独逸篇 『沈鐘』ハウプトマン／著 新関良三／訳 『祝典劇』ハウプトマン／著 新関良三／訳 『映画ファウストのタイトル』ハウプトマン／著 秦豊吉／訳 『平和祭り』ハウプトマン／著 新関良三／訳 第6巻 独逸篇 『ダントンの死』ビュヒネル／著 新関良三／訳 『名誉』ズーデルマン／著 木村謹治／訳 『青春』ハルベ／著 木村謹治／訳 『アルト・ハイデルベルク』マイヤーヘルステル／著 木村謹治／訳 第7巻 独逸篇 『影との競争』シヨルツ／著 成瀬清／訳 『奇蹟』フォルミュレル／著 高橋健二／訳 『グライヒェン伯爵』シュミットボン／著 茅野蕭々／訳 『ピグマアリオン』シュミットボン／著 茅野蕭々／訳 『一等室』トオマ／著 秦豊吉／訳 『トルストイ』エルク／著 秦豊吉／訳 第8巻 独逸篇 『カザノオフア物語』ステルンハイム／著 秦豊吉／訳 『ルシタニア号』デヨブリン／著 秦豊吉／訳 『除夜の悲劇』マイエル／著 秦豊吉／訳 『チャツプリン物語』イワン・ゴル／著 秦豊吉／訳 『蚤』エエデキンド／著 秦豊吉／訳 『春の目覚め』エエデキンド／著 秦豊吉／訳 『せむしの巨人』エエデキンド／著 秦豊吉／訳 第9巻 独逸篇 『人間』ハアゼンクレエフェル／著 小山内薫／訳 『決定』ハアゼンクレエフェル／著 秦豊吉／訳 『サンクタ・ズザンナ』シユトラナム／著 茅野蕭々／訳 『群衆=人間』トツレル／著 秦豊吉／訳 『カレーの市民』カイゼル／著 新関良三／訳 『朝から夜中まで』カイゼル／著 秦豊吉／訳 『チャツプリン』フィツシエル／著 秦豊吉／訳 第10巻 独逸篇 『楽しみ of 邑』ヨースト／著 小宮豊隆、奥津彦重／訳 『夜打つ太鼓』プレヒト／著 成瀬無極／訳 『犯罪人』ブルックネル／著 高橋健二／訳 『中幕』シュトラウス／著 秦豊吉／訳 『戦争』フォオグト／著 秦豊吉／訳 第

11巻 独逸篇 『プロシアの王子ルイ・フェルディナント』 ウンルウ／著 新関良三／訳 『海戦』 ゲョエリンク／著 茅野蕭々／訳 『灰闇記』(白墨の円) クラブント／著 新関良三／訳 『画家ゴツホ』 カザツク／著 秦豊吉／訳 第12巻 独逸篇 『チチアの死』 ホフマンスタアル／著 木下柰太郎／訳 『人』(富豪の死) ホフマンスタアル／著 新関良三／訳 『緑の鸚哥』 シュニッツレル／著 茅野蕭々／訳 『恋愛三昧』 シュニッツレル／著 森鷗外／訳 『最後の仮面』 シュニッツレル／著 三井光弥／訳 『広き国』 シュニッツレル／著 木村謹治／訳 第13巻 独逸篇 『信仰と故郷』(土民の悲劇) シェーンヘル／著 新関良三／訳 『愛』 キルドガンス／著 木下柰太郎／訳 『鏡人』 ウェルフェル／著 高橋健二／訳 『死』 キード／著 秦豊吉／訳 『永遠のユデヤ人』 ハイエルマンズ／著 三井光弥／訳 『客』 ブルチビセフスキー／著 三井光弥／訳 『罪人』 アッシュ／著 三井光弥／訳 第14巻 仏蘭西篇 『かりそめになすな恋』 ミユッセ／著 西条八十／訳 『マリヤヌの気紛れ』 ミユッセ／著 堀口大学／訳 『アンドレ・デル・サルトオ』 ミユッセ／著 内藤濯／訳 『戸を開けさらずば閉ちよ』 ミユッセ／著 内藤濯／訳 『巴里女』 ベック／著 堀口大学／訳 『堅気な女』 ベック／著 内藤濯／訳 第15巻 仏蘭西篇 『ブランシェット』 ブリュウ／著 内藤濯／訳 『新しき偶像』 キュレル／著 吉江喬松／訳 『獅子の餌食』 キュレル／著 堀口大学／訳 『自由の重荷』 ベルナル／著 岸田国土／訳 『懐を傷めずに』 ベルナル／著 岸田国土／訳 第16巻 仏蘭西篇 『過去』 ポルト・リッシュ／著 岸田国土／訳 『恋の女』 ポルト・リッシュ／著 西条八十／訳 第18巻 仏蘭西篇 『落伍者の群』 ルノルマン／著 岸田国土／訳 『時は夢なり』 ルノルマン／著 岸田国土／訳 『商船テナシテイ』 ヴィルドラック／著 山田珠樹／訳 『ミシェル・オオクレエル』 ヴィルドラック／著 内藤濯／訳 『寂しい人』 ヴィルドラック／著 岩田豊雄／訳 『ルリユ爺さんの遺言』 マルタン・デュ・ガアル／著 堀口大学／訳 第19巻 仏蘭西篇 『事業は事業』 ミルボー／著 内藤濯／訳 『別れも愉し』 ルナル／著 岸田国土／訳 『日々の麴包』 ルナル／著 岸田国土／訳 『緒毛』 ルナル／著 山田珠樹／訳 『炬火おくり』 エルヴィユウ／著 岸田国土／訳 第20巻 仏蘭西篇 『東天紅』 ロスタン／著 堀口大学／訳 『結婚行進曲』 バタイユ／著 岩田豊雄／訳 『家』 コポオ／著 内藤濯／訳 第21巻 仏蘭西篇 『幻の魚』 サルマン／著 辰野隆、鈴木信太郎／訳 『ダルダメル』 マゾウ／著 岩田豊雄／訳 『堂々たるコキユ』 クロムランク／著 岩田国土／訳 『マルチヌ』 ベルナル／著 岩田国土／訳 第23巻 仏蘭西篇 『子供の謝肉祭』(トプエリエ／著 岸田国土／訳 『クノック』 ロマン／著 岩田豊雄／訳 『トルアデックの放蕩』 ロマン／著 岩田豊雄／訳 『ワタクシと遊んでくれませんか?』 アシヤアル／著 岩田豊雄／訳 第24巻 仏蘭西篇 『タンタヂイルの死』 メエテルリンク／著 堀口大学／訳 『部屋の中』 メエテルリンク／著 内藤濯／訳 『潜み入る者』 メエテルリンク／著 堀口大学／訳 『ペレアスとメリザンド』 メエテルリンク／著 堀口大学／訳 『僧院』 ヴエルハアレン／著 森鷗外／訳 『娘ぎつける人々』 レルベルグ／著 堀口大学／訳 『階段下の貧者』 ゲオン／著 堀口大学／訳 『エツフェル塔の花嫁花婿』 コクトオ／著 堀口大学／訳 第25巻 愛蘭土篇 『カスリン・ニ・フウリハン』 イエーツ／著 松村みね子／訳 『心のゆくところ』 イエーツ／著 松村みね子／訳 『鷹の井戸』 イエーツ／著 松村みね子／訳 『海に行く騎者』 シング／著 松村みね子／訳 『谷の影』 シング／著 松村みね子／訳 『聖者の泉』 シング／著 松村みね子／訳 『西の人気男』 シング／著 松村みね子／訳 『山の神々』 ダンセニイ／著 松村みね子／訳 『光の門』 ダンセニイ／著 松村みね子／訳 『女王の敵』 ダンセニイ／著 松

村みね子/訳 『もしもあの時』 ダンセニイ/著 松村みね子/訳 第26卷 愛蘭土篇 『秘蔵つ子』 ロビンソン/著 灰野庄平/訳 『長男の権利』 マアレイ/著 小山内薫/訳 『胡弓引の家』 コラム/著 灰野庄平/訳 『鴉』 グレゴリイ/著 灰野庄平/訳 『金の林檎』 グレゴリイ/著 小山内薫/訳 『月の出』 グレゴリイ/著 灰野庄平/訳 第27卷 露西亞篇 『検察官』 ゴーゴリ/著 山内封介/訳 『智慧の悲しみ』 グリボエードフ/著 山内封介/訳 『雷雨』 オストローフスキイ/著 山内封介/訳 『皇帝フョードル・イオアンノヴィチ』 ア・トルストイ/著 山内封介/訳 第28卷 露西亞篇 『街道』 チューホフ/著 高倉輝/訳 『熊』 チューホフ/著 高倉輝/訳 『結婚申込』 チューホフ/著 高倉輝/訳 『三人姉妹』 チューホフ/著 高倉輝/訳 『ワーニャ伯父』 チューホフ/著 高倉輝/訳 『桜の園』 チューホフ/著 高倉輝/訳 第29卷 露西亞篇 『人の一生』 アンドレーエフ/著 昇曙夢/訳 『我等が生活の日』 アンドレーエフ/著 昇曙夢/訳 『殴られる彼奴』 アンドレーエフ/著 昇曙夢/訳 『死の勝利』 ソログープ/著 昇曙夢/訳 『森の秘密』 チリコフ/著 昇曙夢/訳 第30卷 露西亞篇 『戦争』 アルツィバーシェフ/著 山内封介/訳 『壁』 ナイデョーノフ/著 山内封介/訳 『アゼフ』 ア・トルストイ/著 山内封介/訳 『聖者ドミニックの火』 ザミーチャ/著 山内封介/訳 第31卷 露西亞篇 『最も重要な事』 エヴレイノフ/著 山内封介/訳 『見世物小舎』 ブローク/著 山内封介/訳 『見知らぬ女』 ブローク/著 山内封介/訳 『壁』 ネヴエーロフ/著 山内封介/訳 『ステパン・ラーヂン』 カーメンスキー/著 山内封介/訳 第32卷 露西亞篇 『熊の結婚』 ルナチャルスキイ/著 昇曙夢/訳 『ミステリヤ・プッフ』 マヤコーフスキイ/著 昇曙夢/訳 『コーリカ・スツープン』 アウスレンデル、ソロドフニコフ/共著 昇曙夢/訳 『玩具騒動』 バルドーフスキイ/著 昇曙夢/訳 『検察官』 エフレイノフ/著 昇曙夢/訳 第33卷 露西亞篇 『闇の力』 レフ・トルストイ/著 昇曙夢/訳 『生ける屍』 レフ・トルストイ/著 昇曙夢/訳 『どん底』 ゴーリキイ/著 昇曙夢/訳 第34卷 露西亞篇 『リュボオウィ・ヤロワーヤ』 トウレニョコフ/著 昇曙夢/訳 『十月革命』 グローモフ/著 昇曙夢/訳 『宣告』 レヴィチーナ夫人/著 昇曙夢/訳 『劇場内の裁判』 ゲフトマン/著 昇曙夢/訳 『反響』 ベロツェルコーフスキイ/著 昇曙夢/訳 第35卷 南欧篇 『死市』 ダヌンチオ/著 堀口大学/訳 『蠹魚』 ベネエリ/著 三浦逸雄/訳 『御意にまかす』 ピランデルロ/著 岩田豊雄/訳 『作者を探がす六人の登場人物』 ピランデルロ/著 岩田豊雄/訳 第36卷 南欧篇 『伯爵夫人の驚き』 ベナベンテ/著 永田寛定/訳 『日盛り』 セーカ/著 永田寛定/訳 『かはいさうなファン』 シエルラ/著 永田寛定/訳 『太鼓と小鈴』 キンテイロ兄弟/著 永田寛定/訳 『ピグマリオンの親方』 グラウ/著 笠井鎮夫/訳 『小さき泉』 ブラツコオ/著 三浦逸雄/訳 第37卷 米國篇 『楡の木蔭の慾望』 オニイル/著 鈴木善太郎/訳 『銀ながし』 ケリイ/著 鈴木善太郎/訳 『計算器』 ライス/著 鈴木善太郎/訳 『陪音』 ガアステンバァグ/著 鈴木善太郎/訳 第38卷 中欧篇 『リリオム』 モルナル/著 鈴木善太郎/訳 『汽車の中』 モルナル/著 鈴木善太郎/訳 『近衛兵』 モルナル/著 鈴木善太郎/訳 『虫の生活』 チャペツク/著 鈴木善太郎/訳 『マクロポウロス家の秘法』 チャペツク/著 鈴木善太郎/訳 『花婿』 ビロー/著 鈴木善太郎/訳 第39卷 英吉利篇 『聖ジョン』 ショー/著 野上豊一郎/訳 『アンドロクルスと獅子』 ショー/著 松村みね子/訳 『運命の人』 ショー/著 松村みね子/訳 『ウオーレン夫人の職業』 ショー/著 坪内逍遥/訳 第40卷 英吉利篇 『二度目のタンカレ夫人』 ピネロウ/著 沢村寅二郎/訳 『銀の筐』 ゴールズワー

ジ／著 沢村寅二郎／訳 『正しき裁き』 ゴールズワージ／著 沢村寅二郎／訳 『いがみあひ』 ゴールズワージ／著 沢村寅二郎／訳 第41巻 英吉利篇 『サロメ』 ワイルド／著 日夏耿之介／訳 『ウキンダミーヤ夫人の扇』 ワイルド／著 谷崎潤一郎／訳 『自由なファンシイ』 ハウトン／著 小山内薫／訳 『一里塚』 ベネット／著 灰野庄平／訳 『船』 アービン／著 灰野庄平／訳 第42巻 英吉利篇 『ピイタアパン』 パリイ／著 沢村寅二郎／訳 『ユーリシーズ』 フィリップス／著 灰野庄平／訳 『罰』 ロージアース／著 灰野庄平／訳 『旅の果て』 シェリフ／著 清野暢一郎／訳 第43巻 英吉利篇 ピムさん通れば(ミルン／著 山本修二／訳) メアリ・ステュアアト(ドリンクヲオタア／著 山本修二／訳) 風聞(マンロオ／著 山本修二／訳) 家庭漫話(カワアド／著 山本修二／訳) 別冊舞台写真帖

○『世界大思想全集』第1期 春秋社 第1巻—第124巻 昭和2(1927)年—昭和12(1937)年 080/Se22/1-1~080/Se22/1-124 但し第112巻は未収録(池田文庫所蔵分)  
〔第82巻、第93巻—99巻は松柏館書店発行〕

第1巻 『国家』プラトーン／著 村松正俊／訳 『感情論』デカルト／著 三宅茂／訳 昭和3(1928)年 第2巻 『メタフュジカ』アリストテレス／著 『モナッド論』ライブニッツ／著 松永材／訳 昭和4(1929)年 第3巻 『語録』エピクテータス／著 佐久間政一／訳 『瞑想録』アウレリウス／著 村山勇三／訳 『幸福論』セネカ／著 加藤朝鳥／訳 昭和2(1927)年 第4巻 『随感録』パスカル／著 柳田泉／訳 『懺悔録』オーガスチン／著 宮原晃一郎／訳 昭和3(1928)年 第5巻 『法の精神』モンテスキウ／著 木村幹／訳 『君主論』マキアヴェリー／著 橋田東声／訳 昭和3(1928)年 第6巻 『プリンシピア』ニュートン／著 岡邦雄／訳 昭和5(1930)年 第7巻 『ノーワム・オルガヌム』ベーコン／著 岡島亀次郎／訳 『方法序説』デカルト／著 松村正俊／訳 『民約論』ルソオ／著 加藤一夫／訳 昭和2(1927)年 第8巻 『ツアラトウストラは斯く語る』ニーチェ／著 加藤一夫／訳 昭和4(1929)年 第9巻 『絵画論』レオナルド・ダ・キンチ／著 加藤朝鳥／訳 『詩と真実』ゲーテ／著 秋田忠義／訳 『素朴の文学と感傷の文学』シラア／著 佐久間政一／訳 昭和5(1930)年 第10巻 『エミール』ジャン・ジャック・ルソオ／著 平林初之輔／訳 昭和2(1927)年 第11巻 『国富論』(上) アダム・スミス／著 青野季吉／訳 昭和3(1928)年 第12巻 『国富論』(下) アダム・スミス／著 青野季吉／訳 昭和4(1929)年 第13巻 『悟性論』ロック／著 八太舟三／訳 『人性論』ヒューム／著 香原一勢／訳 昭和5(1930)年 第14巻 『ラオコオン』ゴットホールド・イ・レッシング／著 柳田泉／訳 『レオパルヂ集』ジャコモ・レオパルヂ／著 柳田泉／訳 昭和2(1927)年 第15巻 『純粹理性批判』イムマヌエル・カント／著 安藤春雄／訳 昭和6(1931)年 第16巻 『社団の社会主義要綱』シャルル・フリーエ／著 安谷寛一／訳 『労働階級の政治的能力』ブルドン／著 石川三四郎／訳 昭和5(1930)年 第17巻 『政治的正義』ゴッドウイン／著 加藤一夫／訳 昭和5(1930)年 第18巻 『人口論』トマス・ロバート・マルサス／著 神永文三／訳 昭和2(1927)年 第19巻 『サータア・リザータス』『英雄及英雄崇拜』トマス・カーライル／著 柳田泉／訳 昭和5(1930)年 第20巻 『知識学』フィヒテ／著 河面仙四郎／訳 『宗教学』シュライエル・マッヘル／著 河面仙四郎／訳 昭和4(1929)年 第21巻 『代表偉人論』『自然論』『論文鈔』エマアソン／著 柳田泉／訳

昭和6(1931)年 第22卷 『精神分析』フロイト/著 中村古峽/訳 『論文集』ショーペンハウエル/著 佐久間政一/訳 昭和4(1929)年 第23卷 『人生論』トルストイ/著 柳田泉/訳 『我等何を為すべきか』トルストイ/著 加藤一夫/訳 『芸術論』トルストイ/著 古館清太郎/訳 昭和3(1928)年 第24卷 『功利論』ベンサム/著 田制左重/訳 『自由論』『功利主義』『婦人の隷属』スチュアート・ミル/著 高橋久則/訳 昭和3(1928)年 第25卷 『実証哲学』(上) オーギュスト・コント/著 石川三四郎/訳 昭和6(1931)年 第26卷 『実証哲学』(下) オーギュスト・コント/著 石川三四郎/訳 昭和3(1928)年 第27卷 『種の起源』チャールズ・ロバート・ダーキン/著 内山賢次/訳 昭和2(1927)年 第28卷 『第一原理』ハアバート・スペンサー/著 沢田謙/訳 昭和2(1927)年 第29卷 『唯一者とその所有』『芸術と宗教』スティルネル/著 辻潤/訳 『無政府主義と社会主義』ブレカアノフ/著 辻潤/訳 昭和3(1928)年 第30卷 『経済学批判』『賃金労働及資本』『価値、価格及び利潤』カール・マルクス/著 安倍浩/訳 『空想的科学的社会主义』フリードリッヒ・エンゲルス/著 安倍浩/訳 『帝国主義論』ニコライ・レーニン/著 青野季吉/訳 昭和3(1928)年 第31卷 『ルネッサンス』ペーター/著 佐久間政一/訳 『論文集』アーノルド/著 中村祥一/訳 『アンツォー・ヂス・ラスト』ラスキン/著 宮嶋新三郎/訳 昭和4(1929)年 第32卷 『ウォルデン』ヘンリー・デイヴィッド・ソロー/著 古館清太郎/訳 『ホイットマン論文集』ウォルトホイットマン/著 古館清太郎/訳 『文明論』エドワード・カーペンタア/著 宮嶋新三郎/訳 昭和5(1930)年 第33卷 『婦人論』アウグスト・ベーベル/著 加藤一夫/訳 昭和2(1927)年 第34卷 『田園、工場、及仕事場・相互扶助』クロボトキン/著 室伏高信/訳 『近代科学と無政府主義』クロボトキン/著 八太舟三/訳 昭和3(1928)年 第35卷 『無政府主義思想史』マックス・ネットラウ/著 新居格/訳 『マルクス説の崩壊』ソレル/著 百瀬二郎/訳 昭和5(1930)年 第36卷 『憂愁の哲理』キエルケゴール/著 宮原晃一郎/訳 『意識に直接与へられたもの』ベルグソン/著 広瀬哲士/訳 『社会に就いての新見解』オーエン/著 加藤一郎/訳 昭和5(1930)年 第37卷 『社会学原理』ギッディングス/著 内山賢次/訳 『純正社会学要論』ウォード/著 内山賢次/訳 昭和4(1929)年 第38卷 『メンデルの遺伝原理』ウィリアム・ベートソン/著 小酒井不木/訳 昭和3(1928)年 第39卷 『創造的統一』タゴール/著 古館清太郎/訳 『ガンデー文集』ガンディ/著 高田雄種/訳 『建設的文学革命論、其他』胡適/著 柳田泉/訳 昭和4(1929)年 第40卷 『心理の意味』ウィリアム・ジェームズ/著 岡島亀次郎/訳 『論理学』G. W. F. ヘーゲル/著 岩崎勉/訳 『神と国家』ミハエル・バクニン/著 麻生義/訳 昭和6(1931)年 第41卷 『科学概論』カール・ピヤスン/著 平林初之輔/訳 昭和5(1930)年 第42卷 『マルクス主義の国家観』『カントとマルクス主義』マックス・アドラー/著 伊原紘/訳 昭和6(1931)年 第43卷 『エティカ』バルーフ・スピノザ/著 中山昌樹/訳 『精神現象の分類に就て』フランル・ブレンタノ/著 佐藤藤二/訳 『カント純粹理性批判解説』ヘルマン・コヘン/著 今田竹千代/訳 昭和4(1929)年 第44卷 『力学対話』ガリレオ・ガリレイ/著 岡邦雄/訳 『新キリスト教論』サアン・シモン/著 安谷寛一/訳 『生命力の発展』C. G. ユング/著 中村古峽/訳 昭和6(1931)年 第45卷 『社会理論』G. D. H. コール/著 村上啓夫/訳 『社会改造の原理』バートランド・ラッセル/著 村上啓夫/訳 『社会学的国家概念と法律学的国家概念』ハンス・ケルゼン/著 堀真琴/訳 昭和4(1929)年 第46卷 『美学』ベネデット・クロウチェ/著 長谷川誠也、大槻憲二/共訳 昭和5(1930)年 第47卷

『マルキシズムの改造』エドゥアルト・ベルンシュタイン／著 松下芳夫／訳 『マルキシズム修正の駁論』カール・カウツキー／著 山川均／訳 昭和3 (1928) 年 第48巻 『相対性理論』アルベルト・アインシュタイン／著 石原純／訳 『エネルギー恒存の法則』『物理学的展望』マックス・プランク／著 石原純／訳 昭和5 (1930) 年 第49巻 『ゲルトロード』ペスタロッチ／著 田制左重／訳 『人間の教育』フレーベル／著 田制左重／訳 『哲学と教育学』ナトルプ／著 田制左重／訳 『民主主義と教育』デューイ／著 田制左重／訳 昭和2 (1927) 年 第50巻 『太陽の都』カンパネラ／著 加藤朝鳥／訳 『ユートピア』モアア／著 村山勇三／訳 『無何有郷通信記』モリス／著 村山勇三／訳 『ニュー・アトランティス』ペーコン／著 大戸徹誠／訳 昭和4 (1929) 年 第51巻 仏典篇 『浄土三部経・維摩経・勝鬘経』友松円諦／編 『法華経・大日経』田島德音／編 『臨濟録・碧巖集』東海祐山／編 『円覚経』林岱雲／編 昭和5 (1930) 年 第52巻 東西宗教文献篇 野々村戒三／訳 前編：『三経義疏』聖徳太子／著、『法華諸品大意、山家学生式、上願戒論表、抄録願戒論』最澄／著、『弁願密二教論』空海／著、『抄録往生要集』源信／著、『選択本願念仏集、上願一枚起請文』源空／著、『興禪護国論』栄西／著、『抄録正法眼蔵』道元／著、『浄土分類聚鈔』親鸞／著、『末燈鈔』從覚／著、『歎異鈔』親鸞／著、『立正安国論、種種御振舞御書』日蓮／著、『一遍上人語録』門人伝説『宗門無盡燈論』東獄／著 後編：『イエスの山上説教』、『パウロ書翰抄』、『抄録新訳外典』、『フィロン文粹』フィロン／著、『神智経駁議』イレネウス／著、『抄録神の国』アウグスティヌス／著、『抄録神学集成』トマス・アクイナス／著、『抄録テオロギア・ゲルマニカ』、『抄録聖範録』トマス・ア・ケムピス／著、『ルツェルの議論九拾五箇条』『基督教の自由』ルツェル／著、『基督教原理の序』カウンワ<sup>ン</sup>／著、『基督者の完璧』エスレイ／著 対照年表 昭和4 (1929) 年 第53巻 支那思想篇 山口剛／篇 『大学、中庸、論語、孟子、荀子(抄)、老子、荘子、墨子(抄)、韓非子(抄)、近思録、伝習録(抄)』 昭和6 (1931) 年 第54巻 日本思想篇 井篁節三／編 総論：日本思想論、日本思想史 前編：『国意考』賀茂真淵／著、『直毘靈、葛花、玉勝間』本居宣長／著 中篇：『入学問答、古道大意、伊吹於呂志、悟道弁』平田篤胤／著 後編：『神皇正當記』北畠親房／著、『配所残筆』山鹿素行／著 『集義和背』熊沢蕃山／著、『折りたく柴の記』新井白石／著、『天柱記、復古法概言、垂統秘録、混同秘策』佐藤信淵／著、『檄文』大塩中斎／著 昭和2 (1927) 年 第55巻 『社会学より見たる芸術』ギョヨオ／著 西宮藤朝／訳 昭和6 (1931) 年 第56巻 『歴史哲学』ハインリッヒ・リッケルト／著 山本泰教／訳 『純粹論理学へのプロレゴメナ』エトムント・フッセル／著 鬼頭英一／訳 昭和6 (1931) 年 第57巻 『イマヌエル・カント』パウルゼン／著 伊達保美、丸山岩吉／共訳 『意思の自由』キ<sup>ン</sup>デルバント／著 戸坂潤／訳 昭和7 (1932) 年 第58巻 『充足根拠の原理』『倫理の二つの根本問題』アルトゥル・ショペンハウエル／著 河合哲雄／訳 昭和7 (1932) 年 第59巻 『歴史哲学』ヘーゲル／著 鬼頭英一／訳 昭和7 (1932) 年 第60巻 『経済と社会』『社会科学方法論』オットマール・シュパン／著 向井[エイ]一／訳 『現代の国家と社会』フィアカント／著 谷藤重吉／訳 昭和6 (1931) 年 第61巻 『ヴェニス of 石』(上) ジョン・ラスキン／著 賀川豊彦／訳 昭和6 (1931) 年 第62巻 『ヴェニス of 石』(下) ジョン・ラスキン／著 賀川豊彦／訳 昭和7 (1932) 年 第63巻 『経済学及び課税の諸原理』アリストテレス／著 吉田秀夫／訳 昭和7 (1932) 年 第64巻 『政治学範典』ハロルド・J. ラスキー／著 市村今朝蔵／訳 昭和7 (1932) 年 第65巻 『古代文明研究(上) 太陽の子(上)』W. J. パアライ／著 加藤一夫／訳 昭和6 (1931) 年 第66巻 『古代文明研究(下) 太陽の子(下)』W. J. パアライ／著 加藤一夫／訳 昭和

- 7 (1932)年 第67卷 『近世画家論』(1) ジョン・ラスキン／著 御木本隆三／訳 昭和7 (1932)年 第68卷 『近世画家論』(2) ジョン・ラスキン／著 御木本隆三／訳 昭和7 (1932)年 第69卷 『近世画家論』(3) ジョン・ラスキン／著 御木本隆三／訳 昭和8 (1933)年 第70卷 『ジャムパティスタ・ヴィコの哲学』ベネデットオ・クロオチェ／著 青木巖／訳 『西洋中世哲学概観』モオリス・ヴルフ／著 青木巖／訳 『プラトン哲学体系』ジョン・バアネット／著 青木巖／訳 昭和7 (1932)年 第71卷 『哲学辞典』ヴォルテール／著 安谷寛一／訳 昭和7 (1932)年 第72卷 『マコーレイ論文集』マコーレイ／著 戸川秋骨／訳 昭和8 (1933)年 第73卷 『共同社会と利益社会』フェルディナンド・トエンニース／著 鈴木晃／訳 『共同村の歴史』シャル・ジード／著 八太舟三／訳 昭和8 (1933)年 第74卷 『経済学の領域及び方法』J. N. キンズ／著 濱田恒一／訳 昭和8 (1933)年 第75卷 『純正現象学的及現象学的哲学観』エトムント・フッセル／著 鬼頭英一／訳 昭和7 (1932)年 第76卷 『精神諸科学序説』『ディルタイ論文集(上) 社会及び歴史の研究に対する基礎付けの試み』ヴィルヘルム・ディルタイ／著 鬼頭英一／訳 昭和8 (1933)年 第77卷 『純粹哲学概論』B. B. パウン／著 賀川豊彦、八太舟三／共訳 昭和8 (1933)年 第78卷 『宗教論』E. S. エームス／著 新保勝世／訳 昭和8 (1933)年 第79卷 『音楽と音楽家』ロバート・シューマン／著 鈴木賢之進／訳 『ショパンの生涯』ジェームス・ハネカー／著 鈴木賢之進／訳 昭和9 (1934)年 第80卷 『プラトーンとプラトーン主義』ウォーター・ペーター／著 八太舟三／訳 昭和8 (1933)年 第81卷 『近世画家論』(4) ジョン・ラスキン／著 御木本隆三／訳 昭和8 (1933)年 第82卷 『悟性善導』スピノザ／著 鈴木晃／訳 『本質意思と利益社会』『続共同社会と利益社会』フェルディナンド・トエンニース／著 鈴木晃／訳 昭和10 (1935)年 第83卷 『精神諸科学序説(下) 社会及び歴史の研究に関する基礎づけの試み』ヴィルヘルム・ディルタイ／著 鬼頭英一／訳 昭和8 (1933)年 第84卷 『ルソオとロマンティズム』アアヴィンク・バビット／著 葛川篤、土戸久夫／共訳 昭和8 (1933)年 第85卷 『反マルクス論』(上) カール・ムース／著 草間平作／訳 昭和8 (1933)年 第86卷 『共同村の歴史』『経済学の第一原理』シャル・ジード／著 八太舟三／訳 『資本主義の将来』ヴェルナー・ソムバルト／著 鈴木晃／訳 昭和8 (1933)年 第87卷 『現代物質創造史』エドウィン・スロツソン／著 須沢官一郎、蟻山芳郎／共訳 昭和9 (1934)年 第88卷 『反マルクス論』(下) カール・ムース／著 草間平作／訳 昭和9 (1934)年 第89卷 『文学的回想』イワン・ツウルゲーニエフ／著 宮原晃一郎／訳 『黎明期の思想家』ゲオルグ・ブランデス／著 宮原晃一郎／訳 昭和9 (1934)年 第90卷 『性と性格』オットー・ワイニンゲル／著 村上啓夫／訳 昭和9 (1934)年 第91卷 『倫理学の根本問題』テオドル・リップス／著 鬼頭英一／訳 昭和10 (1935)年 第92卷 『性と文学』アルバート・モーデル／著 奥俊貞／訳 昭和9 (1934)年 第93卷 『人生の意義と価値』ルドルフ・オイケン／著 陶山務／訳 『中世思想より見たる美の哲学』アオイシウス・ロザア／著 陶山務／訳 昭和9 (1934)年 第94卷 『社会主義と資本主義』(上) G. B. ショウ／著 加藤朝鳥／訳 昭和9 (1934)年 第95卷 『社会主義と資本主義』(下) G. B. ショウ／著 加藤朝鳥／訳 昭和9 (1934)年 第96卷 『新しき社会』ヴァルタア・ラアテナウ／著 陶山務／訳 『読書論：胡麻と百合』ジョン・ラスキン／著 本間立也／訳 昭和9 (1934)年 第97卷 『過去と現在』トマス・カーライル／著 柳田泉／訳 昭和9 (1934)年 第98卷 『偉大なる創造者ベートオエーン』ロマン・ロラン／著 高田博厚／訳 昭和9 (1934)年 第99卷 『経済学原理』T. R. マルサス／著 吉田秀夫／訳 昭和9 (1934)年

第100巻 『永久的価値』 ミュンスタビルヒ／著 渡利彌生／訳 昭和11 (1936) 年 第101巻 『美意識論』 サンタナヤ／著 鷺尾雨工／訳 『羅馬美学』 ボサンケ／著 鷺尾雨工／訳 昭和11 (1936) 年 第102巻 『美学』 (上) テオドール・リップス／著 佐藤恒久／訳 昭和11 (1936) 年 第103巻 『美学』 (下) テオドール・リップス／著 佐藤恒久／訳 昭和11 (1936) 年 第104巻 『音楽と音楽家』 (中) ロバート・シュウマン／著 鈴木賢之進／訳 昭和10 (1935) 年 第105巻 『音楽と音楽家』 (下) ロバート・シュウマン／著 鈴木賢之進／訳 昭和11 (1936) 年 第106巻 『国法学の主要問題』 (上) ハンス・ケルゼン／著 蠟山芳郎／訳 昭和10 (1935) 年 第107巻 『国法学の主要問題』 (中) ハンス・ケルゼン／著 蠟山芳郎／訳 昭和12 (1937) 年 第108巻 『国法学の主要問題』 (下) ハンス・ケルゼン／著 蠟山芳郎／訳 昭和12 (1937) 年 第109巻 『労働学校』 プロンスキー／著 堀秀彦／訳 昭和10 (1935) 年 第110巻 『経済学原理』 (上) J. S. ミル／著 高橋高三／訳 昭和11 (1936) 年 第111巻 『経済学原理』 (中) J. S. ミル／著 高橋高三／訳 昭和4 (1929) 年 第113巻 『意志と表象としての世界』 (上) ショペンハウエル／著 関南担／訳 昭和11 (1936) 年 第114巻 『意志と表象としての世界』 (中) ショペンハウエル／著 関南担／訳 昭和11 (1936) 年 第115巻 『新国家論』 アントン・メンガー／著 河村又介／訳 昭和10 (1935) 年 第116巻 『社会分業論』 (上) デュルケーム／著 山崎早一／訳 昭和10 (1935) 年 第117巻 『社会分業論』 (下) デュルケーム／著 山崎早一／訳 昭和12 (1937) 年 第118巻 『プレルウディエン 哲学序曲』 (上) ヴィンデルバンド／著 陶山務／訳 昭和10 (1935) 年 第119巻 『プレルウディエン 哲学序曲』 (下) ヴィンデルバンド／著 陶山務／訳 昭和10 (1935) 年 第120巻 『教育と文化』 シュプラランガー／著 柿崎純／訳 昭和10 (1935) 年 第121巻 『児童心理学』 ビネー／著 波多野完治／訳 昭和11 (1936) 年 第122巻 『音楽と音楽家』 (下b) ロバート・シューマン／著 鈴木賢之進／訳 昭和11 (1936) 年 第123巻 『法律社会学原理』 F. W. エルサレム／著 内山慶之進／訳 昭和10 (1935) 年 第124巻 『意思と表象としての世界』 (下) ショペンハウエル／著 関南担／訳 昭和12 (1937) 年

○『世界大思想全集』第2期 全29巻 春秋社 昭和4 (1929) 年—昭和8 (1933) 年

第1—5巻 『訳文大日本史』 山路愛山／訳 第6—9巻 『羅馬衰亡史 第1—4』 ギボン／著 野々村戒三／訳 第10巻 『文芸復興史』 ブルックハルト／著 山岸光宣／訳 第11—12巻 『仏蘭西革命史』 カーライル／著 柳田泉／訳 第13—15巻 『十九世紀文学主潮史 第1—3』 ブランデス／著 吹田純助等訳 第16巻 『マキアヴェリよりレニンまで』 カール・フォレンダア／著 服部実等／訳 第17—20巻 『独逸社会民主党史』 メーリング／著 米田幸雄、高村洋一、塚本三吉／訳 第21—22巻 『英国社会主義史』 マックス・ベヤア／著 加田哲二、園乾治／訳 第23—24巻 『唯物論史』 ランゲ／著 賀川豊彦／訳 第25巻 『羅馬衰亡史 第5』 ギボン／著 内ヶ崎作三郎／訳 第26—28巻 『世界文化史』 ウェルズ／著 北川三郎／訳 第29巻 『一九世紀文学主潮流史 第4』 ブランデス／著 茅野蕭々／訳

「創立者にみる、若き日々の読書」図書目録（稿）

創価大学中央図書館「池田文庫」 渉獵

昭和17(1942)年—昭和35(1960)年5月4日

## 凡 例

### I 収録範囲

#### ○採録対象図書

創立者池田大作先生の『若き日の日記』の読書記録を中心に『若き日の読書』『続・若き日の読書』『読書ノート』等から読書記録に関するものを採録した。

採録した図書は、「創価大学中央図書館資料検索システムOPAC」で所蔵を確認し、池田文庫（中央図書館閉架書庫7層）に排架されている図書を閲覧し、書誌事項等を調査した。中央図書館、池田文庫に未所蔵の図書については、国立国会図書館蔵書検索システムNDL-OPACにより書誌事項を確認し、採録した。なお、池田文庫所蔵図書で著者、書名等が一致している図書は全て目録に採録し、今後の研究資料として、利用できるようにした。

#### ○採録期間

『若き日の日記』その他から、昭和17(1942)年から昭和35(1960)年5月4日まで採録している。昭和17(1942)年から昭和24(1949)年の期間については、年月日が未確定の場合があるため、月日は未記入にした。但し、他の著作から、推定できる場合はおよその年順に採録した。

○採録にあたり、日々の読書に関する「日記」の内容をゴシックで抜書きした。

### II 記載事項、形式

○使用漢字は、原則として、常用漢字、新字体に統一した。但し、仮名遣いについては、原本とおりとした。

○明らかな誤字・誤植は訂正した。

○巻数表示などは、アラビア数字に統一。但し、書名中の数字はそのまま表記した。

○記載の形式は、年月日／曜日／同定／書名／著者／出版社／刊行年月／所蔵／請求記号とした。

□年月日： 昭和00(1900)年00月00日とした。

□同 定： 『若き日の日記』図書と同定……A 『読書ノート』の図書と同定……D  
『若き日の読書』図書と同定……B 同定はできないが著者、書名等が  
『続若き日の読書』図書と同定……C 一致するもの……E

□書 名： 書名は『 』 叢書名は（ ）で記入した。

□著 者： 著者は／著 編者は／編 訳者は／訳 4名以上の著者、訳者、編者がいる場合は /等著/等編/等訳とした。

□出 版 社： 通常の名義とした。

□刊行年月： 西暦で表記した。月が不明の場合は年のみ表記した。  
セット物の場合 1925-1926のように表記した。

□所 蔵： 池田文庫所蔵 池文 中央図書館所蔵 中央  
国立国会図書館所蔵 国図 創価大学重宝指定 重宝

□請求記号： 各図書館で所蔵する図書の分類（NDC）及び排架場所を意味する

### III 排列

○年月日順に作成した。

創価教育研究第2号

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号	
				B 『レ・ミゼラブル』上中下(岩波文庫)	ユゴー/著 豊島興志雄/訳	岩波書店	1950	国図 953-c189r-T		
				E 『レ・ミゼラブル』上中下(岩波文庫)	ユゴー/著 豊島興志雄/訳	岩波書店	1964	池文 953/H98/1-3		
				E 『哲学ノート』	三木清/著	雪華社	1962	中央 121.9/M124		
				D 『人生論ノート』	三木清/著	創元社	1941.8	中央 121.9/M124		
昭和				E 『人生論ノート』(三木清著作集第16巻)	三木清/著	雪華社	1962	中央 121.9/M124		
17										
1942				E 『人生論ノート』	三木清/著	岩波書店	1951	池文 121.9/M124/16		
				E 『人生論ノート』(新潮文庫)	三木清/著	新潮社	1954.9	池文 121.9/M124		
昭和				E 『読書と人生』	三木清/著	雪華社	1962	中央 121.9/M124		
20										
1945				C 『社会契約論』(岩波文庫)	ルソー/著 桑原武夫/等訳	岩波書店	1954	池文 311/R76		
				E 『社会契約論』(世界の思想第2巻)	ルソー/著 平岡昇、根岸国孝/共訳	河出書房新社	1965.11	池文 080/Ku95/2		
				E 『社会契約論』(世界の名著第30巻)	ルソー/著 井上幸治/訳	中央公論社	1966.6	池文 080/Se22/30		
				E 『人間不平等起源論』(岩波文庫)	ルソー/著 本田喜代治、平岡昇/訳	岩波書店	1957	池文 311/R76		
				B 『エミール』上下(改造文庫)	ルソー/著 内山賢次/訳	改造社	1931.11- 1937.11			
				E 『エミール』上中下(岩波文庫)	ルソー/著 今野一雄/訳	岩波書店	1962-64	池文 371/R76/1-3		
-----										
昭和				<b>読書ノート</b>						
21										
1946				一書の人を恐れよ。書を読み、書に読まれるな。自己を作ることだ。それには、熱烈たる、勇気が必要だ。						
				B D 『欺かざるの記』(国木田独歩全集第5巻, 第6巻)	国木田独歩/著	改造社	1930	国図 918.6/Ku819k2		
				E 『欺かざるの記』(国木田独歩全集第6巻)	国木田独歩/著	学習研究社	1964	池文 918.6/Ku44/6		
				E サータア・リザータス 衣裳哲学	カーライル/著 柳田泉/訳	春秋社	1948	国図 YD5-H-a133-14		
				D 『英雄及び英雄崇拜』(カーライル全集)	カーライル/著 柳田泉/訳	春秋社	1923	池文 934/C18/5		
				E 『ワーズワース詩集』(岩波文庫)	ワーズワース/著 田部重治/選訳	岩波書店	1957	池文 931/W88		
				D 『バイロン詩集』新訳	バイロン/著 阿部知二/訳	新潮社	1938.7	中央 931/B99		
				E 『バイロン詩集』(世界の詩)	バイロン/著 阿部知二/訳	弥生書房	1963	池文 931/B99		
				E 『代表的人間像』(エマソン選集第6巻)	エマソン/著 酒本雅之/訳	日本教文社	1961.2	中央 133.92/E52		
				E 『エマソン論文集』上、下(岩波文庫)	エマソン/著 酒本雅之/訳	岩波書店	1972.9- 1973.8	中央 934/B-1		
				B 『吉田松陰伝』(吉田松陰全集第1巻)	吉田松陰/著 山口県教育会/編	岩波書店	1936	池文 081.8/Y86/1		
				B 『カーライル伝』(世界文学講座第4巻)	新潮社/編	新潮社	1930.11	池文 908/Sh61/4		
				E 『フランクリンの少壮時代』(定本国木田独歩全集第8巻)	国木田独歩/著	学習研究社	1978.3	池文 918.6Ku44/8		
				E 『アブラハムリンコルン』(定本国木田独歩全集第8巻)	国木田独歩/著	学習研究社	1978.3	池文 918.6Ku44/8		
				E 『平家物語』(岩波新書)	石母田正/著	岩波書店	1957	池文 913.45/178		
				E 『平家物語』(長門本(国書刊行会叢書))	国書刊行会/編	国書刊行会	1906	池文 081/Ko53/1-20		
				E 『平家物語』(承久記)	国民文庫刊行会/編	国民文庫刊行会	1911	池文 081/Ko48		
				E 『平家物語』(校註日本文学大系第14巻)	国民図書/編	国民図書株式会社編	1925	池文 918/Ko48/14		
				E 『平家物語』(有朋堂文庫)	永井一孝/校訂	有朋堂書店	1927.3	池文 918/Y96/15		
				E 『平家物語』(岩波文庫)	山田孝雄/校訂	岩波書店	1929	池文 913.45/Y19/1		
				E 『源平盛衰記』(帝國文庫)		博文館	1893.6	池文 918.5/Te24/5		
				E 『源平盛衰記』	国民文庫刊行会/編	国民文庫刊行会	1910.12	池文 081/Ko48		
				E 『源平盛衰記補聞』(国史叢書第10巻)	国史研究会/編	国史研究会	1914.11	池文 210.08/Ko53/10		
				E 『源平盛衰記 人名』(三十輯第4巻 国書刊行会叢書)	国書刊行会/編	国書刊行会	1917	池文 081/Ko53/6-6		
				E 『源平盛衰記』上(有朋堂文庫)	石川核/校訂	有朋堂書店	1922.4	池文 918/Y96/16		
				E 『源平盛衰記』下(有朋堂文庫)	石川核/校訂	有朋堂書店	1922.5	池文 918/Y96/17		
				E 『源平盛衰記』上(校註日本文学大系第15巻)	国民図書株式会社/編	国民図書	1926.4	池文 918/Ko48/15		

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和	21		E	『源平盛衰記』上(校註日本文学大系第16巻)	国民図書株式会社/編	国民図書	1926.10	池文 918/Ko48/16	
1946			E	『源平盛衰記・北条九代記』(物語日本史大系第4巻)	浅井了意/著早稲田大学出版部/編	早稲田大学出版部	1928.4	池文 210.1/W41/4	
			E	『竹取物語』(岩波文庫)	島津久基/校訂	岩波書店	1929.6	池文 913.31/Sh46	
			E	『かぐや姫』竹取物語(講談社の絵本)	西條八十/文織田観潮/絵	大日本雄弁会講談社	1939.2	池文 726.5/Ko95/101	
			E	『竹取翁物語』(古典文庫)	吉田幸一/編	古典文庫	1949	池文 910.8/Ko93/22	
			E	『竹取物語』(日本国民文学全集第5巻)	川端康成/訳	河出書房	1956	池文 918/N71/5	
			E	『竹取物語』(日本古典鑑賞講座第5巻)	三谷栄一/訳	角川書店	1958	池文 918/N71/5	
			E	『竹取物語・伊勢物語』(日本古典全書)	南波浩/校註	朝日新聞社	1960	池文 913.31/N48	
			E	『ゴエテファウスト』(大思想文庫)	ゲーテ/著 茅野肅々/訳	岩波書店	1936	池文 948/C47	
			E	『ファウスト』(ゲーテ全集第4巻)	ゲーテ/著	改造社	1937	池文 948/G56/4	
			E	『ファウスト』第2部上(ゲーテ全集第5巻ノ1)	ゲーテ/著 阿部次郎/訳	改造社	1939	池文 948/G56/5-1	
			E	『ファウスト』第2部下(ゲーテ全集第5巻ノ2)	ゲーテ/著 阿部次郎/訳	改造社	1939	池文 948/G56/5-2	
			E	『ファウスト』第1部	ゲーテ/著 久保栄/訳	中央公論社	1948	池文 942/G56/1	
			E	『ファウスト』第1部	ゲーテ/著 森鷗外/訳	朝日新聞社	1949	池文 942/G56/1	
			E	『若きウェルテルの悩み』(エルテル叢書)	ゲーテ/著 泰豊吉/訳	新潮社	1917	池文 943/G56	
			E	『若きウェルテルの悩み』(ゲーテ全集第15巻)	ゲーテ/著	改造社	1935	池文 948/G56/15	
			E	『若きウェルテルの悩み』(岩波文庫)改版	ゲーテ/著 竹山道雄/訳	岩波書店	1951.4	池文 943/G56	
			E	『若きウェルテルの悩み』(現代教養文庫)	ゲーテ/著 秋山英夫/訳	社会思想研究会出版部	1960	池文 943/G56	
			E	『若きウェルテルの悩み』	ゲーテ/著 国松孝二/訳	白水社	1960	池文 943/G56	
			E	『若きウェルテルの悩み』(ゲーテ全集第7巻)	ゲーテ/著 前田敬作/訳	人文書院	1960	池文 943/G56/7	
			E	『若きウェルテルの悩み』(世界文学全集第8巻)	ゲーテ/著 高橋健二/訳	河出書房新社	1961.11	池文 908/Se22/8	
			E	『若きウェルテルの悩み』(潮文庫)	ゲーテ/著 芳賀権/訳	潮出版社	1971.3	池文 943/G56	
			E	『アンナ・カレーニナ』(世界文学全集第18巻)	トルストイ/著 原久一郎/訳	新潮社	1962	池文 908/Se 22/18	
			E	『アンナ・カレーニナ』(世界文学全集第19巻)	トルストイ/著 原久一郎/訳	新潮社	1962	池文 908/Se 22/19	
			E	『アンナ・カレーニナ』上巻(ロシア・ソビエト文学全集第17巻)	トルストイ/著 米川正夫/訳	平凡社	1964	池文 988/R 72	
			E	『アンナ・カレーニナ』下巻(ロシア・ソビエト文学全集第18巻)	トルストイ/著 米川正夫/訳	平凡社	1964	池文 988/R 73	
			E	『アンナ・カレーニナ』(世界文学全集第11巻)	トルストイ/著 中村白葉/訳	河出書房新社	1965.6	池文 908/Se 22/11	
			E	『アンナ・カレーニナ』第1巻(岩波文庫)	トルストイ/著 中村融/訳	岩波書店	1965.11	中央 983/To 47/t617-1	
			E	『アンナ・カレーニナ』第3-6巻(岩波文庫)	トルストイ/著 中村融/訳	岩波書店	1966-68.4	池文 983/To 47/3-6	
			E	『アンナ・カレーニナ』(トルストイ選集第6、7巻)	トルストイ/著 米川正夫/訳	岩波書店	1966-67	池文 988/To 47/6-7	
			E	『生い立ち—アンナ・カレーニナ時代』(大トルストイ第1巻)	ビリュコフ/著 原久一郎/訳	勁草書房	1968	池文 980.28/To 47/1	
			E	『復活』前編、後編	トルストイ/著 内田貢/訳	丸善株式会社	1908.1-1910.1	池文 983/To47/1-2	
			E	『復活』(トルストイ全集第11巻)	トルストイ/著 中村白葉/訳	岩波書店	1929.5	池文 988/To47/11	
			E	『復活』上、下巻(岩波文庫)	トルストイ/著 中村白葉/訳	岩波書店	1958.2-6	池文 983/To47/1-2	
			E	『復活』(トルストイ選集第9巻)	トルストイ/著 米川正夫/訳	岩波書店	1967	池文 988/To47/9	
			E	『戦争と平和』第1巻—3巻(泰西名著文庫)	レオ・トルストイ/著 馬場孤蝶/訳	国民文庫刊行会	1914.7-1915.2	池文 983/To47/1-3	
			E	『全訳戦争と平和』上、下巻	トルストイ/著 島村抱月、鈴木悦/訳	目黒分店	1916.12	池文 983/To47/1-2	
			E	『戦争と平和』第1-4巻(トルストイ全集第4-7巻)	トルストイ/著 米川正夫/訳	岩波書店	1929.11-1930.8	池文 983/To47/4-7	
			E	『戦争と平和』第1-3巻(大トルストイ全集第4-6巻)	トルストイ/著 原久一郎/訳	中央公論社	1937.2-1938.11	池文 983/To47/4-6	
			E	『戦争と平和物語』	トルストイ/著 伊達俊光/訳	金尾分瀬堂	1946.12	池文 983/To47	

創価教育研究第2号

年	月	日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和				E	『戦争と平和』第1-8巻(岩波文庫) 改版	トルストイ/著 米川正夫/訳	岩波書店	1955- 1956.8	池文 983/To47/1-8	
1946				E	『戦争と平和』第2,3,5,7巻(岩波文庫)	トルストイ/著 米川正夫/訳	岩波書店	1939.12- 1950.5	池文 983/To47/2,3,5,8	
				E	『戦争と平和』第4,5巻(トルストイ選集)	トルストイ/著 中村融/訳	岩波書店	1967	池文 983/To47/4,5	
				E	『戦争と平和』(少年少女世界の文学)	トルストイ/著 武者小路実篤/編	あかね書房	1971.8	池文 983/To47	
				E	『罪と罰』第1-3巻(岩波文庫) 改版	ドストエーフスキイ/著 中村白葉/ 訳	岩波書店	1958.11- 1959.2	池文 983/D88/1-3	
				E	『カラマーゾフの兄弟』第1-4巻(岩波文庫) 改版	ドストエーフスキイ/著 米川正夫/ 訳	岩波書店	1957	池文 983/D88/1-4	
				E	『カラマーゾフの兄弟』(少年少女世界の文学)	ドストエーフスキイ/著 米川正夫/ 編	あかね書房	1971.6	池文 983/D88	
				E	『どん底』(岩波文庫)	ゴーリキイ/著 中村白葉/訳	岩波書店	1961	池文 982/G67	
				E	『猟人日記』(ツルゲーネフ全集第7、8巻) 新修普及版	ツルゲーネフ/著 米川正夫/訳	六芸社	1937.1- 1937.5	池文 983/Tu6/7-8	
				E	『猟人日記』上、下(岩波文庫)	ツルゲーネフ/著 佐々木彰/訳	岩波書店	1958	池文 983/Tu6/1-2	
				B	『自然と人生』	徳富蘆花/著	民友社	1900.8		
				E	『自然と人生』(岩波文庫)	徳富蘆花/著	岩波書店	1958	池文 914.6・To45	
				B	『自然と人生』(名著復刻全集近代文学館) 民友社明治33年刊の複製	徳富蘆花/著	日本近代文学館	1968.12	池文 914.6・To45	
				E	『自然と人生』抄(日本文学全集第6巻)	徳富蘆花/著	集英社	1967	池文 918.6/N71/6	
				E	『隠者の夕暮れ・シユタツツだより』(岩波文庫)	ペスタロッチャー/著 長田新/訳	岩波書店	1950	池文 371/O44	
				E	『一握の砂』(啄木全集第1巻)	石川啄木/著	岩波書店	1961	池文 918.6/I76/1	
				E	『一握の砂反響』(啄木全集別巻)	石川啄木/著	岩波書店	1961	池文 918.6/I76/17	
				E	『一握の砂』(日本の文学第15巻)	石川啄木/著 谷崎潤一郎/等編	中央公論社	1967	池文 918/N71/15	
				E	『一握の砂』(日本文学全集第12巻)	石川啄木/著	集英社	1967	池文 918.6/N71/12	
				E	『一握の砂』(明治文学全集第52巻)	石川啄木/著 小田切秀雄/編	筑摩書房	1970	池文 918.6/Me25/52	
				E	『悲しき玩具』(啄木全集第1巻)	石川啄木/著	岩波書店	1961	池文 918.6/I76/1	
				E	『悲しき玩具反響』(啄木全集別巻)	石川啄木/著	岩波書店	1961	池文 918.6/I76/17	
				E	『悲しき玩具』(日本の文学第15巻)	石川啄木/著 谷崎潤一郎/等編	中央公論社	1967	池文 918/N71/15	
				E	『悲しき玩具』(日本文学全集第12巻)	石川啄木/著	集英社	1967	池文 918.6/N71/12	
				E	『悲しき玩具:一握の砂以後』(名著復刻全集近代文学館)	石川啄木/著	日本近代文学館	1969	池文 911.168/176	
				E	『悲しき玩具』(明治文学全集第52巻)	石川啄木/著 小田切秀雄/編	筑摩書房	1970	池文 918.6/Me25/52	
				E	『種の起源』上(岩波文庫版)	ダーウイン/著 八杉竜一/訳	岩波書店	1963	池文 467.5/D42/1	
				E	『種の起源』下(岩波文庫版)	ダーウイン/著 八杉竜一/訳	岩波書店	1963.4	池文 467.5/D42/2	
				E	『ソクラテスの弁明』(岩波ギリシア・ラテン原典叢書)	ソクラテス/著 田中美知太郎/校註	岩波書店	1950	池文 131.3/P71	
				E	『ソクラテスの弁明』(岩波文庫)	プラトン/著 久保勉/訳	岩波書店	1950	池文 131.3/P71	
				E	『ソクラテスの弁明』(世界文学大系第3巻)	プラトン/著 田中美知太郎/訳	筑摩書房	1959	池文 908/Se22	
				E	『ソクラテスの弁明』(世界の古典文学全集第14巻)	プラトン/著 田中美知太郎/訳	筑摩書房	1964	池文 908/Se22	
				E	『ソクラテスの弁明』(世界の名著第6巻)	プラトン/著 田中美知太郎/訳	中央公論社	1966.4	池文 080/Se22/6	
				E	『ソクラテスの弁明』(世界の大思想第1巻)	プラトン/著 田中美知太郎/訳	河出書房新社	1965.4	池文 080/Se22/1	
				B D	『クリトーン』(プラトン全集第2巻) 7版	プラトン/著 木村鷹太郎/訳	富山房	1924.6	池文 131.3/P71/2	
				E	『竹沢先生という人』(岩波文庫)	長与善郎/著	岩波書店	1960	池文 913.6/N25	
				E	『竹沢先生という人』(潮文庫)	長与善郎/著	潮出版社	1970	池文 913.6/N25	
				D	『陸奥直次郎』(岩波文庫)	長与善郎/著	岩波書店	1927	池文 913.6/N25	
				D	『奈落の人々』	ジャック・ロンドン/著 和氣律次郎/訳	改造社	1929	池文 939.13/L84	
				D	『旅する心』(改造文庫)	有島武郎/著	改造社	1933	池文 913.6/A76	
				D	『ウオタ・ベビ』(世界大衆文学全集第63巻)	キングスレイ/著 阿部知二/訳	改造社	1930	池文 908/Se22/63	
				D	『日本の目覚め』(岩波文庫)	岡倉寛三/著	岩波書店	1940	池文 210.5/O41	

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年 月 日	曜日	同定	書 名	著 者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和 21		E	『ガンディー聖書』(岩波文庫)	ガンディー/著 エルベール/編 藤村/訳	岩波書店	1950	池文 113/G19	
1946		D	『我等の対立』(改造文庫)	ブレハノフ/著 竹尾弉/訳	改造社	1932	池文 363.5/P72	
		B D	『神と国家』(改造文庫)	バクーニン/著 本荘可宗/訳	改造社	1929	池文 363.8/B15	
		D	『孫文伝』(偉人伝全集)	王叔之/著	改造社	1931	池文 289/So41	
		E	『孫文伝』	鈴江言一/著	岩波書店	1950.7	池文 289/So41	
		D	『頼朝・為朝』(改造文庫)	幸田露伴/著	改造社	1934	池文 913.6/Ko95	
		D	『偉人論及偉人研究』(偉人伝全集)	松本亦太郎/等著	改造社	1935	池文 280.4/Ma81	
		E	『復活の曙光』(現代日本文学全集第13巻)	姉崎正治/著	新潮社	1928	中央 D/W/546	
		D	『言志四録』(岩波文庫)	佐藤一斎/述 山田律、五弓安二郎/訳註	岩波書店	1939	池文 121.44/B-1/b-400	
		E	『参考言志四録新釈』	小和田武紀/著	有精堂出版部	1936.5	池文 121.5/Ko95	
読書サークル「協友会」を20人ほどの仲間とする。								
		C	『神曲:地獄、浄火、天堂』3冊	ダンテ/著 山川丙三郎/訳	警醒社書店	1914-22	国図 325-342	
		C	『神曲』(世界文学全集第1巻)	ダンテ/著 生田長江/訳	新潮社	1929	池文 908/Se22/1	
		E	『ダンテ神曲』(大思想文庫)	ダンテ/著 黒田正利/訳	岩波書店	1935	池文 971/Ku72	
		E	『神曲:地獄、浄火、天堂』上、中、下	ダンテ/著 山川丙三郎/訳	岩波書店	1952-58	池文 971/D39/1-3	
		E	『神曲』(世界文学大系第1巻)	ダンテ/著 野上素一/訳	筑摩書房	1962	池文 908/Se22/6	
		E	『神曲』(世界古典文学全集第35巻)	ダンテ/著 野上素一/訳	筑摩書房	1964	池文 908/Se22/35	
		E	『神曲』(世界文学全集第3巻)	ダンテ/著 平川祐弘/訳	河出書房新社	1966	池文 908/Se22/3-3	
		E	『神曲物語』(現代教養文庫)	ダンテ/原作 野上素一/訳著	社会思想社	1968	池文 971/D39	
		E	『神曲』(世界文学全集第2巻)カラー版	ダンテ/著 平川祐弘/訳	河出書房新社	1968	池文 908/Se22/2	
		E	『神曲:地獄篇第八歌』(現代人の思想第14巻)	サンギネーティ/著 平川祐弘/訳	平凡社	1969	池文 080/G34/14	
昭和 22		B	『ヒューペリオン』青春の書7	ヘルデルリン/著 吹田順助/訳	鎌倉文庫	1947.3.30	国図	
1947		D	『我が人生観』	武者小路実篤/著	自在書房	1947.6	池文 914.6/Mu84	
		E	『ギリシア神話』	呉茂一/著	新潮社	1969.12	池文 162.91/Ku59	
		E	『ゲーテ詩集』(世界の詩)	ゲーテ/著 高橋健二/訳	弥生書房	1964	池文 941/G56	
		E	『ゲーテ詩集』(新潮文庫)改版	ゲーテ/著 高橋健二/訳	新潮社	1967	池文 941/G56	
		D	『海舟先生氷川清話』校訂	勝安芳/述 吉本襄/編	河野成光館	1909.10	池文 289/Ka87	
		D	『氷川清話』海舟先生	勝安芳/述 吉本襄/編	前田大文館	1929.9	池文 210.61/Ka87	
		B	『勝海舟自伝』氷川清話	勝安芳/述、吉本襄/撰、勝部真長/編	広池学園出版部	1967	池文 210.61/Ka87	
		E	『氷川清話』(勝海舟全集第14巻)	江藤淳 勝部真長/編	勁草書房	1970	池文 081.5/Ka87/14	
		E	『氷川清話』付勝海舟伝	勝海舟/述 勝部真長/編	角川書店	1972	池文 210.61/Ka87	
		B D	『海舟全集』第1巻-10巻	勝安芳/著 海舟全集刊行会/編	改造社	1927-29	国図 YD5-H-a210-225	
		E	『海舟座談』(勝海舟全集第11巻)	勝部真長、松本三之介、大口勇次郎/編	勁草書房	1975	池文 081.5/Ka87/11	
		B D	『海舟座談』(岩波文庫)	巖本善治/編	岩波書店	1930	中央 914.6/B-1	
		B D	『西郷南洲遺訓:附手抄言志録及遺文』(岩波文庫)	西郷隆盛/著 山田濟斎/編(岩波文庫)	岩波書店	1939	池文 921.4/Y89	
		E	『学問のすゝめ』(福沢全集)	福沢諭吉/著 時事新報社/編	国民図書	1926	池文 081.8/F85/3	
		C	『学問のすゝめ』(岩波文庫)	福沢諭吉/著	岩波書店	1942	池文 370/F85	
		E	『学問のすゝめ』	福沢諭吉/著	慶應通信	1951	池文 370/F85	
		E	『学問のすゝめ』(福沢諭吉選集第1巻)	福沢諭吉/著 福沢諭吉著作福祭会/編	岩波書店	1951	池文 081.8/F85/1	
		E	『学問のすゝめ』(福沢諭吉全集第3巻)	福沢諭吉/著 慶應義塾/編	岩波書店	1959	池文 081.8/F85/3	
		E	『学問のすゝめ』(抄)(現代日本思想大系第2巻)	福沢諭吉/著 家永三郎/編	筑摩書房	1963	池文 081.6/G34/2	
		E	『学問のすゝめ』(名著復刻全集近代文学館)	福沢諭吉/著 小幡篤次郎/編	日本近代文学館	1968	池文 370/F85	
		E	『学問のすゝめ』(福沢諭吉全集第3巻)	福沢諭吉/著 慶應義塾/編 2版	岩波書店	1969	池文 081.8/F85/3	
		E	『福翁自伝』(福沢全集第3巻)	福沢諭吉/著 時事新報社/編	国民図書	1926	池文 081.8/F85/3	
		E	『福翁自伝』(福沢全集第7巻)	福沢諭吉/著 時事新報社/編	国民図書	1926	池文 081.8/F85/7	

## 創価教育研究第2号

年	月日	曜日	同日	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和	22			E 『福翁自伝』(福沢諭吉選集第6巻)	福沢諭吉/著 福沢諭吉書作編纂会/編	岩波書店	1951	池文 081.8/F85/6	
1947				E 『福翁自伝』(岩波文庫) 改訂版	福沢諭吉/著	岩波書店	1954	池文 289/F85	
				E 『福翁自伝』新訂版	福沢諭吉/著 富田正文/校注解説	慶應通信	1957	池文 289/F85	
				E 『福翁自伝』(福沢諭吉全集第7巻)	福沢諭吉/著 慶應義塾/編	岩波書店	1959	池文 081.8/F85/7	
				E 『福翁自伝』(世界ノンフィクション全集第11巻)	福沢諭吉/著 富田正文/編	筑摩書房	1960	池文 081.8/Se22/11	
				E 『福翁自伝』(世界教養全集第28巻)	福沢諭吉/著	平凡社	1963	池文 080/Se22/28	
				E 『福翁自伝』(現代日本思想大系第2巻)	福沢諭吉/著 家永三郎/編	筑摩書房	1963	池文 081.6/G34/2	
				E 『福翁自伝』(世界の間像第14巻)	福沢諭吉/著 角川書店編集部/編	角川書店	1964	池文 280.8/Ka14/14	
				E 『福翁自伝』(10冊の本第2巻)	福沢諭吉/著 井上靖、白井吉見/編	主婦の友社	1968	池文 081.6/157/2	
				E 『福翁自伝』(福沢諭吉全集第7巻)第2版	福沢諭吉/著 慶應義塾/編	岩波書店	1970	池文 081.8/F85/7	
				E 『福翁自伝』(福沢全集第15巻)	福沢諭吉/著 時事新報社/編	国民図書	1938	池文 081.8/F85/15	
				E 『代表的日本人』(岩波文庫)	内村鑑三/著 鈴木俊郎/訳	岩波書店	1950	池文 281.04/U19	
				E 『代表的日本人』(明治文学全集第39巻)	内村鑑三/著 川上徹太郎/編	筑摩書房	1967	池文 918.6/Me25/39	
				E 『代表的日本人』(歴史文庫)	内村鑑三/著 内村美代子/訳	日本ナポレオンセンター	1963	池文 281.04/U19	
				D 『憲法十七条』(日本哲学全書第1巻)	三枝博音/編	第一書房	1937.1	池文 081.6/Se18/1	
				E 『史記国字解』第1-第8巻	司馬遷/著 早稲田大学出版部/編	早稲田大学出版部	1919.6-20.1	池文 222.03/Sh34/1-8	
				E 『史記』(漢文叢書第3-8巻)	司馬遷/著 塚本哲三/編	有朋堂	1920-22	池文 082/Ts54/3-8	
				E 『国訳漢文大成』(第1)第13-16巻	司馬遷/著 国民文庫刊行会/編	国民文庫刊行会	1922.2-10	池文 082/Ko48/1-13-16	
				E 『史記』(中国古典文学全集第4巻)	司馬遷/著 野口定男/等訳	平凡社	1958	池文 928/C68/4	
				E 『史記の世界』(世界教養全集第18巻)	武田泰淳/著	平凡社	1961	池文 080/Se22/18	
				E 『史記』(世界文学大系第5巻A)本紀、書、表、世家篇	司馬遷/著 小竹文夫、小竹武夫/訳	筑摩書房	1962	池文 908/Se22/5-1	
				E 『史記』(世界文学大系第5巻B)列伝篇	司馬遷/著 小竹文夫、小竹武夫/訳	筑摩書房	1962	池文 908/Se22/5-2	
				E 『史記:中国古代の人物と』(中公新書)	貝塚茂樹/著	中央公論社	1963	池文 222.03/Ka21	
				E 『史記』下(中国古典選)	田中謙二、一海知義/著	朝日新聞社	1964	池文 222.03/Ta84/3	
				E 『史記』春秋戦国篇(新訂中国古典選)	田中謙二、一海知義/著	朝日新聞社	1966	池文 222.08/Sh69/10	
				E 『史記』楚漢篇(新訂中国古典選)	田中謙二、一海知義/著	朝日新聞社	1967	池文 222.08/Sh69/11	
				E 『史記』漢武篇(新訂中国古典選)	田中謙二、一海知義/著	朝日新聞社	1967	池文 222.08/Sh69/12	
				E 『警説史記』	村松暎/著	中央公論社	1968	池文 222.03/Mu48	
				E 『史記』(世界の名著第11巻)	司馬遷/著 貝塚茂樹/編	中央公論社	1968.5	池文 080/Se22/11	
				E 『史記』(世界古典文学全集第20巻)	司馬遷/著 小川環樹、今鷹真、福島吉彦/訳	筑摩書房	1969	池文 908/Se22/20	
				E 『ナポレオン』(潮文庫)	鶴見祐輔/著	潮出版社	1969	池文 289/N49	
				E 『人形の家』(岩波文庫)	イブセン/著 竹山道雄/訳	岩波書店	1950	池文 949.6/111	
				D 『二都物語』(世界文学全集第18巻)	ディッケンズ/著 柳田泉/訳	新潮社	1928	池文 908/Se22/18	
				D 『二都物語』(世界大衆文学全集第42巻)	ディッケンズ/著 名原広三郎/訳	改造社	1930	池文 908/Se22/42	
				D 『二都物語』上、中、下(岩波文庫)	ディッケンズ/著 佐々木直次郎/訳	岩波書店	1936-1948	池文 933/D72/1-3	
				E 『二都物語』上(新潮文庫)	ディッケンズ/著 佐々木直次郎/訳	新潮社	1951	池文 933/D72/1	
				E 『二都物語』(世界文学全集第6巻)	ディッケンズ/著 中野好夫、皆河宗一/訳	河出書房新社	1961.3	池文 908/Se22/6	
				E 『二都物語』(世界文学全集第22巻)特製豪華本	ディッケンズ/著 諸侯礼二/訳	河出書房新社	1961.4	池文 908/Se22/22	
				E 『二都物語』(世界文学全集5巻)	ディッケンズ/著 中野好夫/訳	河出書房新社	1961.11	池文 908/Se22/22	
				E 『二都物語』(世界文学全集10巻)カラー版	ディッケンズ/著 中野好夫/訳	河出書房新社	1967	池文 908/Se22/10	
				B 『坊ちゃん』(明治大正文学全集27巻)	夏目漱石/著	春陽堂	1927	池文 918.6/Me25/27	
				E 『坊ちゃん・三四郎』(現代日本名作選)	夏目漱石/著	筑摩書房	1953	池文 918.6/N58	
				E 『坊ちゃん』(角川文庫)	夏目漱石/著	角川書店	1955	池文 918.6/N58	
				E 『坊ちゃん』(漱石全集3巻)	夏目漱石/著	岩波書店	1956	池文 918.6/N58/3	
				E 『坊ちゃん』(日本の文学12巻)	夏目漱石/著	中央公論社	1964	池文 918.6/N71/12	

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
			D	『小公子』(世界大衆文学全集46巻)	F.H.バーネット/著 佐々木茂宗/訳	改造社	1930	池文 908/Se22/46	
			E	『小公子』(新潮文庫)	バーネット/著 中村能三/訳	新潮社	1953	池文 939.13/B93	
			E	『小公子』(角川文庫)	バーネット/著 松原至大/訳	角川書店	1954	池文 939.13/B93	
			E	『小公子』(世界少年少女文学全集第7巻)	バーネット/著	河出書房新社	1962	池文 908/Se22/7	
			E	『小公子』(名著復刻全集近代文学館)	バーネット/著 若松賤子/訳	日本近代文学館	1968.12	池文 933/B93	
			E	『小公子』(少年少女世界の文学第8巻)カラー名作	バーネット/著	小学館	1969.4	池文 909/Sh96/8	
			E	『若草物語』上,下(新潮文庫)	オールcott/著 松本恵子/訳	新潮社	1951	池文 939.13/A41/1-2	
			E	『若草物語』(世界の名作図書館第16巻)	オールcott/著 中山知子/訳	講談社	1967.11	池文 909.3/Se22/16	
			E	『若草物語』(少年少女世界の文学)	オールcott/著	小学館	1969.11	池文 909.3/Sh96/7	
昭和 24	6.13	月		神田にて『バスカル冥想録』『情熱の書』他1冊、計3冊購入。合計、120円也。					
1949			A	冥想録:パンセ	バスカル/著 由木康/訳	白水社	1938	池文 135.3/P26	
			A	『バスカル冥想録』	串田孫一/著	夏目書店	1948.4		
			E	『情熱の書』上,下(岩波文庫)	ハウプトマン/著 秋山六郎兵衛/訳	岩波書店	1942.1- 1946.4		
			E	『情熱の書』(人生叢書第6巻)	バイロン/著 谷崎精二/編纂	新人社	1945.9		
			E	『情熱の書』上,下	ハウプトマン/著 川崎芳隆/訳	万里閣新社	1957	国図 943-cH374z-K	
昭和 25	1.2	月		M君と共に、先生の隣に腰掛け、お話を、うけたまわる。—『永遠の都』の…。					
1950	1.3	火		午後、読書。夕刻より、2、3人の友人と雑談。明日より出勤だ。					
	5.20	土		夜半まで、読書。					
	5.21	日		夜半まで、読書。1時、就寝。					
	5.22	月		青年は、小心であってはならない。偉人伝を読むことも大事だ。自分は、これでいいと思つては、絶対にいけない。					
	5.31	水		『富士宗学要集』全11冊を購入。金3500円也。					
			E	『富士宗学要集』	堀日亨/編				
	6.10	土		『ゲーテとシラー』『梶牛全集』等を、神田にて求む。					
			A	『梶牛全集』	高山林次郎/著 姉崎正治他/編	博文館	1916.3	池文 918.68/Ta56/5	
	6.15	木		本の歴史は、間違ひだらけだ。自己の歴史には、自己の胸中の歴史だけは、一分の、嘘も、飾りも書けぬことを知れ。					
	8.15	水		トルストイの『懺悔』を読む。					
			E	懺悔(岩波文庫)	トルストイ/著 原久一郎/訳	岩波書店	1961.11	池文 984/To47	
			A	『大トルストイ全集』第14巻 懺悔	トルストイ/著 原久一郎/訳	中央公論社	1936.10	池文 988/To47/14	
	8.30	水		『レ・ミゼラブル』を読み終わる。(3回目の読了)					
			E	『レ・ミゼラブル』 上中下(岩波文庫)	ユゴー/著 豊島興志雄/訳	岩波書店	1964	池文 953/H98/1-3	
	9.18	月		トルストイの『日記』を読む。偉大な文豪たりとも、生涯、苦悩の連続であった。深く思念することをおぼえる。					
			E	『トルストイ未発表日記一九一〇年』	トルストイ/著 八住利雄/訳	ナウカ社	1935.12	池文 985/To47	
			E	『大トルストイ全集』第21巻 日記 附宗教論10篇	トルストイ/著 原久一郎/訳	中央公論社	1938.4	池文 988/To47/21	
			A	『トルストイ最後の日記』	トルストイ/著 八住利雄/訳	第一出版	1948.2	池文 985/To47	
			E	『トルストイ全集』第18巻 日記・書簡	トルストイ/著 中村融/訳	河出書房	1967	池文 988/To47/17	
	10.2	月		夕刻恩師と共に、小岩のK宅を訪う。2人して、電車中にて、種々仕事の話。帰りの車中はエミールの話、文学の話に花が咲く。					
	10.8	日		午後、読書。音楽を1人聴く。					
	10.26	木		フランシス・ベーコンの『随想録』を読む。意義あり。					
			E	『モンテーニュ随想録』第3巻	モンテーニュ/著 関根秀雄/訳	白水社	1960.9	池文 954/Mo37/3	
			E	『随想録』(世界教養全集第2巻)	モンテーニュ/著 関根秀雄/訳	平凡社	1962	池文 080/Se22/2	
			E	『新選モンテーニュ随想録』	モンテーニュ/著 関根秀雄/訳	白水社	1963.3	池文 954/Mo37	
			E	『新選モンテーニュ随想録』	モンテーニュ/著 関根秀雄/訳	白水社	1964	池文 954/Mo37	

創価教育研究第2号

年	月	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和	25		E	『随想録』(世界の思想第1巻)	モンテーニュ/著 関根秀雄/訳	河出書房新社	1965	池文 080/Ku95/1	
1950			E	『モンテーニュ随想録<エッセー>』(世界の大思想第4巻)	モンテーニュ/著 松浪信三郎/訳	河出書房新社	1966.12	池文 080/Se22/4	
			E	『モンテーニュ随想録<エッセー>』(世界の大思想第5巻)	モンテーニュ/著 松浪信三郎/訳	河出書房新社	1967.6	池文 080/Se22/5	
10.29	日			<b>ホイットマンの『草の葉』を読む。</b>					
			E	『草の葉』詩集	ホイットマン/著 富田砕花/訳	大燈閣	1919.5	池文 939.11/W 69	
			E	『草の葉』	ホイットマン/著 長沼重隆/訳	東興社	1929	池文 939.11/W 69	
			A	詩集『草の葉』	ホイットマン/著 富田砕花/訳	朝日新聞社	1949	池文 939.11/W 69	
			E	『草の葉』上巻	ホイットマン/著 長沼重隆/訳	三笠書房	1953.4	池文 939.11/W 69/1	
			E	『草の葉』ホイットマン詩集(岩波文庫) 9刷	ホイットマン/著 有島武郎/選訳	岩波書店	1955	池文 939.11/W 69	
			E	『草の葉』ホイットマン詩集 上(岩波文庫)	ホイットマン/著 杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之/訳	岩波書店	1969	池文 939.11/W 69/1	
			E	『草の葉』ホイットマン詩集 中(岩波文庫)	ホイットマン/著 鍋島能弘、酒本雅之/訳	岩波書店	1970.8	池文 939.11/W 69/2	
			E	『草の葉』ホイットマン詩集 下(岩波文庫)	ホイットマン/著 鍋島能弘、酒本雅之/訳	岩波書店	1971.7	池文 939.11/W 69/3	
11.1	水			<b>掃室、10時。読書。記憶力が減退して困る。</b>					
11.14	火			<b>12時近くまで、ワイルドの『獄中記』を読む。</b>					
			A	『獄中記』(岩波文庫)	ワイルド/著 阿部知二/訳	岩波書店	1935.4	池文 934/W73	
11.15	水			<b>新橋において、映画「レ・ミゼラブル」を観る。</b>					
11.27	月			<b>『宇宙の謎』を夜半まで読む。</b>					
			A	『宇宙の謎』	ヘッケル/著 栗原元吉/訳	玄黄社	1917.3	池文 112/H53	
11.28	火			<b>『世界文学全集』を読む。第7巻目に入る。</b>					
			A	『世界文学全集』第1-38巻	新潮社/編	新潮社	1927-30	池文 908/Se22/7	
			A	『世界文学全集』第7巻『アイヴァンホー、復讐者』	新潮社/編	新潮社	1929	池文 908/Se22/1-40	
11.30	木			<b>トルストイの『少年時代』を読む。暴君の少年時代と吾が少年時代とを、対照して考えに耽る。</b>					
			A	『少年時代』(岩波文庫)	トルストイ/著 米川正夫/訳	岩波書店	1932.9	池文 983/To47	
			E	『少年時代』(トルストイ選集第1巻)	トルストイ/著 北垣信行/訳	岩波書店	1967	池文 983/To47/1	
12.1	金			<b>小林多喜二の『独房』を読む。若き左翼作家の苦悩が、ありありとわかる。思想の過ちの、結末の厳しき運命を思う。</b>					
			A	『党生活者・独房』(岩波文庫)	小林多喜二/著	岩波書店	1950	池文 913.6/Ko12	
12.7	木			<b>「嵐が丘」。ヒースクリップとキャサリンの愛別離苦の描写に胸を打たれる。</b>					
昭和	26			<b>帰宅、10時。読書、ミルトン『失楽園』。</b>					
1951			A	『失楽園』(世界文学全集第5巻)	ミルトン/著 繁野天来/訳	新潮社	1929	池文 908/Se22/5	
1.13	土			<b>大文豪、ユゴー。革命の大叙事詩、小説家ヴィクトル・ユゴーの『九十三年』完読。感多し。わが国でも、彼の如き大小説家の出現を、望んでやまぬ。ああ、大哲理、大思想、大宗教に、立脚せし大文豪は、いつの日にかい出でなぬ。ああ、大情熱、大革命、大理想に、燃えたぎった、世紀の大文学者よ、1日も速やかにい出で来たれよ。</b>					
			A	『九十三年』(世界大衆文学全集第17巻)	ユゴー/著 早坂二郎/訳	改造社	1928.12.25	重宝 908/Se22/17	
			E	『九十三年』上(岩波文庫)	ユゴー/著 辻昶/訳	岩波書店	1954.2	池文 953/H98/1	
			E	『九十三年』中(岩波文庫)	ユゴー/著 辻昶/訳	岩波書店	1961.3	池文 953/H98/2	
			E	『九十三年』下(岩波文庫)	ユゴー/著 辻昶/訳	岩波書店	1964.9	池文 953/H98/3	
			E	『九十三年』上(潮文庫)	ユゴー/著 榎原晃三/訳	潮出版社	1969.11	池文 908/H98/1	
			E	『九十三年』下(潮文庫)	ユゴー/著 榎原晃三/訳	潮出版社	1970.2	池文 908/H98/2	
2.5	月			<b>帰宅、11時。『頼朝』を読み終わる。</b>					
			A	『頼朝・為朝』(改造文庫)	幸田露伴/著	改造社	1934	池文 913.6/Ko95	
			E	『源頼朝』上、下巻(普及版)	吉川英治/著	朝日新聞社	1942	池文 913.6/Y89/1,2	
2.8	木			<b>戸田先生を囲んで感想発表会。吾人は、革命には、大別して三種類あり。即ち、政治革命、経済革命、宗教革命なりと。いま此の書は、明治維新の革命と同じく、政治革命なりと思うと。共産革命は、経済革命なりと。吾人等の断行せんとする革命は、それらより本源的な、宗教革命なりと。即ち、真実の平和革命であり、無血革命なりと。大意の感想を述べたり。</b>					

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和26			A	『永遠の都』(世界大衆文学全集第39巻)	ケイン/著 戸川秋骨/訳	改造社	1930.7.20	池文 908/Se22/39	
1951	2.24	土		『三国志』全巻読み終わる。構想大なり。人心の機微よく画けり。大戦乱に、活躍せし、武将、政治家の一大絵巻の感あり。策あり。恋あり、涙あり、意気あり、力あり。教訓多々なり。建設、革命の青年、劉備玄德の姿—					
			E	『校訂通俗三国志』上、下巻(帝国文庫)	高井蘭山/著	博文社	1893.9	池文 918.5/Te 24/11-12	
			E	『通俗三国志』上、中、下巻(有朋堂文庫)	文山/(原著) 石川核/校訂	有朋堂書店	1927.1	池文 918/Y 96/57	
			E	『続三国志』上、下巻(物語支那史大系第6,7巻)	早稲田大学出版部/編	早稲田大学出版部	1929.8-9	池文 923/W 41/6-7	
			E	『三国志』(物語近世文学第15巻)	笹川臨風/解説	雄山閣	1940	池文 913.5/Mo 35/15	
			E	『兵法三国志』	田中久/著	新正堂	1942.11	池文 399/Ta 84	
			A	『三国志』巻の1-14.	吉川英治/著	大日本雄弁会講談社	1951	国図 913.6-Y859a3	
			E	『三国志:三国演義』第1-9冊(岩波文庫)	小川環樹、金田純一郎/訳	岩波書店	1953.1-1965.5	池文 923/O 24/1-9	
			E	『三国志』第1-10巻	吉川英治/著	六興/出版部	1956-57	池文 913.6/Y 89/1-10	
			E	『三国志演義』(中国古典文学全集第8,9巻)	立間祥介/訳	平凡社	1958.59	池文 928/C 68/9-8-9	
			E	『画壇三国志』(梢風名勝負物語、第13巻)	村松梢風/著	読売新聞社	1962	池文 913.6/Mu 48/13	
			E	『三国志』実録』	吉川幸次郎/著	筑摩書房	1962	池文 921.4/Y 89	
			E	『三国志』第1(吉川英治全集第26巻) 494p	吉川英治/著	講談社	1966	池文 918.6/Y 89/26	
			E	『三国志』第1(吉川英治全集第26巻) 572p	吉川英治/著	講談社	1966	池文 918.6/Y 89/26	
			E	『三国志』第2(吉川英治全集第27巻) 516p	吉川英治/著	講談社	1966	池文 918.6/Y 89/27	
			E	『三国志』第2(吉川英治全集第27巻) 602p	吉川英治/著	講談社	1966	池文 918.6/Y 89/27	
			E	『三国志』第3(吉川英治全集第28巻) 490p	吉川英治/著	講談社	1966	池文 918.6/Y 89/28	
			E	『三国志』第3(吉川英治全集第28巻) 572p	吉川英治/著	講談社	1966	池文 918.6/Y 89/28	
			E	『諸葛孔明:「三国志」とその時代』(桃源選書)	宮川尚志/著	桃源社	1966	池文 289/Sh 96	
			E	『内蒙三国志』(原書房・100冊選書)	松井忠雄/著	原書房	1966.12	池文 391.6/Ma 77	
			E	『三国志のために』(桑原武夫全集第3巻)	桑原武夫/著	朝日新聞	1968	池文 908/Ku 95/3	
			E	『三国志:通俗演義』	小川環樹、武部利男/共訳	岩波書店	1968	池文 923/O 24	
			E	『三国志実録』(吉川幸次郎全集第7巻)	吉川幸次郎/著	筑摩書房	1968	池文 921.4/Y 89/7	
			E	『三国志:物語』(現代教養文庫)	芦田孝昭/訳	社会思想社	1969	池文 923/A 92	
			E	『吉川英治自筆原稿:完全復刻版』	吉川英治/著 和田芳恵/解説	講談社	1972	池文 918.6/Y 89	
			E	『秘本三国志』第1、2、5、6巻	陳舜臣/著	文藝春秋	1974-77	池文 913.6/C 46/1-6	
			E	『三国志』第1、3、4巻(吉川英治文庫)	吉川英治/著	講談社	1975	池文 913.6/Y 89/1,3,4	
			E	『三国志』別巻「競い合う個性」	大石智良、竹内良雄/訳	徳間書店	1980.2	池文 222.043/Se 63/6	
			E	『三国志:完訳』第1巻(現代教養文庫)	村上智行/訳	社会思想社	1980.9	池文 923.5/Mu 43/1	
3.3	土			『トルストイ全集』4冊目を、読み終わる。					
			A	『トルストイ全集』全22巻	トルストイ/著 米川正夫、中村白葉、原久一郎、除村吉太郎、深見尚行、河野与一、黒田辰男、八杉貞利/共訳	岩波書店	1929.11-1931.10	池文 988/To47/1-22	
			E	『トルストイ全集』	トルストイ/著 加藤一夫/訳	トルストイ全集刊行会	1925.7	池文 988/Ka86	
			E	『トルストイ全集』第6巻、36巻、61巻	トルストイ/著 木村毅 他/訳	トルストイ全集刊行会	1926.12-28.6	池文 988/To47/6,36,61	
3.6	火			『モンテ・クリスト伯』を読む。思うこと多し。					
			E	『モンテ・クリスト伯』(世界文学全集第3期第5巻)	デュマ/著 山内義雄/訳	河出書房	1954	池文 908/Ka92/3-5	
			E	『モンテ・クリスト伯』第1巻-7巻(岩波文庫)	デュマ/著 山内義雄/訳	岩波書店	1956-57.1	池文 953/D96/1-7	
			E	『モンテ・クリスト伯』(世界文学全集第14巻)	デュマ/著 山内義雄/訳	河出書房新社	1961.11	池文 908/Se22/14	
			E	『モンテ・クリスト伯』(世界文学全集第4巻)	デュマ/著 山内義雄/訳	新潮社	1962	池文 908/Se22/4	

創価教育研究第2号

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和	26		E	『モンテ・クリスト伯』(世界文学全集第5巻)	デュマ/著 山内義雄/訳	新潮社	1962	池文 908/Se22/5	
1951			E	『モンテ・クリスト伯』第1-4巻(講談社文庫)	デュマ/著 新庄嘉章/訳	講談社	1975	池文 953/D96/4-5	
			E	『モンテ・クリスト伯』第1-4巻(潮文庫)	デュマ/著 生島遼一, 奥村香苗/共訳	潮出版社	1976	池文 953/D96/1-4	
	3.19	月		帰宅、9時50分。『スカラムーシュ』を読む。					
			E	『スカラムーシュ』上,下(潮文庫)	サバチニ/著 加島祥造/訳	潮出版社	1971	池文 953/Sa11/1-2	
	4.10	火		帰宅、10時50分過ぎ。『ホイットマン詩集』(白鳥省吾訳 新潮社)を開く。					
			A	ホイットマン詩集	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	新潮社	1919.12	池文 939.11/W69	
				カラマス 勝てる名声を読んだとき		大泉書店	1949	池文 939.11/W69	
	4.22	日		帰宅、10時少々過ぎ。レコードをかけ、ホイットマンの詩を読む。					
			A	ホイットマン詩集	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	新潮社	1919.12	池文 939.11/W69	
				秋の小川 嵐のゆる音楽		大泉書店	1949	池文 939.11/W69	
	4.24	火		『寺田寅彦全集』を、電車中で読む。					
			A	『寺田寅彦全集』第1巻-18巻	寺田寅彦/著	岩波書店	1950-51	池文 081.8/Te43/1-18	
	4.27	金		夜、『土田杏村全集』を少々読む。					
			A	『土田杏村全集』	土田杏村/著 恒藤恭/他編	第一書房	1935.9-36.3	池文 081/Ts26/	
	4.28	土		読書。3時過ぎ、就寝					
	4.29	日		読書。就寝。2時過ぎる。					
	5.13	日		読書。— 就寝。3時。					
	5.14	月		夜半まで、読書。思うこと多し。いつの日か「宗教革命」と題し、長編詩を書きたいものだ。					
	5.20	日		横になり、雑誌を読む。就寝、11時。					
	6.6	水		戸田先生のことを、1人、深く思う。読書。男は偉大なる程、その愛、また深きものなり。就寝、3時。					
昭和	27		A	経済学入門	波多野鼎/著	日本評論社	1950	重宝	
1952				戸田大学早朝講義始まる 第1回教材					
	12.5	金		『新・平家物語』を読む。					
	12.8	月		漢詩を、少々読み、床につく。「虞美人草」「偶成」					
				『虞美人草』古文眞寶前集(改訂高等漢文巻2 漢楚の興亡)	曾鞏/著 中西清/他共編	大修館書店	1954.1		
				『偶成詩』	朱熹/著				
	12.14	日		『新・平家物語』を読む。興味津津。就寝、1時半。					
			A	『新・平家物語』巻1-巻24	吉川英治/著	朝日新聞社	1951-57	池文 913.6/Y 89/1-24	
			E	『新・平家物語』第1-第24巻	吉川英治/著	朝日新聞社	1951-57	池文 913.6/Y 89/1-24	
			E	『新・平家物語』第1-第6巻	吉川英治/著	朝日新聞社	1959	池文 913.6/Y 89/1-6	
			E	『新・平家物語』(古典日本文学全集第16巻)	吉川英治/著	筑摩書房	1960	池文 913.6/Ko 93/16	
			E	『新・平家物語』(古典日本文学全集第16巻)	吉川英治/著	筑摩書房	1964	池文 913.6/Ko 93/16	
			E	『新・平家物語』第1-第10巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1965	池文 913.6/Y 89/1-10	
			E	『新・平家物語』(吉川英治全集第33巻)	吉川英治/著	講談社	1967	池文 913.6/Y 89/33	
			E	『新・平家物語』(吉川英治全集第34巻)	吉川英治/著	講談社	1967	池文 913.6/Y 89/34	
			E	『新・平家物語』第1-第12巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1967	池文 913.6/Y 89/1-12	
			E	『新・平家物語』第1-第13巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1968	池文 913.6/Y 89/1-13	
			E	『新・平家物語』第1-第14巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1969	池文 913.6/Y 89/1-14	
	12.16	火		『水滸伝』序文を読み、先生、水滸会の意義、使命、確信を述べられる。此の座に集いし数、38名なり。					
			E	『校訂水滸伝』上、下巻(帝国文庫第36、37巻)		博文館	1895.11	池文 918.5/Te 24/36-37	
			E	『校訂続水滸伝』(続帝国文庫)	三木愛花、田中従吾軒/著	博文館	1900.9	池文 918.5/Z 5/25	
			E	『校訂傾城水滸伝』(続帝国文庫)	曲亭馬琴/著	博文館	1900.10	池文 918.5/Z 5/26	

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和	27		E	『校訂俊傑神稲水滸伝』上、中、下巻(統帝国文庫)	岳亭丘山/[等]著	博文館	1902.11-1903.2	池文 918.5/Z 5/44-46	
1952			E	『水滸伝雪桃』(黙阿弥脚本集第19巻)	河竹黙阿弥/著 河竹糸女/補修 河竹繁俊/校訂編纂	春陽堂	1922	池文 912.5/Ka 98/19	
			E	『文学部 水滸伝』(国訳漢文大成〔第2〕第18-20巻)	国民文庫刊行会/編	国民文庫刊行会	1923.11-1924.10	池文 082/Ko 48/2-18-20	
			E	『水滸伝』(黙阿弥脚本集第20巻)	河竹黙阿弥/著 河竹糸女/補修 河竹繁俊/校訂編纂	春陽堂	1926	池文 912.5/Ka 98/20	
			E	『水滸伝』(世界大衆文学全集第44巻)	メリエ/著 宇高伸一/訳	改造社	1930	池文 908/Se 22/44	
			E	『水滸伝』(世界大衆文学全集第38巻)	施耐庵/著 笹川臨風/訳	改造社	1930	池文 908/Se 22/38	
			E	『水滸伝』(物語近世文学第14巻)	笹川臨風/解説	雄山閣	1941	池文 913.5/Mo 35/14	
			E	『水滸伝』(露伴全集第18巻)	幸田露伴/著	岩波書店	1949	池文 918.6/K 95/18	
			E	『水滸伝』第1-4冊(岩波文庫)	吉川幸次郎/訳	岩波書店	1947-49.11	池文 923/Y 89/1-4	
			A	『新訳 水滸伝』第1-9巻 欠巻:3、5、8巻	佐藤春夫/訳	中央公論社	1952-53	池文 923/Sa 87/1-9	
	12.17	水		11時、帰宅。『水滸伝』を読む。					
	12.18	木		『水滸伝』を読む。就寝、1時半。					
	12.19	金		『水滸伝』を読む。					
			A	『新訳 水滸伝』第1-9巻	佐藤春夫/訳	中央公論社	1952-53	池文 923/Sa 87/1-9	
	12.20	土	A	法学原論 戸田大学早朝講義教材	和田小次郎/著	敬文堂書店	1948	重宝	
	12.26	金		来年は、本を読もう。読んで読んで読みぬこう。来年は、勉学の年としよう。学会の飛躍に遅れぬためにも。					
昭和	28			吾々にて、先生に、「星落秋風五文原の歌」をお聞かせする。先生、涙を浮かべ、幾度となく、繰り返して歌わせる。					
1953			E	『天地有情』	土井晩翠/著	博文館	1918	国図 911.56-D61t	
			A	『晩翠詩集』	土井晩翠/著	博文館	1919	池文 911.56/D 83	
			E	『土井晩翠集』(明治文学全集第58巻)	土井晩翠/著 矢野峰人/編	筑摩書房	1967.4	池文 918.6/Me 25/58	
	1. 6	火		朝、先生より『法律原論』の講義をうける。弥々、本格的に朝の勉強が始まる。					
	1. 7	水		夕刻、社員達と「血闘—スカラム—シュ」を有楽座で観る。本年は、最低50冊、読破することを決意する。今日より、始む。出発、頗る良し。					
	1.23	金		『法律原論』順調に進む。先生の講義、先生の思索、山よりも高く、海よりも深し。					
	1.27	火		雪、紛々。『法律原論』を、私を中心に勉強。次第に進む。					
			A	『法律学概論』(法律学全集第1巻)	林信雄/著	評論社	1949	国図 YD5-H-a320-84	
	1.28	水		先生の指導で、今日より『十八史略』を読み始む。					
			A	『十八史略』上、下巻(漢籍国字解全書第36、37巻)	早稲田大学出版部/編	早稲田大学出版部	1917	池文 123/W 41/36-37	
			E	『新・十八史略物語』第2、6、別巻上	奥野信太郎、佐藤春夫、増田涉/編	河出書房新社	1956-57	池文 222.01/O 56/2,6,14	
			E	『新・十八史略詳解』上、下巻	辛島驍、多久弘一/共著	明治書院	1959	池文 222.01/Ka 62/1-2	
			E	『新・十八史略詳解』	辛島驍、多久弘一/共著	明治書院	1959	池文 222.01/Ka 62	
			E	『新・十八史略』天、地、人	常石茂、他/著	河出書房新社	1966/78	池文 222.01/Ts 76	
			E	『十八史略』(新釈漢文大系第20、21巻)		明治書院	1967-69	池文 082/Sh 69/20-21	
	2. 2	月		『新・平家物語』—平治の乱に入る。感深し。興亡盛衰。人間葛藤の歴史に、悲惨多し。					
	4. 7	火		第3回目の、『三国志』読了。					
			A	化学 戸田大学早朝講義教材	デーラー/著 白井敏明・桑木来吉/訳	河出書房	1953	重宝	
	4. 8	水		四月、ホイットマンも、ゲーテも、ミルトンも、ダンテも、みな、心より歌い、戦い、悩み、進みしは、4月。夜、読書。					
	9. 2	水	A	地球と天体 戸田大学早朝講義教材	デーラー/著 白井敏明・桑木来吉/訳	河出書房	1953	重宝	

年	月	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和	10.3	土		朝の、先生の講義、天文学、半ば越える。仏法と天文学の関連性に胸躍る。					
28	10.7	水		『天文学』終わる。将来の最良の糧となる。深謝する、先生に。読書。『織田信長』——勇猛なる将。明晰なる頭脳					
1953				男性の本望たる活動。藤吉郎も、面白き、親しみ深き人物なり。幾度も、歴史の本を読むよう、常に先生はいわれる。 大事は、史観なりと。——					
			E	『織田信長』第1—第7巻	山岡荘八/著	大日本雄弁会講談社	1955-59	池文 913.6/Y42/1-7	
			E	『織田信長』(現代人の日本史)	尾崎士郎/著	河出書房新社	1960	池文 210/G34/13	
			E	『織田信長』(グリーンベルト・シリーズ)	今井林太郎/著	筑摩書房	1966	池文 289/S-4/82	
			E	『織田信長』(歴史の京都第1巻)	岡本良一/著	淡交社	1970	池文 216.2/R25/1	
			E	『武将列伝』(海音寺潮五郎全集第16巻)	海音寺潮五郎/著	朝日新聞社	1970	池文 918.6/Ka21/16	
			E	『炎の柱—織田信長』(大仏次郎時代小説自選集 大仏次郎/著)	海音寺潮五郎、司馬遼太郎/著	読売新聞社	1970	池文 913.6/O74/12	
			E	『織田信長』(日本史探訪第1集)	海音寺潮五郎、司馬遼太郎/著	角川書店	1971	池文 210.1/N77/1	
			E	『織田信長』(嵐の中の日本人シリーズ)	童門冬二/著 成瀬数富/絵	あかね書房	1975.11	池文 289/O17	
	10.13	火		『花の生涯』を読む。					
			A	『花の生涯』	舟橋聖一/著	新潮社	1953	池文 913.6/F88/1	
			A	『花の生涯』続	舟橋聖一/著	新潮社	1953	池文 913.6/F88/2	
	10.18	日		午前中、読書。					
	10.20	火	A	生命	テラー/著 白井敏明・桑木来吉/訳	河出書房	1953	重宝	
				戸田大学早朝講義教材					
	11.10	火		『皇女和の宮』を読む。就寝、1時少々前。					
			A	『皇女和の宮』	川口松太郎/著	朝日新聞社	1953	国図 913.6-Ka759k3	
	12		A	資料日本史	小沢栄一・高井浩・小田泰正/編	清水書院	1952	重宝	
				戸田大学早朝講義教材					
	12.22	火		朝の講義、法律学、政治学、経済学、化学、漢文と進む。先生の、身体をいとわず、弟子を育成して下さる恩—吾人は、 いかに返さんや。今だ。力、力、力を蓄える時は、あらゆる力を、後代の準備として蓄えん。					
昭和	1.14	木		朝の講義、日本歴史、相当進む。限りなき青空に、わが胸、広くなる感じ。					
29			A	資料日本史	小沢栄一・高井浩・小田泰正/編	清水書院	1952	重宝	
1954	1.17	日		柳田国男氏宅に『価値論』を贈呈に行く。成城学園、留守にて残念。					
			A	『価値論』	牧口常三郎/著 戸田城聖/補訂	創価学会	1953.11	池文 189.5/Ma 34	
	2.9	火		6時、水滸会。『水滸伝』第9巻を完結。小生が司会。76名の同志集合す。10時30分、会長室にて、先生と懇談。 昨日のことは、全くふれられず、悠々たる先生。「勉強せよ、勉強せよ」とおっしゃる。					
	2.15	月		朝の講義、日本歴史、相当進む。					
	2.18	木		社にて『モンテ・クリスト伯』読了。読書は、智慧も、知識も、そして御書の読み方にも、力を与えてくれる。 「生涯、30分ずつでも、読書せよ。一生の間には、大変な長時間の読書になる」といった人がいた。					
	3.1	月		先生より教授法についての話有り。実に面白く、深く、味わうべき話であった。下田歌子の、『源氏物語』の教授法、 及び研数学館の、どじょう先生の教授法をも、例として述べられた。					
			E	『日本の女性』	下田歌子/著	実業之日本社	1913	池文 367.21/Sh 51	
	3.2	火		『後藤新平論』を読む。進取、先見と実践の闘志であった。力ある指導者。而市、批判し、論すべき点、多々あり。					
	3.9	火		『モンテ・クリスト伯』に入る。先生の観察、思索、見解の偉大さ、本当に私は驚いた。 水滸会教材					
	3.10	水		日本史等、終了に近づく。特に、鎌倉時代、足利時代篇に、興味をおぼえる。					
	4.11	日		代表幹部2,3名に『永遠の都』の本を贈る。					

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和29	4.18	日		阿部次郎の『三太郎の日記』を読む。					
1954			A	『三太郎の日記』合本(角川文庫)	阿部次郎/著	角川書店	1950	池文 914.6/A12/1	
			E	『三太郎の日記』(阿部次郎全集第1巻)	阿部次郎/著	角川書店	1960.12	池文 914.6/A12/1	
			E	『三太郎の日記 補遺』(阿部次郎全集第2巻)	阿部次郎/著	角川書店	1961	池文 914.6/A12/2	
			E	『三太郎の日記』(世界教養全集第4巻)	阿部次郎/著	平凡社	1963	池文 080/Se22/4	
			E	『合本三太郎の日記』(角川選書)	阿部次郎/著	角川書店	1968	池文 914.6/A12	
			E	『三太郎の日記 補遺』(角川文庫)	阿部次郎/著	角川書店	1968.2	池文 914.6/A12/2	
	5.11	火	A	『風箏』 水滸会教材	尾崎士郎/著	新潮社	1954.3	国図 913.6-C979h	
	5.27	木		微熱つぎ身体の調子、依然として変わらず。啄木の“雲は天才である”を思い出す。					
	5.28	金	A	世界史 戸田大学早朝講義教材	矢田俊隆/著	有精堂	1954	重宝	
	6.7	月		秋山定輔を書いた『風の波と』を読む。誠に面白き人生なれど、彼の思考に共鳴出来得ず。人それぞれ、悔いなき、わが道を征くことだ。彼は彼、我れは我れなり。					
	6.12	土	A	『風の波と』	村松梢風/著	新潮社	1953	池文 913.6/Mu48	
	6.13	日		読書。『ブルターク英雄伝』遅く休む。—明日も、又、読もう。 夜、3時頃まで読書。					
			E	『ブルターク英雄伝』第1,3,4巻 改版	ブルターク/著 高橋五郎/訳	国民文庫刊行会	1930	池文 283.1/P75/1,3,4	
			A	『ブルターク英雄伝』第1-6巻	ブルタルコス/著 鶴見祐輔/訳	改造社	1334.4-6	池文 283.1/P75/1-6	
			E	『ブルターク英雄伝』	ブルターク/著 鶴見祐輔/訳	太平洋出版社	1949.12	池文 283.1/P73	
			E	『ブルターク英雄伝』	ブルターク/著 鶴見祐輔/訳	太平洋出版社	1950	池文 283.1/P73	
			E	『ブルターク英雄伝』第1-12巻(岩波文庫)	ブルターク/著 河野与一/訳	岩波書店	1952-56	池文 283.1/P75/1-12	
			E	『ブルターク英雄伝』(日本の文学第43巻)	小林秀雄/著	中央公論社	1973	国図 KH6-42	
			E	『ブルターク英雄伝』第1,5,8巻(潮文庫)	ブルターク/著 鶴見祐輔/訳	潮出版社	1971.10-1972	池文 283.1/P75/1,5,8	
	6.21	月		朝の講義—西洋歴史、着々と進む。偉大なる先生であられる。 1日も早く、世界の指導者として、活躍されん事を祈るのみ。					
	6.22	火	A	『風の波と』 水滸会教材	村松梢風/著	新潮社	1953	池文 913.6/Mu48	
	6.23	水		朝、少しずつでも、読書の習慣をつけたいと思う。					
	6.28	月		夜半まで、読書——。					
	6.30	水		野口米次郎を読む。					
			E	『表象抒情詩;野口米次郎定本詩集』第1-第4	野口米次郎/著	第一書房	1925.12-1927.6	池文 911.5/N93/1-4	
			E	『人生詩集』	野口米次郎/著	第一書房	1929.3	池文 911.5/N93	
			E	『幻島ロマンス』(世界大衆文学全集第32巻)	ゲール/著 野口米次郎/訳	改造社	1929	池文 908/Se 22/32	
			E	『ブラウニング詩集』	ブラウニング/著 野口米次郎/訳	第一書房	1930.3	池文 931/B 77	
			E	『伝統について』(青春文化選書)	野口米次郎/著	牧書房	1943	池文 704/N 93	
	7.1	木		1時より、駿河台図書館に行く。5時まで世界三傑の人物論を読み耽る。 神田にて『日本経済史』を金2000円を出して購入す。勉強せねばならぬ。					
			E	『日本経済史』全12巻	竹越与三郎/著	平凡社	1934-36	池文 332.1/1-12	
			E	『日本経済史概説』	中村吉治/著	日本評論社	1941.12	池文 332.1/N37	
			E	『日本経済史』	本庄栄治郎/著	有斐閣	1952	池文 332.1/H85	
			E	『日本経済史概要』7版(岩波全書)	土屋喬雄/著	岩波書店	1953	池文 332.1/Ts32	
			E	『日本経済史』	竹中靖一/著	ミネルヴァ書房	1953	池文 332.1/Ta64	
	7.2	金		明るい朝であった。然れども、朝の西洋歴史の講義がなかなか頭にはいらなかった。惰眠があつてはならぬ。 浅学は人生の恥である。					

創価教育研究第2号

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和29	7.8	木		夕刻、神田にて古本屋を回る。欲しくとも高価で、思う本が買えぬので残念。7冊購入。神田は迫力のある街である。					
1954	7.10	土		早朝に起き、菊池寛の著作を一冊読む					
			E	菊池寛戯曲全集第1巻	菊池寛/著	春陽堂	1921.5	池文 912.6/Ki24/1	
			E	現代戯曲全集第5巻	菊池寛/著	国民図書	1924	池文 912.608/Ko48/5	
			E	啓吉物語	菊池寛/著	玄文社	1924.2	池文 913.6/Ki24	
			E	時の氏神	菊池寛/著	新潮社	1924.9	池文 913.6/Ki24	
			E	菊池寛戯曲全集第3巻	菊池寛/著	春陽堂	1925.4	池文 912.6/Ki24/3	
			E	放蕩息子(世界大衆文学全集第7巻)	ケイン/著 菊池寛/訳	改造社	1929	池文 908/Se22/7	
			E	ナポレオン伝(偉人伝全集)	菊池寛/著	改造社	1931	池文 289/N49	
			E	菊池寛戯曲全集第2巻	菊池寛/著	春陽堂	1933.5	池文 912.6/Ki24/2	
			E	新道徳読本	菊池寛/著	創元社	1936.12	池文 150/Ki24	
			E	昭和の軍神西住戦車長伝	菊池寛/著	東京日日新聞社	1939.9	池文 289/N87	
			E	『愚誓の彼方に・忠直卿行状記』他8篇(岩波書店)	菊池寛/著	岩波書店	1952	池文 913.6/Ki24	
	7.13	火	A	『九十三年』(世界大衆文学全集第17巻)	ユゴー/著 早坂二郎/訳	改造社	1928.12.25	重宝 908/Se22/17	
				水滸会教材					
				1時近くまで、雑記帳に戸田先生の指導を整理する。					
	7.21	水		朝の西洋歴史講義、続く。先生、お疲れもいとわず、真剣に指導して下さい。申しわけない気持ち一。					
	7.25	日		午前中、新聞の切り抜き、並びに本棚の整理。					
	9.3	金		帰宅、11時少々前。『東西英雄論』を読了。					
			A	『東西英雄論』	尾崎士郎/著	小説朝日社	1953	池文 914.6/O96	
	9.28			一新時代の平和革命の大思想は、この日蓮大聖人の仏法あるのみと一。					
				ロビンソン・クルーソー水滸会教材					
				戸田大学早朝講義教材					
			A	『ロビンソン・クルーソー』(岩波少年文庫)	デフォー/著 阿部知二/訳	岩波書店	1952.6	池文 933/D 53	
			E	『ロビンソン・クルーソー』上巻(岩波文庫)	デフォー/作 平井正徳/訳	岩波書店	1967.10	池文 933/D 53/1	
	10.8	金		白雲飛び、大河流々。「自然」と随し、詩を雑記帳に記す。					
	10.21	木		午前中、調べごとをするため、駿河台図書館に行く。満員なのに驚く。					
	11.5	金		『改訂高等漢文』巻2(文部省検定済教科書) 中西清/他共編 大修館書店 1954.1					
	12.28	火		午後、本郷・東大赤門前のS書房に行く。聖教新聞へ寄贈の、仏教書購入のため。一本の少ないのに全く驚く。					
	12.29	水		朝、漢詩を手にする。					
昭和30	1.10	月		帰宅、9時半。読書。					
1955	1.23	日		先生、ルソーの『民約論』を思想とした、自由民権で起ち上がった板垣退助、中江兆民等の革命の講演。					
				『ルソー-民約論』(大思想文庫)	木村亀二/著	岩波書店	1935	池文 311/Ki39	
				『民約論』(世界大思想全集第1期7巻)	ルソー/著 加藤一夫/訳	春秋社	1927.11	池文 080/Se 22/1-7	
	1.28	金		帰宅、11時少々前。1人読書。					
	1.30	日		帰路、友と三国志等を語りつつ。曹操の勇を思う。項羽の大勇を愈う。関羽の人格。張飛の力。孔明の智。孫権の若さ。是非論、善悪論、多々論じあった。					
	2.2	水		『鴻門の会』を読む。『四面楚歌』を読む。『虞美人草』の、悲哀—史詩に胸懐そぞろなり。					
				『鴻門の会』史記(改訂高等漢文巻2 漢楚の興亡)	司馬遷/著 中西清/他共編	大修館書店	1954.1		
				『四面楚歌』史記(改訂高等漢文巻2 漢楚の興亡)	司馬遷/著 中西清/他共編	大修館書店	1954.1		
				『虞美人草』古文眞寶前集(改訂高等漢文巻2 漢楚の興亡)	曾鞏/著 中西清/他共編	大修館書店	1954.1		
	2.8	火		一、教学を徹底的に致す事 二、読書し、将来の糧としゆく事 三、自己の建設を、常に忘れざる					

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和30	2.15	火		12時、帰宅。1人読書す。					
1955	2.16	水		『隊長ブーリバ』読み始む。脳裏に去来するものあり。					
			A	『隊長ブーリバ』(角川文庫)	ゴーゴリ/著 平井肇/訳	角川書店	1951	国図 983-cG61t-H	
			E	『隊長・ブーリバ』(近代文庫)	ゴーゴリ/著 原久一郎/訳	創芸社	1953	国図 983-cG61t-H2	
			E	『隊長ブーリバ』(ロシア文学全集第30巻)	ゴーゴリ/著 原久一郎/訳	修道社	1959	池文 983/R72/30	
			E	『隊長ブーリバ』(潮文庫)	ゴーゴリ/著 原久一郎/訳	潮出版社	1970	池文 983/G57	
	2.18	火		魏徴の「述懐」の詩を、電車の中で読む。愛語の詩、亦楽し。					
				『述懐』唐詩選(改訂高等漢文巻2 慷慨)	魏徴/著 中西清/他共編	大修館書店	1954.1		
	3.6	日		8時、先生を迎え、水滸会。—『三国志』。					
	5.16	月		「ホイットマン詩集」を開く。(秋の小川 眠れる人々)					
			A	『ホイットマン詩集』	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	新潮社	1919.12	池文 939.11/W 69	
			E	『世界大思想全集』第1期(32)	ホイットマン/著 宮嶋新三郎/訳	春秋社	1930.6	池文 080/Se 22/1-32	
			E	『ホイットマン詩集』	ホイットマン/著 松山敏/訳	成光堂書店	1935.1	池文 939.11/W 69	
			A	『ホイットマン詩集』	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	大泉書店	1948	池文 939.11/W 69	
			E	『ホイットマン詩集』	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	弥生書房	1965	池文 939.11/W 69	
			E	『ホイットマン自選日記』上、下巻(岩波文庫)	ホイットマン/著 杉本番/訳	岩波書店	1967.8	池文 939.15/W 69/1-2	
				阿部次郎の『三太郎の日記』をちょっと読む。面白からず。					
			A	『三太郎の日記』合本(角川文庫)	阿部次郎/著	角川書店	1950	池文 914.6/A12/1	
	5.17	火		陶淵明の「帰去来」暗誦しながら、道を歩んだ。陶淵明/著					
				『歸去來辭』古文眞寶後集(改訂高等漢文巻2 自適)	陶潜/著 中西清/他共編	大修館書店	1954.1		
	5.18	水		小林秀雄の『批評家失格』『罪と罰』について』を面白く読む。どの本を読んでも、結局は、自己が一番優れ、偉いといっているようだ。					
			E	『私小説論』(創元文庫)	小林秀雄/著	創元社	1951	池文 901.3/Ko 12	
			E	『無常という事』(創元文庫)	小林秀雄/著	創元社	1952	池文 901.3/Ko 12	
			E	『地獄の季節』(岩波文庫) 改版	ランボオ/著 小林秀雄/訳	岩波書店	1957.11	池文 951/R 44	
			E	『小林秀雄』(人生論読本)	小林秀雄/著 佐古純一郎/編	角川書店	1960	池文 914.6/J 52/6	
			E	『考えるヒント』第1巻	小林秀雄/著	文藝春秋社	1964	池文 914.6/Ko 12/1	
			E	『古典と美:論集』	小林秀雄/著	求竜堂	1964	池文 914.6/Ko 12	
			A	『小林秀雄集』(現代文学大系第42巻)	小林秀雄/著	筑摩書房	1965.5	池文 918.6/G 34/42	
			E	『対話人間の建設』	岡潔、小林秀雄/著	新潮社	1965.7	池文 410.4/O 36	
			E	『無私の精神』	小林秀雄/著	文藝春秋	1967	池文 914.6/Ko 12	
			A	『批評家失格 I、II』(小林秀雄全集第1巻)	小林秀雄/著	新潮社	1967.11	池文 908/Ko 12/1	
			A	『「罪と罰」について I、II』(小林秀雄全集第6巻)	小林秀雄/著	新潮社	1967.12	池文 908/Ko 12/6	
			E	『小林秀雄全集』第5、10、11、12巻	小林秀雄/著	新潮社	1967-68	池文 908/Ko 12/	
			E	『ゴッホの手紙』(角川文庫) 改版	小林秀雄/著	角川書店	1968.3	池文 723.5/Ko 12	
			E	『作家の顔』(角川文庫) 改版	小林秀雄/著	角川書店	1969	池文 910.26/Ko 12	
			E	『歴史について:小林秀雄対談集』	小林秀雄/著	文藝春秋	1972	池文 914.6/Ko 12	
				『ホイットマン詩集』を読む。(カラムス 大道の歌)					
			A	ホイットマン詩集	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	新潮社	1919.12	池文 939.11/W 69	
			A	『ホイットマン詩集』	ホイットマン/著 白鳥省吾/訳	大泉書店	1948	池文 939.11/W 69	
	5.24	火		宗教革命論、政治と宗教論、科学と宗教論、文化と宗教論等を、立派に書き上げる勉強を着々とせねばならぬ。					
	5.31	火		夕刻、神田通りへ、古本、3冊購入。買いたい本は、山ほど有る。財政難。					
	6.1	水	A	政治学 戸田大学早朝講義教材	鈴木安蔵/著	青林書院	1955	池文	

創価教育研究第2号

年	月	曜日	同日	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和30	7.17	日		徳富蘆花の『自然と人生』を思い出す。					
1955			E	『自然と人生』(岩波文庫)	徳富蘆花/著	岩波書店	1958	池文 914.6・To 45	
	9.20	火		夜半まで、静かに読書。就寝、2時近くになる。					
	9.26	月		灯火親しむ候に入る。帰り、神田にて、食事。古本数冊、購入して帰宅。読書ト、文筆ニ、励ミタシ。					
	9.27	火		6時、水滸会。先生、御出席。『三国志』今夜にて、終了。東洋広布の進め方、日本の広宣流布の仕上げ方等の遺言にも似た、指導となる。					
	9.28	水		朝の講義『政治学』終了に近づく。					
	10.25	火		遅くまで、読書。本を読まねばならぬ。若いうちに。老いて、後悔せざる為にも。――					
	10. 7	金		先生と、映画「新・平家物語」を、親に行く予定なりしも、緊急部隊長会議のため、残念にも、行けず。先生のおさそいに、大きな意味を感じた。奥様より、あとで見ておくように、との連絡を戴く。					
	10.25	火		遅くまで、読書。本を読まねばならぬ。若いうちに。老いて、後悔せざる為にも。――					
	10.26	水		読書。静かな夜。平和な夜。幸福な夜。暖かな夜。有り難い。					
	10.28	金		読書の秋。否、365日、読書の日にしたいものだ。一、御書を、完全に読み切ってゆく事 一、六巻抄を、熟読すべき事 一、古今東西の、良書を精読すべき事 特にこの3年……。此の3年によって、私の生涯は決定するなり。運命、宿命――。大河の流れの如し。					
	10.29	土		先生の指示により、山喜房版『富士宗学要集』のことで東阪に行く。					
	11.12	土		今日で、朝の先生の勉強一政治学、法律、化学、漢文、天文学、経済学等、終了する。一生涯、勉強してゆかねばならぬ。生涯、謙虚に。決して、教学に、学問に、慢の人になること勿れ。					
	11.14	月		朝、「依義判文抄」の講義を、願ひする。文段、六巻抄の大事を痛感する。此の3か年において、勉学、徹底せねばならぬ。依義判文抄(六巻抄) 戸田大学早朝講義 第10回教材					
			E	『依義判文抄』(六巻抄講義第3巻)	創価学会教育部	聖教新聞社	1974.9	池文 189.12/So 81	
	12.21	水		吉川英治作「宮本武蔵」を再読。小学4年の頃をなつかしく偲びつつ。剣の人。技の人。この一念、この真理、この人生修行、この生命の躍動も、現代社会にフィットするなりと思ひて。					
			E	『宮本武蔵』(近世実録全書第7巻)	坪内逍遙/鑑選 早稲田大学出版部/編	早稲田大学出版部	1929	池文 913.56/W41/7	
			E	『宮本武蔵集、五輪の書』(大日本思想全集第3巻)		大日本思想全集刊行会	1933.8	池文 081.6/D14/3	
			A	『宮本武蔵』上、中、下巻	吉川英治/著	六興出版社	1953-54	国図 913.6-Y859m3-(s)	
			E	『宮本武蔵』第1-6巻	吉川英治/著	六興出版社	1958-59	池文 913.6/Y89/1-6	
			E	『宮本武蔵』第1-6巻	吉川英治/著	中央公論社	1960	池文 913.6/Y89/1-6	
	12.28	水		若い。まだまだ若い。自己を鍛え、磨かねば。(1)読書(2)書くこと。					
昭和31	1. 3	火		スペンサーのいわく。”第一に大胆であれ、第二に大胆たれ、第三に大胆たれ”と。					
1956	1.12	木		『宮本武蔵』読了。小次郎の死。武蔵の剣。思うこと多々。					
	1.19	木		帰り、渋谷へ、映画「新・平家物語」を観る。面白からず。					
	1.22	日		一人起てる時に 強き者は 真の勇者なり。(シルレル)					
	3.27	火		6時より、久しぶりに、水滸会。2時間、先生のおそばで、歴史観、当時の社会観、人物論等を、胸を痛めつつ聞き入る。博学なる師、深き大指導者。					
	3.29	木		妙法の青年革命児よ、白馬に乗って、真つぐらに、進みゆけ。山を越え、川を越え、谷を越えて。 ”走れメロス”の如くに。厳然と、師は見守っているぞ。					
			A	『走れメロス』(太宰治全集第3巻)	太宰治/著	筑摩書房	1955	池文 918.6/D49/3	
	4.11	水		午前中、先生に1時間程、報告。朝の勉強も、随分進んだと、褒めて下さる。師の下に、巢立つ栄光。世界一の青春。われに悔いなし。われに幸あれ。思索、読書。…12時すぎに、寝床。					
	4.24	火		『世界美術全集』平凡社版を購入。嬉し。					
			A	『世界美術全集』第1-29巻	平凡社/編	平凡社	1953.7-55	池文 708/H 51/1-29	
	4.26	木		帰宅、11時を過ぎる。少々雑誌を開く。					

年	月	曜日	同日	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和31	7.22	日		『新・平家物語』、『ナポレオン戦史』を読了。此の3年間、歴史書に、全力をあげる。					
1956			A	『新・平家物語』巻1-巻24	吉川英治/著	朝日新聞社	1951-57	池文 913.6/Y 89/1-24	
			A	『新・平家物語』第1-第24巻	吉川英治/著	朝日新聞社	1951-57	池文 913.6/Y 89/1-24	
			E	『新・平家物語』第1-第6巻	吉川英治/著	朝日新聞社	1959	池文 913.6/Y 89/1-6	
			E	『新・平家物語』(古典日本文学全集第16巻)	吉川英治/著	筑摩書房	1960	池文 913.6/Ko 93/16	
			E	『新・平家物語』(古典日本文学全集第16巻)	吉川英治/著	筑摩書房	1964	池文 913.6/Ko 93/16	
			E	『新・平家物語』第1-第10巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1965	池文 913.6/Y 89/1-10	
			E	『新・平家物語』(吉川英治全集第33巻)	吉川英治/著	講談社	1967	池文 913.6/Y 89/33	
			E	『新・平家物語』(吉川英治全集第34巻)	吉川英治/著	講談社	1967	池文 913.6/Y 89/34	
			E	『新・平家物語』第1-第12巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1967	池文 913.6/Y 89/1-12	
			E	『新・平家物語』第1-第13巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1968	池文 913.6/Y 89/1-13	
			E	『新・平家物語』第1-第14巻 愛蔵版	吉川英治/著	朝日新聞社	1969	池文 913.6/Y 89/1-14	
			A	『ナポレオン戦史』(国防科学叢書)	伊藤政之助/著	ダイヤモンド社	1942.6	池文 235/191	
8.28	火			体力は、人生行動、人生活動の本源である。体力のある人は幸せである。体力なき人は、不幸であるが、午後、先生より、経済の講義。新聞の読み方、人物の見方等の指摘あり。偉大なる師匠の言を、皆真摯に聞き留めねばならぬ。					
8.30	木			帰りに、友らと共に「日本かく戦えり」の記録映画を鑑賞。—新宿。戦争は悲劇である。戦争は絶対に避けねばならぬ。断じて。思うこと多し。					
11.29	木			新宿にて映画「静と義経」を観る。面白からず。しかし、男女の信頼の姿は美し。					
12. 1	土			早めに帰宅。読書。					
12. 2	日			夕刻まで横になりながら読書。… おそく帰宅。「流浪の民」「美しき天然」等を、妻と共に聴く。					
12. 4	火			家康の訓話に、また惟う。”人間の、その一生に三段の変わり目あり。よく心得べし。まず17,8歳の頃は、友人により悪く染ることある。30歳頃は、物事に慢心出でて、老朽者をも、尊敬せぬようになるものだ。40歳の時は、物事退屈し、昔を述懐するようになり、心弱くなるべし。					
12. 5	水			『太閤記』—読了、二回目か。小説を書く時の参考と憶いながら。					
12. 8	土			女子部の総会。盛会…参謀室長挨拶を、約5分なす。 ”鳳凰は木を択んで住む、人も師を択んで人生を生きるべきなり”という主眼なり。					
12.20	木			日記を記すことは、自身の片鱗を刻むことか。歴史を残すことか。自由の対話か。ともかく書こう。しかし、真実の境地を書ける時と、書けぬ時がある。ずるいものだ—人間は。					
12.21	金			御書を、拝読することを忘るな。小説を、読むことを忘るな。経済、政治の勉強も、そろそろ本格的に。先生の事を、1日中念う。師弟の厳しさ。					
12.22	土			遅くまで、読書。横になりながら。来年は、必ず、勉強しよう。誓う。自身に。					
12.27	木			先生より、演繹法と帰納法の話有り。西洋哲学のリッケルト—新カント学派の認識論と、東洋仏法の唯識論は、正反対である。					
昭和32	1. 2	水		野口米次郎の「元旦の詩」を思い起こす。					
1957			A	『表象抒情詩;野口米次郎定本詩集』第1-第4	野口米次郎/著	第一書房	1925.12-1927.6	池文 911.5/N93/1-4	
			E	『人生詩集』	野口米次郎/著	第一書房	1929.3	池文 911.5/N93	
1. 3	木			西田幾多郎の論文「観智的世界」と「直覚的知識」を、少々読む。					
			A	『一般者の自覚的体系』	西田幾多郎/著	岩波書店	1930.1	池文 121.6/N81	
			E	『一般者の自覚的体系』(西田幾多郎全集第5巻)	西田幾多郎/著	岩波書店	1965.6	池文 121.9/N81/5	
			E	『善の研究』(岩波文庫)	西田幾多郎/著	岩波書店	1950	池文 121.9/N 81	
			E	『哲学概論』	西田幾多郎/著	岩波書店	1953.11	池文 121.9/N 81	

年	月	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和32	1.5	土		午前中、休息—読書。群雲の如く、種々、未来への思念湧く。					
1957	1.31	木		一、御書を拝読することを続行のこと 一、良き小説を読む習慣をつけること 一、「大白蓮華」に執筆のこと 右、再び決意する。					
	2.13	水		教学力の、足らざるを、反省する昨今。不断の努力の、必要あり。これからの指導者の、第一義の問題たり。 この1年—読書の年でありたい。					
	2.17	日		Y著の『政治家と事務家』を読む。面白からず。少々、本棚の整理を。わが子の如き本一。					
	3.6	水		『歴代内閣総理大臣論』『人の統率法』を読む。面白からず。					
	3.19	火		帰り、映画「花は嘆かず」を観る。渋谷にて。あまり面白からず。					
	5.2	木		午後より、小雨あり。自己の幸福について、「病氣と悔恨」は、悪と談じた—トルストイの心情を、思わずにいられない。					
	5.4	土		遅くまで…読書。…思索。					
	5.7	火		阿部次郎の「秋窓記」を読了。					
			A	『秋窓記』	阿部次郎/著	岩波書店	1937	池文 404/A 12	
			E	『秋窓記(抄)』(昭和文学全集第25巻)	阿部次郎/著	角川書店	1953	池文 918.6/Sh 96/25	
			E	『秋窓記』(阿部次郎全集第10巻)	阿部次郎/著	角川書店	1960.10	池文 081.8/A 12/10	
	5.12	日		夕6時より、皆で「荒鷲の翼」の映画を観る。皆、久しぶりにと、大喜び。我が心境も、知らず。					
	5.15	水		午後、参考のため、日本国際見本市を、見学に行く。…先生に、見学の模様を、ご報告する。「科学と宗教」について 考えていくんだなあ」と一言指導あり。					
	6.2	日		『日本史』『世界史』の本を、応接間にて、広げる。					
	9.29	日		トルストイは、不幸とは、悔恨を残すことなり—と。1日1日を、せめて、有意義に送る努力をすることだ。					
	9.30	月		雪ハ笠槍ニ灑ギ 風ハ袂ヲ捲ク 呷々 乳ヲ索ムルハ 若為ナル情ノ 多年鉄拐峯頭ノ險 三軍ヲ叱咤スルハ 是レ此ノ声 好きな人物—源義経—を詠じた詩。戦記物を、読むこと、しばしば。					
	10.11	金		帰宅して、原稿を書く。未来、大いに書けるよう、雑記帳につれづれに誌す。静かな夜。いつまでも、思索す。					
	10.21	月		朝の先生による勉強—『日本歴史』に入る。藤原時代より。					
	10.22	火		車中、「第三の眼」を読了。先生より、たびたび、「読書せよ」と注意あり。「あの本も読め、この本も読んだか」と一。					
			A	『第三の眼;秘境チベットに生まれて』	ランバ/著 今井幸彦/訳	光文社	1957	池文 292.29/L77	
	10.23	水		ああ五文原—(8月)23日は、諸葛孔明の命日。先生の好む孔明—その心境や、誰ぞ知る。われも、生涯、孔明の如くありたし。					
	10.29	火		朝の勉強…先生、「待ちぼうけだよ」と厳しき瞳。弟子として、全く申し訳なし、猛省。山崎の合戦における、一人の 武勇伝をお聞きする。先生の心境を、たとえとしての指導か。					
	11.1	金		『太閤記』読了。徳川家康の秋霜の如き軍規と組織。秀吉の大氣の如き家族的明朗さを思い浮かべる。自分は後者か。 しかし、秀吉は一代、徳川家は十五代、両者の美点を忘却できず。					
			E	『校訂真書太閤記』第1-4巻(帝国文庫)	栗原柳庵/著	博文館	1893.3-4	池文 918.5/Te 24/1-4	
			E	『絵本太閤記』上、中、下巻(有朋堂文庫)	法橋玉山/画 塚本哲三/校訂	有朋堂書店	1926.12- 1927.2	池文 918/Y 96/97-99	
			E	『俺は藤吉郎』—川口太閤記 第1-13巻	川口松太郎/著	新潮社	1955.8- 1960.9	池文 913.6/Ka 92/1- 13	
			A	『新書太閤記』第1-8巻	吉川英治/著	六興出版部	1957-58	池文 913.6/Y 89/1-8	
			E	『太閤記』(日本国民文学全集別巻第12-18)	矢田挿雲/著	河出書房	1956-57	池文 918/N 71/47-53	
			E	『新書太閤記』第1-4巻(吉川英治全集第22-25巻)	吉川英治/著	講談社	1967	池文 918.6/Y 89/22- 25	
			E	『新史太閤記』前、後編	司馬遼太郎/著	新潮社	1968.3	池文 913.6/Sh 15/1-2	
			E	『太閤記』(世界の名作図書館第43巻)	小瀬南庵/策	講談社	1969.4	池文 909.3/Se 22/43	
			E	『新太閤記』第1-3巻(海音寺潮五郎全集第6-8巻)	海音寺潮五郎/著	朝日新聞社	1969-70	池文 918.6/Ka 21/6-9	
			E	『新史太閤記』(司馬遼太郎全集第17巻)	司馬遼太郎/著	文藝春秋	1972	池文 918.6/Sh 15/17	
			E	『新書太閤記』第2巻(講談社文庫)	吉川英治/著	講談社	1973	池文 913.6/Y 89/2	
	11.6	水		朝の勉強…鎌倉時代に入る。一生勉強を忘るな。					
	11.7	木		思索もなく、つれづれの雑記帳(大学ノート)—1冊、これで終わる。					

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」涉猟—

年	月日	曜日	同日	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和32	11・20	水		夜、「近松門左衛門全集」を読む。あまり、このまぬが、名文と、その描写に驚く。日本に出でし大文豪といえるか。					
1957				生涯に一つ、戸田先生の一生を書き留めゆくに、生命の奥底に、使命と希望とが湧く。					
			A	『近松門左衛門全集』全10巻	高野正巳/校註	春陽堂	1922-24	国図 912.4-Ti238t9-T	
			E	『近松浄瑠璃集』上、中、下巻(有朋堂文庫)	近松門左衛門/著 忠見慶造/校訂	有朋堂書店	1925.4-1926.5	池文 918/Y 96/39-41	
			E	『近松名作集』(日本名著全集;江戸文芸之部第4巻)	日本名著全集刊行会/編輯	日本名著全集刊行会	1926	池文 081/N 71/4	
			E	『近松名作集』(日本名著全集;江戸文芸之部第5巻)	日本名著全集刊行会/編輯	日本名著全集刊行会	1927	池文 081/N 71/5	
			E	『近松門左衛門集』上、中、下巻(日本古典全書)	高野斑山、黒木勘蔵/校訂	朝日新聞社	1950-52	池文 912.4/C44/1-3	
			E	『近松傑作選新解』	大藪虎亮/著	明治書院	1951	池文 912.4/O 69	
11.25	月			静かに……先生の指導が自然に映る。時を観る目、人材の育成法、人物の鑑定法等々。					
				信長の指導主義、秀吉・家康の功罪等々					
12. 2	月			ヒルティはいった。「高慢は、つねに相当量の愚かさ結びついている。高慢はつねに破滅の一手手前であられる。高慢になるひとは、もう勝負に負けているのである」と。革命に生きる青年は障魔の嵐を恐るな。					
12. 5	木			夜、男子部班長会に出席。帯広の開拓者・依田勉三の話をする。					
				ますらおが 心定めし 北の海 風吹かば吹け 浪立たば立て					
12. 9	月			心豊かに勤行。読書。					
12.11	水			中共の戦術を読む。					
				敵進我退 敵進めば我退き 敵駐我擾 敵とどまれば我みだし 敵疲我打 敵疲れれば我打ち 敵退我追 敵退けば我追う					
			E	『中共拝見』	門田勲/著	朝日新聞社	1955	池文 292.209/Ka 14	
			E	『人民中国:中共の真相』	デヴェラル/著 明星逸朗/訳	アメリカ労働総同盟アジア部	1955	池文 312.22/D 66	
			E	『お隣は天国か:ソ連・中共見聞記』	中外調査会/編	新世紀社	1956	池文 302.38/C 68	
			E	『百家争鳴:中共知識人の声』	小竹文夫/編著	弘文堂	1958	池文 312.22/O 82	
12.18	水			『太閤記』再読完了。現代社会にも、その機微、通用ありか。					
			A	『新書太閤記』第1-8巻	吉川英治/著	六興出版部	1957-58	池文 913.6/Y 89/1-8	
				今日より『ガモフ全集』を再読することにする。過去の先入観による仏法観を、超越し、下種仏法の偉大さを次第に知る。					
				「科学が進展すればするほど、この大仏法の奥義の証明は楽になる」と、師は常にいう。					
			A	『ガモフ全集』第1-9巻	ガモフ/著	白揚社	1952-54	国図 408-cG19g	
			E	『ガモフ全集』第1-13巻	ガモフ/著	白揚社	1959-71	池文 408/G18/1-13	
			E	『ガモフ全集』別巻1-3巻	ガモフ/著 伏見康治、鎮目恭夫/訳	白揚社	1959-72	池文 408/G18/1-14	
12.19	木			こんなことを書いている本あり。「人生70年・働く年数19年・睡眠・23年間・病気4年間・娯楽9年間・着物の着替2年間・食事の時間3年間」と。思う!“実質的、価値ある人生、何年間なり”と。					
12.20	金			微熱下がらず、早めの帰宅。ゆっくり思索を。読書を。					
12.26	木			池田蔵書がふえゆくのは、最高に愉し。並ぶ本は、吾が子の如し。					
12.30	月			午前、午後と在宅。午後、読書。御書も…。					
昭和33	1. 8	水		土井晩翠「曉鐘—萬里長城の歌」					
1958				興廢移り 悲喜まじる 一人の跡 一国の跡 笑の陰に 涙あり 暗のあなたに 光あり					
			A	『晩翠詩集』	土井晩翠/著	博文館	1926.8	池文 911.56/D83	
1.16	木			車中、マックス・ウェーバーの『宗教社会学』を読む。ドイツの思想家と、フランス・イギリスの思想家たちの相対的性格を思索しながら。御書の一節をわが生命に刻む思いで—この書に誌そう。					
				当世の習いそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり、と。(草木成仏口決)					
			A	『宗教社会学論集』第3	マックス・ウェーバー/著	みすず書房	1953	国図 161.3-cW37s	
			E	『宗教社会学論選』	マックス・ウェーバー/著 大塚久雄、生松敬三/訳	みすず書房	1972	中央 161.3/W 51	
1.17	金			明日より、時間を決め、読書することに決意。					
1.18	土			早々に帰宅して、読書。					

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号	
昭和33	1.26	日		朝、疲労深し。微熱あり、37度8分とのこと。注射を打つ。午前中、床の中で、本を軽く読む。						
1958	2.2	日		子らに「童話集」を読んであげる。うまく読めず。 『隊商・童話集』(岩波文庫) 改版 ハウフ/著 高橋健二/訳 岩波書店 1940.3 池文 943/H45 『一房の葡萄:他5編 童話集』(岩波文庫) 改版 有島武郎/著 岩波書店 1950 池文 913.8/A76 『風の又三郎:他18編 童話集』(岩波文庫) 改版 宮沢賢治/著 谷川徹三/編 岩波書店 1951 池文 913.8/M89 『銀河鉄道の夜:他14編 童話集』(岩波文庫) 改版 宮沢賢治/著 谷川徹三/編 岩波書店 1951 池文 913.8/M89 『グリム童話集』第1冊-第7冊(岩波文庫) 改訳 グリム/著 金田鬼一/訳 岩波書店 1954-56 池文 943/G86/1-7 『注文の多い料理店(童話集)』(宮沢賢治全集第8巻) 宮沢賢治/著 筑摩書房 1956 池文 918.6/M89/8						
	5.20	火		『吉野朝太平記』を読み始む。あまり面白からず。 A 『吉野朝太平記』第1-5巻 鷺尾雨工/著 東都書房 1958 池文 913.6/W44/1-5						
	5.23	金		沼津の指導終え、支部長らと、熱海に一泊。全く眠れず、読書三昧。						
	5.24	土		読書……。						
	6.4	水		帰宅10時を過ぎる。『走れメロス』を再読。 E 『走れメロス』太宰治全集第3巻 太宰治/著 筑摩書房 1955 池文 918.6/D49/3 A 『富岳百景・走れメロス』(岩波文庫) 太宰治/著 岩波書店 1957 池文 918.6/D49 E 『定本太宰治全集』第3巻 太宰治/著 筑摩書房 1962 池文 918.6/D49/3 E 『太宰治集』(現代文学大系第54巻) 太宰治/著 筑摩書房 1965.1 池文 918.6/G34/54 E 『太宰治集』(日本文学全集第1集第26巻) 太宰治/著 河出書房新社 1967 池文 918.6/N71/1-26 E 『走れメロス』(新潮文庫) 太宰治/著 新潮社 1967 池文 913.6/D49 E 『太宰治集』(日本文学全集第70巻) 太宰治/著 集英社 1967 池文 918.6/N71/70 E 『走れメロス』太宰治全集第3巻 太宰治/著 筑摩書房 1967 池文 918.6/D49/3 E 『日本短編文学全集』第36巻 白井吉見/編 太宰治/著 筑摩書房 1968 池文 913.608/U95/36 E 『走れメロス』(世界の名著図書館第23巻) 太宰治/著 講談社 1969.1 池文 909.3/Se22/23						
	6.7	土		横浜駅、午前9時30分発にて、関西の講義へ。車中、読書。						
	6.29	日		午前中、床の中で『水滸伝』を読む。限りなき想像の発掘に……自分の心身をふり減らす思い。悠然たる日々をおくりたいと思うが、激務と激動が、所詮、真の悠然たる境地になっているのかもしれない。						
	8.31	日		読書を—真剣。静思の秋—読むぞ。						
	9.2	火		無常が、本質か—常住が、本質か。読書せよ。思索せよ。身体を鍛えよ。						
	9.26	金		大阪発、午前9時の特急に、飛び乗る。車中、ひとりで読書したり、休んだり。						
	10.7	火		秋、深まる。静かなる1日。読書の秋、今日より『日本文学全集』を読み始む。						
	10.15	水		帰宅、10時少々前。御書拝読。読書2時まで。						
	10.20	月		某老大家の作品を読む。この文、われはおもしろしと思う。しかし、老いたる人よ。過去の人よ。……とみずからも老境の年代になることを……考う。						
	11.25	火		夜半まで、読書。つれづれに書を。						
昭和34	1.2	金		車中思う—本年は、教学と読書を、10年分ぐらいやりたし—と。今年からのこの日誌は、遺言の思いなり。黄金と						
1959				試験と、歴史の1日1日。その記録を……。自身の人生は……今日以後。先生—必ず見守ってください。						
	1.3	土		午後—読書。『財界人物論』結局、恩師の10年間の、教育、指導、行動、思想、人格、人間性、英知に勝るものなし。万書に超越し、万人の指導者に勝るか。						
	1.4	日		夜、読書—『倫理学』。2時過ぎるか—就床。						
	1.5	月		夜、昨日に続き読書。						
	1.6	火		「倫理学」日記に記す 「マウルア王朝の最大の意義が、チャンドラグプタの孫アショーカ(阿育)によって創り出された独特なインドの帝国にあるとすればわれわれは右の見方に賛同せざるを得ないであろう。アショーカ王は、マウルヤ帝国の巨大な権力を傾けて、ダルマ(法)の支配を打ちたてようとした。その法は特にブッダによって説かれたもの、慈悲の理想を原理とするものである」						

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」 涉珮一

年	月	日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号	
昭和	34			A	『倫理学』	和辻哲郎/著	岩波書店	1931.12	池文 108/195/1-28		
1959				E	『倫理学』上,下巻 第2版	和辻哲郎/著	岩波書店	1965	池文 150.1/W48/1-2		
	1.21	水			帰宅、10時30分。シュヴァイツァーの『パツハ』(辻莊一・山根銀二訳 岩波書店)を開く。						
				A	『パツハ』上,下巻	シュヴァイツァー/著 辻莊一、山根銀二/訳	岩波書店	1955-58	池文 762.4/Sc8/1-2		
				E	『パツハ』(シュヴァイツァー著作集第12-14巻)	シュヴァイツァー/著 浅井真男、内垣啓一、杉山好/共訳	白水社	1957	池文 084/Sc8/12-14		
	3.17	火			遅くまで、デュルケム著『宗教生活の原初形態』を読む。難解。						
				A	『宗教生活の原初形態』上,下巻(岩波文庫)改訳	デュルケム/著 古野清人/訳	岩波書店	1941,42	池文 161.3/D98/1-2		
	8.11	火			幼少のころ、新聞記者になることを決意する。これ「聖教新聞」発刊で満足。少年のころ、文学者を決意する。これ『人間革命』の著述にして、満足するか。資料等の準備を思考。						
	12.21	月			遅くまで、読書。						
	12.24	木			38度の熱—午前中、休む。妻より、早速、本部に連絡を頼む。横になりながら『犬養木堂伝』を読む。						
				E	『犬養木堂伝』上,中,下巻(明治百年史叢書)	木堂先生伝記刊行会/編	原書房	1968-	池文 289/158		
編者: 鷲尾義直 東洋経済新報社(昭13-14年)刊の複製											
昭和	35	1. 4	月		夜半、一人で読書。種々思考。						
1960	1. 5	火			一日中、身体疲れ、横になつたりして読書。						
	1.10	日			夕刻、帰宅。夜半まで、静かに読書。マルクス、福沢諭吉、王陽明、ならびにレーニン、ヘーゲル、パツハ伝を、ひろい読みをする。レーニンの、54歳での革命への生命力には、驚くとともに敬愛を感じる。その思想の善悪・高低の次元は別として。ともかく、主義主張を貫く人に見ならうべきであらう。						
	1.18	月			サートン著の『科学史と新ヒューマニズム』の続きを読む。いつの日か『科学と宗教』執筆の参考としたい。						
				E	『科学史と新ヒューマニズム』(岩波新書)	サートン/著 森島恒雄/訳	岩波書店	1938	池文 402/Sa69		
				A	『科学史と新ヒューマニズム』(岩波新書)	サートン/著 森島恒雄/訳	岩波書店	1950	池文 402/Sa69		
	1.28	木			夜、『マルキシズムと宗教』を読む、30年も前の本であった。						
				A	『マルキシズムと宗教』	長谷川如是閑/他著 中外日報東京支局/編	大鳳閣書房	1930	池文 309.3/C68		
	1.29	金			「寒山詩」を読む。『三隠詩集』というときは、寒山と豊干、拾得の詩を併せていうなりと聞く。私は杜甫の詩のほうをはるかに好む。 貧人好聚財 恰好鼻愛子 子大而食母 財多還害己 散之即福生 聚之即禍起 無財亦無禍 鼓翼青雲裡 人生不滿百 常懷千載憂 自身病始可 ……						
				A	『寒山詩』(岩波文庫)	寒山子/著 太田佛藏/訳註	岩波書店	1939.2	池文 921.4/Ka59		
				E	『杜詩』第1冊-第8冊(岩波文庫)	杜甫/著 鈴木虎雄、黒川洋一/訳註	岩波書店	1963.1-1966	池文 921.4/To 11/1-8		
				E	『杜詩講義』	吉川幸次郎/著	筑摩書房	1963	池文 921.4/Y89		
				A	『杜詩-訳註 五言古詩』巻之1(岩波文庫)	杜甫/著 漆山又四郎/訳註	岩波書店	1928.3	池文 921/To 11/1		
				A	『杜詩-訳註 五言古詩』巻之2(岩波文庫)	杜甫/著 漆山又四郎/訳註	岩波書店	1942.5	池文 921/To 11/2		
				A	『杜詩-訳註 七言古詩・歌行・絶句』巻之3(岩波文庫)	杜甫/著 漆山又四郎/訳註	岩波書店	1929	池文 921/To 11/3		
				A	『杜詩-訳註 五言律詩・七言律詩』巻之4(岩波文庫)	杜甫/著 漆山又四郎/訳註	岩波書店	1943.10	池文 921/To 11/4		
	1.30	土			6時少々前、帰宅。すぐ横になる。運動せねば。少々読書。『平家物語』……。 平家の滅亡は悲劇であった。その根本原因はいずこにありや。深く分析、思考する要あるなり。逆境にある人生に、美しく、端然たる人あり。その名、薩摩守忠度、その人か。平家一門のなかに、冴え映える青年將軍よ。詩人將軍よ。激動と逆濤にありて、われもかくありたし。戦死、覚悟の詩人と、俊成卿との会見。一幅の生ける絵のごとし。生ける人生劇場の縮図にやあるらん。悠々たる作詩。優遊たる心境。その出陣に見る毅然たる態度。和歌それ自身の姿われ感動あり。						
	2. 1	月			『方丈記』にいわく、ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世中にある人と栖と、またかくのごとし。						
				E	『方丈記』	鴨長明/著 国民文庫刊行会/編	国民文庫刊行会	1910	池文 081/Ko48		
				E	『方丈記』(校注日本文学大系第3巻)	鴨長明/著 国民図書/編	国民図書	1925.7	池文 918/Ko15		

年 月 日	曜日	同定	書 名	著 者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
昭和35		E	『方丈記』(有朋堂文庫)	鴨長明/著 塚本哲三/校訂、編	有朋堂書店	1926.8	池文 918/Y96/7	
1960		E	『方丈記』(岩波文庫) 改版	鴨長明/著 山田孝雄/校訂	岩波書店	1939	池文 914.42/Ka41	
		E	『方丈記五種』(古典文庫)	鴨長明/著 松浦定俊/校訂	古典文庫	1947.6	池文 910.8/ko93/5	
		E	『方丈記とつれづれ草』(日本文学講座第4巻)	桐原徳重/著 日本文学協会/編	東京大学出版会	1954	池文 910.8/N71/4	
		E	『方丈記の解釈と文法』(解釈文法シリーズ)	上田知雄/著	明治書院	1955	池文 815/Ka21/9	
		E	『方丈記』(日本国民文学全集第7巻)	鴨長明/著 佐藤春夫/訳	河出書房	1956	池文 918/N71/7	
		E	『鴨長明方丈記: 一條兼良筆本』(古典文庫)	鴨長明/著 吉田幸一/編	古典文庫	1956	池文 910.8/Ko93/105	
		E	『方丈記』(講座解釈と文法第5巻)	鴨長明/著 文入宗義/編	明治書院	1959.10	池文 815/F87/5	
		E	『方丈記』(古典日本文学全集第11巻)	鴨長明/著 唐木順三/訳	筑摩書房	1962	池文 918/Ko93/11	
		E	『方丈記』(国民の文学第7巻)	鴨長明/著 佐藤春夫/訳	河出書房新社	1964.5	池文 918/Ta88/7	
		E	『方丈記』(日本文学全集第1集第3巻)	鴨長明/著 佐藤春夫/訳	河出書房新社	1965	池文 918/N71/1-3	
		E	『方丈記』(日本短篇文学全集第2巻)	鴨長明/著 唐木順三/訳	筑摩書房	1969	池文 913.608/U95/2	
		E	『方丈記と徒然草』(講座日本文学第5巻)	小林智昭/著	三省堂	1969	池文 910.2/Ko98	
		E	『方丈記』(日本古典全書)	鴨長明/著 細野哲雄/校注	朝日新聞社	1970	池文 914.42/Ka41	
		E	『方丈記の人世観』(明治文学全集第41巻)	大町桂月/著	筑摩書房	1971	池文 918.6/Me25/41	
		E	『方丈記私記』	堀田善衛/著	筑摩書房	1971	池文 914.6/H96	
		E	『方丈記』(日本古典文学全集第27巻)	鴨長明/著 神田秀夫/校注	小学館	1971.8	池文 918/N71/27	
		E	『方丈記・発心集』(新潮日本古典集成)	鴨長明/著 三木紀人/校注	新潮社	1976	池文 914.42/Ka41	
2. 4 木			『魯迅評論集』を開く。 路とは何か。それは路がなかったところへ踏み作られたものだ。荊棘ばかりのところを開拓してきたものだ。むかしから、路はあった。将来も、永久にあるだろう。(竹内好訳)					
		A	『魯迅評論集』(岩波新書)	魯迅/著 竹内好/訳	岩波書店	1953	池文 924/R62	
		A	『阿Q正伝: 呐喊』(岩波文庫)	魯迅/作 竹内好/訳	岩波書店	1955	池文 923/R62	
		E	『阿Q正伝』(角川文庫)	魯迅/著 増田渉/訳	角川書店	1961	池文 923/R62	
		E	『阿Q正伝』(世界文学全集第47巻)	魯迅/著 阿部知二/ほか編	河出書房新社	1962.2	池文 908/Se22/47	
		E	『阿Q正伝』(世界文学全集第19巻)	魯迅/著 竹内好/訳	河出書房新社	1966.3	池文 908/Se22/19	
		E	『阿Q正伝』(潮文庫)	魯迅/著 田中清一郎/訳	潮出版社	1972	池文 923/R62	
2. 9 火			金沢より帰途につく。車中、友と語り、眠り、本を読む。幾度も、諸葛孔明の玄德に仕えし、美しき情景が目目に浮かぶ。ひとり涙する。本年も本を読まねばならぬ。最低5、60冊は読むこと。					
2.15 月			東京駅より、本部に寄り、帰宅。10時過ぎる。疲れる。寝ながら読書しよう。					
2.22 月			初めての山陰指導となる。日本列島の同腹の横断である。春の小川、初春の山々、大地が、詩の中を走る思いあり。雲一点もなし。車中、『三国志』を心ゆくまで読む。人材がほしい。先輩たちにも読ませたい。皆、勉強が足らぬ。大いに、将来のために勉強すべきだ。					
2.23 火			ヘレン・ケラーのことば—。希望は人を成功に導く信仰である。希望がなければ何事も成しない。					
2.28 日			3月より読書を始めよう。何冊読むか。					
2.29 月			吉川英治の言葉だったか—。「民が峻厳ヲ求メルトキ、為政者ガ、甘言ヲナス程、愚ナル政治ハナイ」と。これが仁政善政といえようか。大事な問題と考える。真の人材育成のためには、何かあてはまる思いあり。					
3. 3 木			『三国志』中巻終了。三回目。幹部に読ませたいものだ。とくに先輩たちに。就寝、2時を過ぐるか。					
3. 9 水			『日興上人伝』読み始む。					
			『道程』—高村光太郎の詩である。 僕の前に道はない 僕の後ろには道は出来る ………。					
		E	『道程・典型』(現代日本名詩選)	高村光太郎/著	筑摩書房	1953	池文 911.56/Ta45	
		A	『高村光太郎詩集』(岩波文庫)	高村光太郎/著	岩波書店	1955	池文 911.56/Ta45	
3.14 月			『三国志』読み進む。関羽殺され、張飛死す。今、玄德六十余歳にして倒れゆく。丞相の忠誠を信じて、静寂のなかに黄泉の旅にゆくか。三十年の桃園の義一美たり、劇たり。					

創立者にみる、若き日々の読書—創価大学中央図書館「池田文庫」渉猟—

年	月日	曜日	同定	書名	著者	出版社	刊行年	所蔵	請求記号
3.16	水			遅くまで、読書。少々、眼が痛し。					
3.21	月			大阪午後4時発の「第2こだま」にて帰京。車中、読書と睡眠。					
4.3	日			久しぶりに『ホトギス』を読む。					
			E	『不如帰』(日本戯曲全集;現代篇第6輯)	徳富蘆花/著	春陽堂	1929	池文 912.608/N71/6	
			A	『不如帰』小説(岩波文庫)	徳富蘆花/著	岩波書店	1950	池文 913.6/To45	
			E	『明治名作集』(日本国民文学全集第19巻)不如帰	徳富蘆花/篇	河出書房	1957	池文 918/N71/19	
4.6	水			読書することを、再び決意一。					
4.25	月			『日蓮宗門集』—半ばまで読み進む。真剣に教学に励まねばならぬ。大哲学をもため指導者やある。教学なき思想実践家やある。					
5.4	水			『日蓮宗門集』—大半を終了。					